

川柳塔



No. 817

同人特集・戦後50年と私

六月号

『川柳塔和歌山』 300号記念大会

と き 8月6日(日) 午前11時開場

午後零時半締切

ところ J A会館5階(J R和歌山駅前)

事前投句 指定集書に2句(7月15日締切)

「海」 牛尾緑郎選

(懇親会への出欠明記のこと)

投句は出席者にかぎります

投句先 〒641和歌山市紀三井寺一一一一二

牛尾緑良宛

兼題と選者(各題2句)

「続 く」 河内 天 笑 選

「耐える」 中 村 重 治 選

「ハンカチ」 森 中 恵 美 子 選

「山」 田 中 好 啓 選

「歌」 橘 高 薫 風 選

◎投句は拝辞します

会 費 1500円(軽食・記念品・発表誌呈)

懇親宴 3500円(お申込みください)

主 催 川柳塔わかやま吟社

後 援 川 柳 塔 社

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を左記により募集いたします。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/4頁六、〇〇〇円 ③ 3/4頁一二、〇〇〇円

② 半頁九、〇〇〇円 ④ 一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月25日

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川 柳 塔 社

平成柳多留 第二集

A5判244頁美装本・価10000円(〒310円)

加盟柳社推薦句集・誌上大会入選句集・大会参加者自選句集の三部と川柳エッセーで構成。申込は左記へ

〒530 大阪市北区天神橋北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話(06) 35212210

麻生路郎先生

橘高 薫風

「自分の知っていることで間違いない
と思つてゐることは、殆んどみんなルノ
ワールに教わつてやつてきたことです」
とは梅原龍三郎画伯の言葉である。この
ルノワールを麻生路郎と置き換えると私の
思いに全く合致する。私は、実際には
画伯ほどの実力や自信には遠く及ばない
ものの、これは一つの求道に対する思い
入れ、むしろ宗教にも近い心の傾倒を表
わしたものと取れば、まるっきりの外
れた虚言とは言えないと思つてゐる。

現在、本社句会の出席者の顔ぶれを見
ても、路郎先生の聲咳に接した人は百人
のうち十人そこそこなので、今更の感は

あるものの先生の横顔の一端を述べたい。

路郎先生は自らに厳しく弟子にも厳し
かった。付かず離れずの人には付かず離
れず対処されたが、近づけば近づくほど
厳しさが増した。私が編集部に入つて間
もない頃、同じ編集部の一言居士の仇
名で個性派の後藤梅志氏が先生からお叱
りを受けた。会つても下さらないので、
毎日狭い玄関の間に正座してお許しを待
つ。三日目とかに折よく堀口堯人氏が来
訪されて事情を聞き、執り成してようや
くお許しが出たと言つ。後日堯人氏から
「あんたとこには、まあえらい弟子がい
やはるもんですなあ」とは私も聞いた。

路郎先生は生後一年三カ月で母と死別
里子にやられたり厳格な祖母に育てられ
た故か、「私の句は私の生活からにじみ
出た句であり、川柳によつて人間愛を求
めて止まなかった」と句集『旅人』のは
しがきに明記されている。

先生はまた野党派的ハングリー精神が
旺盛で、絶えず進歩改革を心に留めてお
られた。大坂形水氏経営の社の応接室に
先生揮毫の「足踏みをすな」の横額が掲
げられている。先生の若い時代の句に、
改札を出るも先駆者たらんとす

がある通り、先端を行く気概を常に持つ
ておられた。『川柳雑誌』の月刊励行、
朝日会館を満員にした「川柳の夕べ」の
開催、職業川柳人宣言、私にとつて思い
出の尽きない藤村メ女さんと随行した青
森県川柳大会への選者も、関西からは囁
矢であった。これに関して書けば際限が
ない。以上が霹靂火らしい先生の人物像
のあらましであるが、なお『中央公論』
六月号の田辺聖子先生の「道頓堀の雨に
別れて以来なり」を読んで頂きたい。そ
こには折よく路郎・葎乃夫妻の苦闘が真
に迫つて綴られている。私は一読、涙が
止めどなく溢れるのだった。



座右の句

来し方を溶かせば淡いむらさきか

(薫風)

私の句

残り火を力まず消さずはなりと

中野 樺子

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 麻生路郎先生

最近、思ったこと

川柳塔(同人吟)

西尾 栗名誉主幹が逝去

自選集

川柳の群像 中島紫痴郎

■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十六丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

路郎賞・川柳塔賞中間発表

渺湖抄

橘 高 薫 風 …… (1)

奥田 みつ子 …… (2)

橘 高 薫 風 選 …… (4)

東 野 大 八 …… (48)

高 杉 鬼 遊 選 …… (54)

西 出 楓 楽 …… (52)

高 瀬 霜 石 …… (77)

小 出 智 子 選 …… (81)

最近、思ったこと

奥田 みつ子



始めから弁解じみた話で恐縮ではあるが、本誌三月号掲載の本社二月句会「詳しい」の選者が桜井千愁となっていた。阪神大震災直

後の郵便事情の混乱のため、ゲラ刷りの訂正箇所を電話連絡した時、田中正坊さんが「千秀の秀は優秀の秀」と言われたのに対して、相手の印刷所の女性には「憂愁の愁」と受け取ったらしい。何か彼女に愁いがあったのか、または女性らしい感じ方なのか(これはあくまでも私の推察ではあるが)。結果的に誤植となってしまった。

男性と女性の考え方、感じ方の違いは今更私が言い出すまでもなく歴然としている。もちろん、共通のことも多いが、ものによつては、男女は全く別の種族に属しているのではないかと思われることもある。十年ほど前のある男性からの手紙に「小さいことを大きく思いつめることがおかしいと思います。隣近所、あの人の人と比べると、そういう気持にとらわれるので、女という誰もが持つ、男性には不可思議な感情ではないでしょうか。」

茴香の花

西出楓楽選

〈同人特集〉 戦後五十年と私

(84)

永田俊子・森川まさお・瀬尾六郎太・藤井正雄

安平次弘道・園山多賀子・結城君子

「町」

稲本凡子選

(92)

一路集「突然」

氏林洋敏選

(92)

「望む」

川島諷云児選

(93)

初歩教室「捨てる」

吉岡美房

(94)

各地柳壇（佳句地十選／時広一路）

田中 薫

(96)

■エッセー「川柳の眼」

田中 薫

(109)

五月本社句会

田中 薫

(110)

柳界展望

田中 薫

(114)

六月各地句会案内

田中 薫

(115)

■編集後記

田中 薫

(116)

座右の句

生き場所がここにもあった屋根の草

(米沢暁明)

私の句

方丈で生きれば捨てるものばかり

宮尾 みのり

くよくよすること何一つないでしょう」と書かれてあった。私が何を言ったか今は覚えていないが、。男性と女性はいくまでも平行線に分かり合えぬものかも知れない。その違いに面白さや、怖さを感じるから、句や小説が生まれるのであろうか。

○

この度の震災で、私としては珍しく五十句余りの句が生まれた。句の上手下手は別として、自分でも、よくこのようにたくさん句が生まれたと驚いている。恐怖にしろ、喜びにしろ、人は強く感じた時は、こんなにも次々と表現したくなるものだった。できることなら、常日頃の生活にも、些細なことに感動できるような心の持ち主でありたいものと自分に言い聞かせている。

川柳を始めたころに「いつもひらひらと触角を働かせなさい」と言われた。身の周りの人の動き、言葉、生き方、そして、草や木にも、猫や犬や虫にも、みずみずしい心で接しなければということが、今頃になって少し分かってきたように思う。

ある人の言葉に「自分の中に言いたいことを持っているかどうか。それが、すべてに優先する」とあった。毎日、喜んだり、愚痴を言ったり、しゃべっていることはたくさんあるのに、改めて「言いたいことを持っているか」と聞かれたら、さて？

川柳塔

橘 高 薫 風 選

熊本市 永田俊子

和歌山市 西山幸

花びらは兵の涙よ慰霊碑に

戦後処理に少し異論の花吹雪

きれいなまま落ちた椿のひとり言

カナリアが防毒班とゆく春愁

長いものに巻かれる雑魚のひとり言

猿に強い拳々服膺万愚節

鳥取市 小谷美ツ千

風と出逢った温い話をしてあげる

花の下 影は捨て身になつてゐる

これも縁 同じ呼吸で生きてゆく

立ちあがる時まで溜めてゐるうねり

ネクタイを選ぶ楽しいひとときよ

月光に仏の忘れものがある

さくら満開 世は事があり事もなし
性懲りもなく通院のバスに乗る

神戸 淡路に想いを馳せて日々怠惰

記憶力 朝顔の種 罌粟の種

春の服どれもわたしに似合わない

紙送り一本二本 誕生日が暮れる

鳥取県 新家完司

大和男子さくらさいたらばかになる

弱い人と比べてばかり弱くなる

パチンコ屋に集う貧しきひつじたち

駅裏の闇のあたりの面白さ

夢の中で殺めた人は数知れず

温かい人に囲まれ腐っている

弘前市 高瀬霜石

一流と二流を分ける丸木橋

父さんは明日も仕事だお茶にする

判子まで押して最後にうとまれる

天才も愚者もいつかを繰り返す

行き先は青春 波のオートバイ

若いていいね大きな涙粒

大阪市 西出楓楽

正論と願望たがえそうになる

やさしければいいばあちゃん役どころ

ときにより孫と老母とをだしにする

三猿を守りへそくり貯めている

数学が得意 貧乏しています

身のほどを花はそれぞれわかまえる

尼崎市 春城年代

歯を抜いて母からもうた歯の幾つ

錠剤を十錠も飲まされている

町古りて人また古りぬ 傾きや

焼酎にする気の目刺焼いている

春は良し老いの胸にも灯が点る

囀りや廃墟のまちに陽が昇る

西宮市 亀岡哲子

地すべりが夜も続いている亀裂

きつかけを待つて溜っている涙

胸キュンと痛んで次に空になる

意味のない掛声だけど生きる糧

軟らかいタオル汗にも涙にも

新聞紙に包むほんとのにぎり飯

西宮市 西口いわる

瓦礫の中で何かを探す人のあり

神様のタクトも時に意地悪い

花が咲いた花が散ったと聞くばかり

皿洗う嫁と平和な話して

空の青 命の軽さなど思い

急がずに川よゆっくり流れよう

大阪市 本間満津子

湯水のようになどとこれから言いません

まあこんなもんやろうとは思えない

終り良ければよし割り切れてごめいさん

命有るものにもうなりたくはない長寿

憧れてまだ近寄れぬ紫よ

緑の風よ清めておくれ何処もかも

鳥取県 土橋螢

負けた日の無念を今も抱いている

海軍の星は桜の花だった

八月に法事の子約しておいた

真実を噛みしめ青い空をみる

吉祥天の紅に咲く花よ

感性の鈍いおとこが嗤っている

弘前市 蒔苗果林

正眼に構えて辞令見せつける

合掌を薔にそして花咲かそ

フィアンセに会うペンギンの愛もらう

一人居の春です長くなる電話

馬食枝を伐るに切れない鬼三日

花盛り孫に勉強言わぬが花

弘前市 佐治千加子

移り住む磁石震える北の町

一年後会おうと言って逝った夫

会いたい人ばかり日暮れの水平線

魚ごころ水ごころなど知りまへん

落の臺午後やわらかな裏通り

おでん鍋愚痴も文句も串刺しに

吹田市 古川喜美子

菩提樹のハミング共に夫あらず

大寒の地震 樹々みな裸なり

樹にもたれ忘却という安らぎに

ブランコを天までそのまま帰らない

日々好日転んでもすぐ起き上がる

皆聞いて欲しい黙っていて欲しい

馬笑う笑う地面を蹴りながら

皿にこびりついている骨 愛しとも愛し

通夜更けて舌出しっぱなしの浅刺かな

黒猫の優雅に去りしあとの闇

言葉より一瞬早く桜散る

米子市 新正子

祭り笛 一個師団を呼びもどす

善玉と悪玉がある嘘の種

めし 金と簡単に言う王子さま

大往生 虹が出ているお葬式

抱き留める乳の匂いのする未来

米子市 林荒介

ひとつずつ拾って今日を組み直す

速達の封を切るとき潮騒す

鱗粉を残して蝶は出ていった

河口には大きな人が立っている

さざ波に月と渡った跡がある

松原市 小池しげお

すばらしい空想をする化粧水

居眠りの名人でいて隙がなし

追肥をたっぷりもろた茄子の花

糟糠の家内をやっと連れて出る

蜘蛛の巣を見付けて一週間になる

堺市 桑原道夫

松原市 玉置重人

朝昼晩 律義に薬飲み分ける
快復の兆しうれしい豆ごはん
春うららシナリオ変えてみようかな
貸金庫 株の冬眠まだ続く
花の香を胸いっぱい中途下車

藤井寺市 吉岡美房

水仙の白に見付けたころさし
菜の花の自信が蝶を眠らせる
木蓮の花から届くラブレター
春愁を纏うが如し紫木蓮
西行の花に埋もれし涅槃恋う

高槻市 川島諷云児

自分史を書く貧しいペンだけで
愚痴になる酒なら飲まんほうがよい
定年でやっと治った偏頭痛
花道で夢一つ捨て二つ捨て
人間の欲に打てない句読点

羽曳野市 榎本吐来

ボク男 今日から黒いランドセル
老婆の小言を愛の果てと聞く
したたかな笑顔を見せて車椅子
父権まだちよっぴり残るでかい碗
テレビ新聞サリン オウムが飯の種

八尾市 片上英一

哀しげに空を見上げる風見鶏
考える葦もいつしか冬の岸
ほほえみのみろくばさつのゆびのさき
指切りをむかしばなしにしてしまふ
順番と言われ適役だと言われ

五所川原市 斉藤 岳

入学の式辞じっくり農を説く
歳時記の春のページに浮く妻よ
白鳥の旅立つ声や今朝の窓
賢治の家ありウラの畑におりそうで
上九一色 好きな地名の村なのに

富山市 舟渡杏花

さくら散る そろそろ答え捜さねば
シーソーの相手ぐらいはまだ出来る
足の鎖引きずる音をたてぬよう
牛歩の列 黙殺と言う手もあるが
老鷲の来るを待つてる 梅古木

鳥取市 両川洋々

蝶二つ真昼の情事かも知れぬ
ふところの中で切り札錆びてゆく
迷い抜く生きざま亡父の墓に聞く
堂々の賄賂だ表あけてある
俺の墓に友よ花束など要らぬ

鳥取県 鈴木 公弘

猫を飼うまでは普通の声だった
目をむいた貌に石を積んでいる
昼の月まだ納得はしていない
食い扶持を頼んで回る選挙カー
花捨ててから人影がよく見える

鳥取県 江原 とみお

流し雛目線離れてから沈む
背水の譜をふところに討死す
哀しいかな火の輪くぐりがうまくなる
空びんの数は忘れることにする
さくら散る綿飴やにも散っている

島根県 松本文子

花吹雪 女同士の安来節
花咲いても散っても知らず病母その後
恐ろしいことにはふれず花の下
沈黙は金か卑怯かネギ坊主
惜しい人と言えばさっさと散っていく

竹原市 小島 蘭幸

酔い少し 夜桜に娘を従えて
妻の涙も母の涙もオアシスだ
メリーゴーランド笑い続けていられない
パンが好きだからパン屋になると言う
みんな未完で言いたいことを言うて飲む

尼崎市 田中 薫

誰を待つのか吉祥天の闇継ぎ足して
たんぼぼの生まれてはたちまちに野はかげろい
白皿にまなこは濡れて鮎のたましい
天と地の間にひらくゴッホの手紙
ラーメンのどんぶり抱え小悪党

尼崎市 春城 武庫坊

黄砂無限 戦友と別れて五十年
晩学にわからぬカナが増えてくる
被災して夢もう一度描き直す
青空を追って終点まで走る
桜吹雪が緑迎えに山に消え

西宮市 奥田 みつ子

仏壇の傷み そのままわたしの傷
人形を抱いて避難所老いひとり
三叉路に元へ戻れと書いてある
電話口 向こうも巨人観てるらし
人間の皮は被っているものの

豊中市 田中正坊

十年日記 五年目を書くいのち
十年日記 余白は五年七か月
連翹忌 妻逝きしより十二年
ひと月に法事が二つ花ぐもり
意外性 無党派ノック 青島だあ

赤ん坊の泣き声 存在感がある

砂川市 大橋 政良

何事もなかった朝の非常口

ライバルの去った波紋が立っている

鉛筆がしずくしている一行詩

窓際に背広の案山子立っている

黒石市 千葉 風樹

死ぬことを止そうと思う桜咲く

わたくしが貧乏神ですか妻よ

あぶり出すとバツカスが出る招待状

除雪車というマンモスが吠える闇

ひと冬を目は閉じたままにしておこう

弘前市 肥後 和香子

ふわりかわす術 金魚から学びたり

春雷よエイプリルフルよ譲らぬ日

なにやかや そりゃあつての男と女

噛みついてくる男らを調教中

津軽万歳 四月の雪見酒に酔う

仙台市 川村 映輝

山火事と見紛うほどの杉花粉

九十になっても明日を考える

談合に反発無党派に投票

花だより蔵王は雪に埋もれてる

老いらくの恋食欲衰えず

言い違ひしたまま通すいい度胸

富山市 酒井 輝

通知表なまえが良過ぎたと思う

なべ底も破れ相場の液状化

雑炊の店で息づく古都の旅

老い独り暗い世紀を迎えそう

横浜市 菱田 満秋

死に水はとってあげると愛される

億という話はひとの金ばかり

五十回忌わたしの戦後おわらせる

自販機の不愛想には腹たてず

湯豆腐の道具揃えて独り酒

大阪府 榎山 隆

シバ神の哀れ発泡スチロール

校章を戦闘帽に付けた頃

油断してゆつくりできる人と飲む

本心でのべつ幕なし人を恋う

それぞれが行き先ちごて同じバス

大阪市 稲本 凡子

嫁から姑 生涯鈴が鳴り止まぬ

横柄な先輩がいて闘志湧く

無防備に生きると言葉まで忘れ

耳学問受けたい耳が鳴ってくる

日本地図 雨欲しいとこ困るとこ

大阪市 神夏磯 典子

標的のバラ一本がたおせない
レジの音 忙しい裏にある孤独
生れ変った美人になれるかも知れず
人有す袋破れたにがい酒
ゆったりと乳房は春を謳歌する

大阪市 大塚 節子

鉢並ぶ もみじの若葉朱と青と
忙中閑あり みんな忘れて寝ています
春の風邪くず湯の熱さほろ甘く
渋皮煮 松茸飯を父の忌に
定年の僕も走った発車ベル

大阪市 大河 未佐子

個性派の金魚 寒色着てみたい
寝たふりの男に期待かけている
実の中に南の島の魅惑あり
ゴールまでもたぬが一度は前に出る
魅せられてしだれ桜の紅となる

堺市 山本 半銭

満開も三分もあつた旅の窓
曼陀羅の散華を一つ拾い上げ
玉ねぎがふとる雑草奴ものびる
もたれてる壁が冷たい時移る
ほろ苦い悔いを反芻して更ける

豊中市 安藤 寿美子

言わでものこをひとことつむじ風
チャネルはどこもなるほど世紀末
どこからかおこぼれが来る花吹雪
過ぎてゆく時を惜しんで手をのばす
伝統の瓦の屋根を重たがる

豊中市 吉田 あずき

半月の隠しおせぬ恋の傷
たくらみを御破算にする五月晴
春の詩の眩しさひとり陰を待つ
鶯が窓辺へ念を押しにくる
筈のどこかやさしい体温よ

岸和田市 古野 ひで

花を愛で人愛で西行しのぶ寺
忽然と友逝き給う桜散る
余生なぞと哀しい事を言わないで
常識と共に生きて目立たない
一泊はころあいですと老いの旅

岸和田市 高須賀 金太

生まれた家は文化になっていて哀し
学び舎は鉄筋になっていて哀し
アルバムの両親を見ていて哀し
なにわの河川埋められていて哀し
放哉 山頭火に憧れていて哀し

岸和田市 岩佐 ダン吉

守口市 森川 まさお

豊作を祝えぬ農とは何だろう

モーニング着てます僕はチャップリン

惜しまれて身をもむように桜散る

選挙だ僕にも頭下げてくれ

公約はパンパカパーンにせぬように

八尾市 高杉 千歩

飽食の中でいくさが迫ってる

地動説見えない敵に挑まれる

長雨に飢えたる民を読み終る

難聴で噂の外で毬をつく

時計買う長生きくらべ始めよう

富田林市 池 森 子

祈り千回窓が少しずつつ開く

祈られているのか風が温かい

一行のメモで苦しくなる呼吸

反り気味に芽を出す母のいない春

一欲を盛るそれだけの我が土よ

吹田市 山 本 希久子

梅さくら順番を待つ春の庭

音のない調べ花びら舞い落ちる

思ひ出よあつけらかんと花が散る

春の蝶ひらりと旅に出たくなる

夫婦茶碗の小さなひびをいとおしむ

河川敷の野球大きな背番号

石ころの波紋が遠くまで伸びる

満ち潮になると明るい河口町

未亡人ノートを持って旅をする

まほろばにしっくりしてる大和棟

守口市 結城 君子

静寂の余呉湖 萍動かない

何ほどの蓬いれたか餅のあお

孫の血に農流れいる土筆摘み

一鉢に一花 椿のいのちなり

紅梅に飽きくちなしに救われる

寝屋川市 柴田 英壬子

黄信号ばかり95の春に棲む

目を病んで心は麻を綯うごとく(眼底出血)

ハンカチをきつちりたたむ物想い

哀しさは心の鑿にぶく鳴る

眩む刺激のがれて回廊のぼたん(長谷寺)

寝屋川市 堀 江 光 子

子の夢へ家業のことは口にせず

焼き捨てる文のけむりがこちら向く

早春の向う岸ゆく郵便車

都心にて春の匂を知る夕べ

夢一つ見果てぬままを夢として

寢屋川市 岸 野 あやめ

危篤臨終それからあとの走馬灯
被害妄想 雨漏りの夢ばかり見る

生き仏とや秘仏とや礼拝す

筋道を通し氣骨が折れました

ひとりぶん作る惣菜からすぎる

枚方市 海老池 洋

枝ひとつ二つと枯れた私の樹

洞をもつ老樹の羅漢とも思え

神様の仏様よりよく叱り

虹色に遠いロシアの三色旗

列島を北へと春の織りすすむ

和歌山市 福本 英子

声援に負けて空振りしてしまふ

静寂が戻ると哀しい選挙カー

脳の皺無くなり顔の皺増やす

罹災百日姑から消えた座り胼胝

手に負えぬ想いを秘めて妥協する

和歌山市 桜井 千秀

一皮むけば種の仕掛けが見えてくる

のほほんと過ごす暮らしも肩が凝り

溜め息を鉢の金魚も不思議そう

尻込みをするほど初でないつもり

彩褪せてまでも私を語る過去

和歌山市 木本 朱夏

たんぽぽの黄からはじまる春の詩
肩口がさむくて群れを出られない

解読の出来ない胸がそこにある

からっぽになつてゆっくり満ちてゆく

雨はしとどさくらの罪を消すように

和歌山市 宮口 克子

真直ぐに進むあなたに投げた石

這い上がる力をみてる冷静に

堅物の上司酔うたらうたう唄

声かけてほしい屋台のひとり酒

ハイハイと聞き流してる聞き上手

和歌山市 田中 輝子

耳遠い父にかわつてする会釈

わかり合えぬ人との溝は軽くとぶ

耳打ちの底に沈んでいく五体

暗黙の了解があり盛り合せ

一切は無に満ち潮の静かなり

和歌山市 岩本 美智子

被災地のさくら凜々しく咲き誇り

窓はキャンパス毎日描いているさくら

外は嵐 居間のさくらは婉然と

猫の目の青深くなる春の宵

水滴の析りを刻む磨崖仏

加古川市 吐田公一

奈良県 長谷川 春 蘭

信心も鰯の頭 無事無難

春雨に訪う人もなし吉野山

順番が来るし残しのないように

学校に慣れて生意氣二年生

他所の子の遊び仕付ける管理人

姫路市 大原 葉 香

夫婦別姓この子誰の子あなたの子

牛馬の声絶えて久しい田舎道

うすつべらな命ながらに今日を生き

まだ答え出ぬまま闇を一人ゆく

かつかつかつあの足音は女だろ

京都市 山海 友 熙

薪能 冠者は身軽な足拍子

紅を引く鏡の中でやせ我慢

机位置かえて逢いたい遠い人

花びらの地に着くまでの思いごと

なんだ坂こんな坂六十路のひとりごと

奈良市 米田 恭 昌

健気にもカナリアがゆくガス探知

白毫寺閻魔に竦む小さな嘘(白毫寺 二句)

お賽銭 閻魔王にははずんどく

ダンブにも心和ます娘の写真

倦怠期 我が家も風いで音もなし

仕合せを掴むに小さい灯をともし

長生きて濁世また良し老いの坂

賽投げてとどかぬ願ひ老いの愚痴

晩学に辞書も重たくなりなりにけり

降ろされてぐったりしてる鯉のぼり

倉敷市 小野 克 枝

化け方の下手な狸が居て平和

おしゃれして心貧しい垢をつけ

一泊の旅を家出のようにする

バラの棘で綴る女の相聞歌

道草の過去は問わないやぶ椿

竹原市 時 広 一 路

昼寝でもしよう言うこと何もない

知らぬから軽い気持ちで言った口

生きている生かされているさあてさて

駐在所便りも嬉しざら紙刷り

空高し音の聞こえぬ飛行雲

竹原市 石 原 淑 子

麦踏み of 麦の痛みを足の裏

来年も逢えますように花の下

やさしさの真ん中に居てひとりぼち

リフレッシュ トイレと風呂の持つ魔力

私を円くするより術はない

広島市 藤 解 静 風

ある時の妻は一番遠くいる
終点になるほど遠くなる虹だ

父を越せたらきつと淋しくなるだろう
ウインドに時々僕をおいてみる
心境の変化もあろう寝て待つか

下関市 石 川 侃 流 洞

隠しても本音が見えるバーコード
潔白の言い過ぎ黒い翳動く
ダルマ目を貰うて身の程もう忘れ
立て板に水 弁解が白々し
選挙ポスターとても気になるうす笑い

倉吉市 野 口 節 子

白無垢に包み切れない愛の唄
身辺でお皿の割れる音がする
夢ばかり追って枯野に出てしま
万策がつきてお祈りしています
小肥りが良いと主治医がおっしゃった

米子市 金 山 夕 子

まんざらでもない世間が怖くなる
出逢っても出逢わなくても只の人
酒と言う液体を飲む疑わず
笑いますかラップラップで踊っている
チューリップ咲いてチューリップマラソン

米子市 光 井 玲 子

花の下みな輝いてゆれている
無位無冠それでもフアイト失わぬ
亡母を恋う男は妻にやさしかり
夕ぐれの駅でしがらみ断ち切れた
風呂敷を広げストレス野に散らす

米子市 林 瑞 枝

お子様ランチのスプーンに昼の陽が高い
瞳の奥に少年光るものを抱く
春眠や千年さぐらの兵の墓
その癖を治して生きる観世経り
秘めごとを洗い流して波が引く

米子市 青 戸 田 鶴

桃の花 老いても雛は飾りたし
風邪ひいている間に花が咲いていた
好奇心強く落着かない私
眠ってる私をたたく闇の父母
星月夜 友もまじっているだろう

米子市 澤 田 千 春

頬杖に故郷の小川が流れだす
勤め帰り裸足の雨の遠い日よ
身体中が炎えそうになる夕やけだ
助け舟 辞書は手近においておく
股のぞきすてきな風に逢えるかも

米子市 白根 ふみ

大脳を洗う雪どけ水のなか
春宵にやさしい面を彫りなおす
そのことにかかわらないで桜さく
平凡な月日の重み地震のあと
一本になってコーヒー缶しずか

米子市 川上 より子

自縄他縄 風が背中を押して過ぐ
山ふところで鳥に花にもなり切れぬ
土筆はい出てオウムの樹々は深く病む
千の草結ばせてから草刈りに
政界に耳目ふさいで糶を浸す

鳥取県 石谷 美恵子

桜満開 喜びごとが倍になる
少しずつわたしの彩が城に増え
外食に飽きて弁当派へ戻る
おごられてすっかり愚痴を聞かされる
泥縄のマナー結納無事納め

鳥取県 乾 隆風

古傷を桜の下で温め合う
横着をするほど空が晴れてくる
ネクタイを外して買物かご提げる
煩惱のかけらも見えぬ白い骨
葬式からもどり大の字に転ぶ

鳥取県 乾 喜与志

白寿坂の向うは二十一世紀
少年に村の祭りがのしかかる
半世紀眠った骨が戻ったぞ
唇をきりつと結ぶひとが好き
子等去って静かに筆をとっている

鳥取県 土橋 はるお

よう来たと言った言葉信じよう
美人から歌をうたって下さいな
一升びんを十日で飲めは酷じやない
活断層の上で花見をしていたり
この先は愚痴になるから止ましよう

鳥取県 土橋 睦子

いい旅の終りに丸い月が出る
真っ白いページに初夏の絵を描こう
六十路坂 知恵の袋に傷がある
山が萌え男を花粉症にする
八十八夜 父はは想い茶をすする

鳥取県 さえき やえ

大江山 こなせぬままに季が移る
あたたかい言葉さし身のつまにする
亡父の遺産 井戸はだいいじにしておこう
転任の辞令を拝むひとり部屋
好きだった人が地震で逝きました(阪神大震災)

松江市 柳 楽 鶴 丸

ヒヨウ ショウ ジョウ 昔話になりました

朝昼晩ねむたい時に寝ています

粹なネクタイ ワンピースの端切れです

影法師そんなに黒が好きですか

辛抱をしたのは私 いや僕だ

出雲市 竹 治 ちかし

遠くから見れば私も群の中

孫を抱く才女も祖母の顔となり

都市砂漠 耳に季節の音がせぬ

親と子の酌み合う酒にある想い

酒飲まぬ妻が息子の酌をする

島根県 小 砂 白 汀

蜜蜜 蝶蝶 蝶蝶 土手の春

しとしと春雨土を慈しむ

快い疲れで眠る春耕や

さよならの辞令もくれぬ自営業

ストレスを一気に吐き出しさくら咲く

島根県 堀 江 芳 子

僕よりも先に逝くなど酔ったふり

慰めを言わず夫の手握りしめ

片ときも離れぬ のうまくさんまんだ

地球異変論すか桜まばら咲き

一喝のあと詫びられて詫びかえす

島根県 堀 江 正 朗

わからない闇の向うにする努力

一輪の桜手にしていい花見

どんな日も愚痴聞かせない妻といて

深呼吸疑問は深く闇に吐く

妻とだけ温めていることの良さ

島根県 石 飛 水 煙

語り継ぐ古老絶えゆく石仏

空白の日記才能嘲るか

恋ゆらぐ眉引く線の手がそれる

忘れよう忘れまい母の逝きし日を

カサカサと世相砂漠に似てかわく

香川県 池 内 かおり

シャッターの遅さに笑顔くたびれる

仲良しになった歯医者へ忘れ物

カサブタが取れるのだって日がかかり

公認のボーイフレンドつままない

嬉しさは日を経る毎にフツフツと

今治市 矢 野 佳 雲

開発に虹の色数へってくる

末世だと聞いて慌てぬ歳になる

臍の緒を切られて母を恋しがる

人の軽重はかる私の損得で

バレンタイン的の一つが定まらぬ

福岡県 横地東川

弘前市 村田善保

晩成が喜寿の一日灯を消せず
地球保護 生物憐み令が要る
老邸の除草シルバーはパートする
悄然と出れば大地も背を向ける
鎖引き摺って自由だ犬走る

唐津市 久保正剣

愛燦々女は涙から生まれ
点滅の余生に下絵まだ序章
予知出来ぬ殺人ガスと震度七
選挙戦生きる落差を見せつける
校門の序列と違う紳士録

唐津市 仁部四郎

国会に呼ぶとトカゲの尾が生える
口軽い男のそれが自衛策
年号に関係もなく暗い春
端役だがドラマの溝は埋めている
健康な証拠に民が騒いでる

札幌市 瀬尾六郎太

やはりねえスタンドまばら甲子園
ゲーセンで孫にも負けじ古希の祖父
マコガレイ二時間一匹三戦果
流行歌いつかどこかでブツンコ
ランドサット地球検診警告し

新しい生命芽生える震災地
人生の門出にバラを植えました
心まで握ってくれた手の温み
草笛が城趾の春を連れてくる
アドバイスだけでは済まぬ金も要り

黒石市 相馬一花

札束で叩くとぐうの音も出ない
追風に感謝しながらゴール・イン
母親に部屋を掃かせぬニキビ面
難しい女性名でもすぐ覚え
激励の言葉は要らぬ熨斗袋

十和田市 阿部進

切り札を持って居るらしゆとり見せ
投書欄 匿名だから信じない
ひたむきにプライド守り売れ残り
資金ぐりつかず空しいコップ酒
一途なる意志たぎらせる朝げい古

町田市 竹内紫鏑

外来で肩を叩いて先に逝き
大言壮語 平均寿命超えてから
万歩計五年日記も休まない
旧型のテープで亡母の三昧仲間
妻は秒 私は分の読みで起つ

静岡県 安本晃授

不器用な粗大ゴミです老いの父
ボンヤリと暮らす苦もある蝸牛
御香典の中は身を切るような金
肩の荷を降ろす暮らしに残る愚痴
文章にすればさもない経歴書

富士宮市 渥美弧秀

視野一ぱい若葉愛でつつ老夫婦
鍵盤に十指躍って梅雨晴れる
老友の訃報が続く梅雨最中
荊妻の苦言流して独り酌む
陽の出富士 全身しばし吸い込まれ

静岡県 藺田漠杏

思わくはどうあれ民意地方選
昆虫のしぐさ科学で割り切れず
何事もなかったように桜咲く
阪神越後 東海地震とり残す
この縁は嘘でも言つてまとめよう

名古屋市長 越村枯梢

ネクタイ掛けいろいろあったなと思
声高く呼べば応える幸もある
散るさくら眺めて老いを悔まれる
春夏秋冬ときめきもなし老いの庭
喪服着てこれが一番よく似合う

京都府 稲葉冬葉

ずばずばと切つてブラックユーモア
一寸の虫にも期待感はある
死ぬの生きるの十代の恋うらやまし
ひとりの昼にモクレンが風に散る
万事塞翁にして土に還るなり

京都市 都倉求芽

雑草が春まっさきに花をつけ
あのひとの声が虚空に散るさくら
背をのばして歩くと歩幅が広くなる
男女同権なんてちよつとの間だった
天国行切符は丸い方がよい

和歌山市 堀端三男

太陽の沈むが如く恩師逝く
Uターンのふんぎりついた震度七
善意から出た失敗は責めずおく
腹立ちを宥める石を蹴りながら
四面楚歌 初心を枉げぬ老いの意地

和歌山市 青枝鉄治

ひらつたく言えば権威に傷が付く
商魂に日本の秘境また消され
地に這って貰った票をもう忘れ
脳みその活性化へと買った辞書
但し書き付けているのは逃げ道か

和歌山市 山田 高夫

追憶にときおり疼く古い痕
対の箸 長所短所を知りつくす
背伸びしているから足が地につかぬ
枯木にも花咲かそうか老いも春
煩わし世も割り切れば住みやすし

和歌山市 玉井 豊太

墨太く黒く力の額がすき
書道展でてから筆のいのち知る
進め進めと声をからして風を切る
太陽のもとで生き生き子等はしやぐ
雑草に育ちお金の使い分け

和歌山市 池 永正雄

夫婦してきつねうどんの昼下がり
不景気の事情を知って花は散る
新幹線 窓を開けたい時もある
似て来たぞ貴より若の好きな孫
古代より三尺上に住んでいる

和歌山市 内 芝 登志代

気分爽快 青天井の畑仕事
自分史の故郷よいとこ温いとこ
もう駄目と思った時はチャンスです
逆境へはるかな亡母が夢枕
翔んでみて主人の良さがよく解り

和歌山市 玉置 当代

ちらし寿司作っています外は雨
被災地の胸にりんごの唄響く
地球全体付けたい空気清浄機
ヤボ用を山ほど積んで昼寝する
渦中から逃れ山菜摘んでいる

和歌山市 山口 三千子

醒めないで夢しか会えぬ亡父と亡母
笑うこと忘れて老いが加速する
余生とはつつかい棒の無い生活
乗せられてシーソーゲームまだ続く
忍従の涙蛇口を開け放つ

和歌山市 北山 好笑

まだ夢のつづきが欲しい薄化粧
脇役でも心は同じ火をともし
直線上少し本心ぐらついて
小さい嘘かくして朝の陽を浴びる
いいことがありそう波が陽をはじき

和歌山市 榎原 公子

親と子の間でひっかかる本音
愛という腕で縛るエゴイズム
傘のない男の遠い道のりよ
たったそれだけで新聞待っている
おおらかに性を語って落ちになる

神戸市 山口 美穂

失ったものは忘れてと桜咲く（震災）

三分咲き今日から無職と言いきかす

定年という不自由と自由の身

気負わない日々へ老母娘の再出発

還暦からの出発小さな花を植え

神戸市 木村 貴代子

神戸では防じんマスク デイパック

避難した公園 花見はテントから

ボランティア帰りゆく日に雨が降る

避難所にとりのこされるこわい夢

仮設にはたった一年住めるだけ

西宮市 門谷 たず子

プラス志向になれよなれよと樹の新芽

久し振りのカレーに正気とりもどす

言うている中にその気になってくる

ほんの一言わたしの胸が充ちてくる

溜息も夫と同じようにつき

宝塚市 吉田 笑女

倒壊を免れ老母も家も無事

歯が抜けたみたい家並に穴があき

被災地の雑草今がのびざかり

辻褄の合わぬ話と聞き流す

いい話迷わずはいる輪の中へ

宝塚市 中田 純次

給わりしいのちを生きるあるがまま

離れ島だが楽園のわが書齋

名付け親 大樹夢みて夢のまま

トラブルの相手女性性は苦手です

紙一重弥陀のご加護にふと気付く

川西市 松本 ただし

終章へあけずにおこう玉手箱

十字架を背負いヨイシヨの山の道

ほどほどの垣根が保つ風通し

空っぽの壺に騙されそうになり

逃げ足になった男の花粉症

川西市 氏林 洋敏

大往生座右の銘にしています

被災地がきれいに整理されている

飲むとすぐ寝るから妻に嫌われる

エリートの子を紹介したくなる

アリバイのために指紋を残しとく

姫路市 中塚 遊峰

自画の雛掛けて今宵は柳友を持つ

金策も縁無く生きて古希の幸

眼を閉じて帰らぬ日々をなつかしむ

床並べ語り明かした亡母の部屋

六度目の亥追いかけて古希の坂

姫路市

丁 坪 サワ子

大和高田市

岸 本 豊平次

母の声耳朶に溜めてる被災孤児

神仏は不在か瓦礫の中の亡友

真実は一つへ嘘が渦を巻く

幸せのドラマの裏を見ましたか

沙羅の花 来世信じて散る浄土

奈良市

宮 口 笛 生

奈良県

田 中 紀美代

三月に食べる西瓜の味がない

ランドセル一年生の顔になる

夜桜に地震サリン禍みな忘れ

ビールならのめる女の連れが出来

真っ白な紙には書けぬ嘘である

奈良市

天 正 千 梢

岡山市

井 上 柳五郎

スタートは右肩あがりの時だった

オロレフ山の大パノラマに喝采し

笑い袋のカプセルが溶けてきた

輪郭は浄土なりけり冬木立

丸木橋渡って越し方たぐりよせ

大和郡山市

坊 農 柳 弘

岡山市

花 田 たけ志

野の花に季節尋ねる一人旅

ジューンブライド今日だけ鳴く雨蛙

震災を知らぬツバメが戸惑いて

須磨寺に供養の鐘をつきに行く

湯上がりはあなた任せのフルムーン

妻病んでおふくろの味を遺つてみる

流感と花粉症 電話で話し合い

夜桜に来てたこ焼きの列に入り

芽は未だ堅いが幹は春の艶

庭の木の影が窓から消えて春

奈良県

田 中 紀美代

のら犬が詩人のような目で通る

ふるさとの話する人寄つといで

被災地のテント桜が散り初める

どっちでもええとはうちの無党派層

葉桜になって今年が見えてきた

岡山市

井 上 柳五郎

浅知恵と嗤った方も乗り換える

少子化に老化町内静かすぎ

大震災醒ましてくれた平和ボケ

よかったな人ごろしせず兵終り

三月も為すことできず去ってゆき

岡山市

花 田 たけ志

仏壇と晩酌分け合う甘露かな

遺言を日頃の仕草で見せておく

被災地の孫へ財布も四苦八苦

若き日のつまずき受賞を取り逃がす

若死にの母の思い出うつろなり

花好きの陽に導かれ庭の下駄

岡山市 川端柳子

しあわせを大事に抱いて眠れない

顔知らぬひいじいさまの字をなぞる

生まれた時 母を亡くした人と聞く

住所録 無事を祈って凝視する

倉敷市 田辺灸六

年寄りの愚痴だ勘忍しておくれ

世話好きの雑事に長けて無位無冠

勘高い声でいつもの根深節

自惚れて心の美人とは言えず

嫌煙の君もむかしは煙草好き

笠岡市 松本忠三

先輩が割勘の分お支払い

頃合いを見計らってのお失礼

上様と書いてこの場を繕うて

賽銭の額神様も知らん顔

敬老になって名刺も不用なり

岡山市 荻野 鮫虎狼

老人医療頼りきっての不倖せ

目を閉じて聞く音楽が少なすぎ

冬木立石も無言の中に座し

一生を怒鳴られ通して幕が降り

C Mへ歩調揃えて独り者

酒くさい煙草くさいと言うて暮れ

岡山県 小林 妻子

路の臺お前震災なぞ知らぬ

飼犬はリンスまでしてもらってる

急行白兔もテレксаそうに走ってる

夜食なぞ運ぶことない子供部屋

岡山県 矢内 寿恵子

住みにくい世相列島狭くする

少子化の未来を思う世紀末

置き去りに会って長生きしてしまう

辛抱にとことん慣れた飯茶碗

丸木橋渡る大きな賭がある

岡山県 山本 玉恵

保護色が少しうすれた背がさむい

七三に構えたままで夫婦独楽

秘策一つ物の見事に見破られ

その先は言うなと妻の目が笑う

古里の風と余生を組直す

岡山県 二宗 吟平

乾杯で有線電話とお別れす

有線のテレビわが町塗り替える

予定より遅れ雪洞呆けかかり

女子大生髪黒々とバックシャン

お彼岸の彼方此方で出た涙

呉市 榎田英詩

花野混む神のお召しを待つ人で

さつとさつとチャック釦を嘲笑う

びっくり箱 妙なるメロディー溢れさす

泊まれとは言つてはくれぬ若夫婦

五泊六日ガイドも客も里ごころ

廿日市市 林野甦光

お隣のピアノに耐えている失意

元気でる水飲んでます真夜中に

喜劇見たあとの宿舎の蜷汁

あした来るはずのトンボに今朝出合い

橋架かる噂不安な島暮し

竹原市 森井菁居

病棟の裏で桜が咲いている

いい方に取りこれからだこれからだ

一期一会ナースに甘えておくもよし

春になったらなつたで募るエゴイズム

春日遅々 退院の日が決まらない

竹原市 古谷節夫

幸せは句を彩る土と生き

無党派へ世直し祈る票が伸び

円高へ株も預金も無い暮らし

賞味期限とつくに過ぎた政治家で

ハードルを下げてでも跳べぬ時がある

柳井市 弘津柳慶

仏壇へそろそろ行くよと手を合せ

つまみ食いかあちゃんが居たら叱るだろ

じいちゃんの咳は風邪ではないらしい

今更に過去をさぐって何とする

留守をねらってへソクリをさがし出し

宇部市 平田実男

嫁のつくった物はうまいと言うて食べ

エプロンの下 焼芋のいい匂い

肩書きは仮面の一つかも知れぬ

頂上はない人生も川柳も

荒城の月思わせる過疎の月

美禰市 安平次弘道

失敗作ばかりがたまる春かしら

金のいる話しずかに聞いている

悪女にはなれず才女になおなれず

愛嬌がよすぎ尻尾がすり切れる

祝福をされて他人の顔になり

鳥取市 西原艶子

振り返る小径にあった雨期乾期

子が病むと腹の底から母になる

注目をされると不眠症になる

貧しさに慣れた両掌がたくましい

受け継いで欲しいわたしの青写真

鳥取市 西村 默光

春風へやつと己を取り戻す
嬉しさを隠しきれない大ジョッキ
酒に酔い親父が急にいなくなり
貧しさの底に豊かな礼智信
相談をしても鏡の愛想なさ

倉吉市 野中 御前

晩学の脳細胞が目覚めない
その時は死んだ真似して生きのびる
福耳を持ってふところ病んでいる
占い館へ通う病だれ
前歴を捨てると軽い飯茶碗

倉吉市 最上 和枝

わたくしを待っててくれる露の臺
墓参り亡母とお喋り彼岸花
彼岸ですお酒召しませ亡父の墓
親と娘の筆跡まがう絆とや
恋猫が騒いで春を近づける

倉吉市 米田 幸子

飾り物だから学歴ちゃんをつけ
冷や飯を食べて男になりました
渾水の河で溺れる人も居る
からみつく草を無情に振り切れず
昼の月俺もお前もひとりぼち

米子市 石垣 花子

昼飯を誘ってくれる人が出来
かくしやくと幸せそうにひとり住む
うどんやで未来も箸を割るだろう
堂々と女が指揮棒振る未来
自己主張しだせば怖い川達だ

米子市 田中 亜弥

太陽の笑顔がきれい春だもの
女性上位で黄色い声を耳にする
裸電球の下で未来を追っていた
昼は気どってコーヒー飲みで老父は出る
七十歳の骨をいつまで愛せるか

米子市 野坂 なみ

五徳の輪 三本足でしあわせだ
遺されていんこ多弁になるばかり
角二本額の奥にかくされる
草一本生えぬ箱庭淋しきろう
分校に草笛吹けぬ子が二人

米子市 中井 ゆき

ぽっかりと心吸い取る昼の月
捨てるもの捨てて身軽に歩きだす
うどんやもやかたと書いてバスが着く
大河など見たこともないメダカ達
ふところの手が出始めた姫達磨

鳥取県 松下 たつみ

迷路から抜け出せぬまま春がくる
言えるだけ仕合せという夫婦仲

反村の署名どの字も怒ってる

方言をぬくめ合ってるいろりの火

一步踏み込んで心の隙を覗かれる

鳥取県 羽津川 公乃

止り木でわたしの今を信じよう

差し障りない嘘もある問診票

亀の歩でいいさフアイトは燃えている

命には別状ないが株で損

私利私欲捨てるとわたし駄目になる

鳥取県 津村 八重子

ふくよかな笑顔にひらくつぼみです

どんぐりも歌うか山もにぎやかな

リゾートは町をすっきりぬりかえた

先のさきまで見える眼鏡がかいたいな

今いまの事も忘れていい年に

鳥取県 林 露杖

忘れずに来たか待ったぞ初っぱめ

有りたけの障子張り替え春祭り

一品は芹の白和え春祭り

豪雪に撓んだまんま連翹咲き

オウム教 無間地獄という怖さ

鳥取県 西浦 小鹿

恋ひとつ終ったはずさちぎれ雲

今はただ涙ちぎれるほど走る

青空を斜めにみてるひとりきり

叫んでも叫んでもただ春の海

頭だけ残した君の骨拾う

松江市 舟木 与根一

五分咲きで売れる鯛焼き蛸焼屋

満開の先遣隊はごぞで揉め

勇退も停退も居て花吹雪

葉桜も虚し子離れ親離れ

若者は皆出て行った山桜

出雲市 尼 れいじ

夢追えば後から猿がついて来る

父の忌へ父の好みを買ってくる

夢つなぐ螢が一匹飛ぶ田んぼ

鶯があちこちで鳴く春選挙

故郷の訛りは家に置いて旅

出雲市 園山 多賀子

ワープロに挑む丸い背陽が当る(夫ふるさと市民賞を受く)

早送りの中で何時も躓くのはわたし

衣擦れと足袋の感覚遠ざかる

少々は惚けた位で愛される

迂回路でわたしの影が謀叛する

出雲市 吉岡 きみえ

遙山忌しずかにねむる師はねむる

陽の柱 月の柱に人が群れ

連呼する声を遠くに花の下

春一番 私の乳房ゆきぶりに

ユーターンの車は海を向いている

出雲市 岸 桂子

夜行バス明日に向う客となる

渡らねばならない橋がゆれている

リハビリの母と折つて千羽鶴

肩もんで息子孝行したつもり

うれしくて仏と長い話する

出雲市 小玉 満江

朧月紫式部の話など

烏合の衆 太鼓のひびく方へ行く

五十年 無念残した仏達

初恋はわざと捕まる鬼ごっこ

子育ての頃は私も強かった

島根県 西村 早苗

それだけの恋でしたと織姫に知らず

雨しきり人は悲しきものなりき

ふくろうが鳴くよそろそろ灯を消そう

愛称のとおりやっぱり忘れて来

言うなればお風邪のような花粉症

島根県 佐々木 鳳笙

店一つ流人の島のイカ徳利

紅梅へ降るいたずらなぼたん雪

葬列はうつむき加減冬陽射し

温泉の名も平成の村おこし

録音へしばらく逢えぬ孫の声 (長男一家転勤)

香川県 木村 あきら

隣から新茶が来たときよびにくる

まだ八十再婚の話言うてこず

預貯金が底付き命だけ余る

岸辺まで来ると小犬も立ち止まる

心にもない世辞言うて生きのびる

香川県 工藤 吟笑

逆境も時の流れにして耐える

妻老いて時々背が吐息する

後ろから急かれて休む暇がない

助っ人が出来て俄に元気付き

裏口の話でアレも決まりそう

香川県 成重 放任

危篤時に見舞の老女経を読む

味気ない返事に出端挫かれる

口止めをしたばかりに露見する

一枚の紙も丸めば重くなる

青い鳥探して渡る向う岸

香川県 川崎 ひかり

余生とやもちつもたれつ生きてゆく

大輪を咲かせた後の長いウツ

両岸に桜花爛漫咲き競う

金の要る話だやバイねたふりだ

快調だこんなうまいにぎり飯

香川県 山地 マツエ

幸せを運んで来そう嬰が生まれ

血の絆裁いて心重くなる

止める気の煙草一箱持ち歩く

コーヒーにケーキを付けた口止め料

憎まねば残る未練が捨てられぬ

香川県 新川 マサエ

当落の覚悟も出来たダルマさん

古葉落し芽吹く季節の彩さえる

花の香に引かれて今日も回り道

春だ春 野菜畠が花盛り

母さんのおだてに乗って動き出す

松山市 白石 春嶺

まだ脈があるから知恵も金も貸す

肝心な点は吃っている白書

満点の妻に与える賞がない

貸している方から先に取る帽子

若者を繋ぐ魅力のない田んぼ

西条市 片上 明水

あばら骨数たしかめて風呂を出る

神仏に疎遠となって日々達者

同業のチラシへ籠の盛りを変え

手の振りで栄転だとはわかる駅

酔った人掃除するひと花の園

高知市 北川 竹萌

遣る物を持たず悲しく鳩を見る

あの人は知るや知らずや天に唾

出版を迎えてうれし八十三春(自著自祝 三句)

自分史へ祝辞前知事同じ齡

花束を受け身に余る日の感謝

北九州市 梅田 宣司

コーヒーで済まぬ悪友やつてくる

なりゆきで知ったか振りを押し通す

大吟醸わかつたような顔で飲み

写しても写してもなおお京の四季

失言にしては本音が透けて見え

大阪市 上田 柳影

茫然自失ここがわが家か土握る

憂い多き女となりぬ地の震え

孫の手を引いて楽しい桜みち

懐の辞表 立場が立場なり

落ちつかぬ女をつつむ花吹雪

大阪市 井上白峰

肩書と共に消え去る胃の痛み
出る幕の無いのに老いの咳払い
迂闊にも不意をつかれてつい本音
海に出て生れ育った井を忘れ
自分史を書くには紙が白すぎる

大阪市 榎本落児

避難所の校庭 子らの声もなく
人生にあつた成り歩という力
近頃は嘘つくこともなくなった
男が一人 産婦人科の待合で
天王寺 亀は夜中に鳴くらしい

大阪市 川端一步

文学館 私財いうのがちと佗びし
子で泣いた分だけ孫が笑わせる
地下鉄も値上げするかとジャブがくる
ペン貸しただけでルンルン春四月
お彼岸の帰り七坂めぐりする

大阪市 津守柳伸

改造へ老後設計おこたらず
全身を顔にインコも淋しがり
勇気ある胸 勲章は似合わない
働ける幸 休日を全開す
虎視眈々トップに風が吹き荒れる

大阪市 板東倫子

春愁は末法末世のなせるわざ
花冷えや サリン 田高 花粉症
逼塞の老いに無縁の花だより
ハルマゲドン説く人たちは何祈る
女だから男だからは通らない

堺市 藤井一二三

白木蓮の夢抱く姿ポツと咲く
石仏を慰め落椿がひとつ
哲人のよう春の鹿黙したり
泰吉と同じ視角で椿
めどもなくただ大和路の春のなか

堺市 柿花紀美女

人間で苦楽の中を生き続け
粉薬こぼれて老いの悲しさよ
初孫へ編針弾む老いの部屋
無作法なマイクが拾う街の声
大声ですぐ母を呼ぶ父である

堺市 近藤豊子

藤原京れんげ畑の風に覚め
仏頭の耳ゆったりと頬に添い
ガラス製魚佩五センチの海のいろ
からまわりから始まったボランティア
被災地を見舞うことばのからまわり

高石市 浅野 房子

スイッチはオンいつでも返事待っている
笑っているが肯定はしていない顔

外反母趾 働いた過去知っている

枯れて行く花のあわれは言うまいぞ

ある日突然くる天災も人災も

東大阪市 森下 愛 論

霧に濡れ無言で歩く影法師

花祭り心はすべて花のもの

花霞そぞろ歩きは恋の歩度

ヒヤシンス孤老の愚痴へ向きを替え

ひっそりと妬心を秘めている敗者

東大阪市 指宿 千枝子

銀髪に似合うおしやれをしましょうか

眼を護りおしやれに見えてサングラス

いい日和誰か遊びに来る気配

いらっしやいりラもカリンも咲いてます

ふるさとの昔話を風に聞き

豊中市 井上 直 次

アイディアをそつと拾った立話

ふと箸をとめてご飯の白い湯気

甲種合格そんな男も今は杖

かなり良いシーンへ憎い俄雨

飲む仕草めつきり似てきた三回忌

箕面市 椎江 清 芳

天秤に掛けるいのちと酒の味
器量よし双児の因果比べられ

十文半靴に合わせた初年兵

金で買う味方は金で余所に行き

燃えかけた火種を通り雨が消し

吹田市 井上 照 子

鬼の土鈴 玄関で魔を追う役目

握手する心伝わる師のぬくみ

乾電池入れた途端に生きかえる

新聞を開く気もない世の動き

作りつつ一人で食べて生きなけりや

吹田市 瀬戸 まさよ

大正のどこか古風を見抜かれる

虚しさと淋しい怒りある辞職

辞めてなお人事異動が気にかかる

造化の妙 花から花へタクト振る

無党派の知事さん弱者頼みます

茨木市 藤井 正 雄

年上がどうのこうのと縄のれん

旧校舎写真の隅のゆうかり樹

風に色つけて矢車光る空

最後尾待つて峠で吸う煙草

疑いは晴れたが夜の苦い酒

寢屋川市 江 口 度

シャンシャンとどんぶり鉢も浮く花見

あの時の桜咲いてる忠魂碑

√5の捜査カナリア先頭に

防犯カメラ事件のあとで考える

贅沢に終点はない回転木馬

八尾市 宮 西 弥 生

年下の男がいったい眼に残る

サザエさんファンで明るく生きている

この先は風にまかそう花の下

被災地のお見舞い返しに来たステーキ

あの日から今日一日を燃えつくす

八尾市 吉 村 一 風

刑事課でとっても旨い茶に出会う

遺言はまだ鉛筆のまま冬を越す

歳のせいか笑いの味が見えてくる

腹に残さぬ暮らしに夫婦少し肥え

何もかも忘れたい酒まだ知らぬ

八尾市 宮 崎 シマ子

スイトピーで飾るお産の嫁の部屋

春の神域お百度は踏みやすし

合格の少女ピアノを高く弾く

春の風邪夫のひるを芹雑炊

黒潮がとどろくやがて初鰹

羽曳野市 田 中 透 太

桜満開 逢いたい人がたんといろ

心にもないこと言うてよろこばれ

花冷えの街から友の計が届く

天変地変まさかまさかの震災後

日替り定食一品替えただけ

羽曳野市 吉 川 寿 美

幾めぐりせし姑の忌よ花吹雪

切り札を持たぬ夫婦の闘病記

筋書きのない人生へ体当り

一期一会 風の行方は尋ねまい

れんげたんぼ昔噺が大好きで

岸和田市 芳 地 狸 村

春雨に閑雪桜泣いている (哲学の道)

造形の白砂が光る銀沙灘 (銀閣寺)

雨煙るしだれ桜の彩に酔い (平安神宮)

苔庭に紅がぼつんと落ち椿 (銀閣寺)

特ダネに口がすべったお人好し

岸和田市 原 さよ子

菜の花を背景にして野の仏

足跡に楽しいことが二つ三つ

善人はすぐに正体見せてくる

その話母さんだけに話しく

花見頃やさしい風が吹いている

富田林市 松本 今日子

母の逝く途ほろほろと花明り

エイプリルフルことんと切れたオルゴール

塩鮭を一切れ残した冷蔵庫

この辺で泣かねばならぬ芝居見る

春の川散った桜を包み込む

河内長野市 井上 喜 醉

見栄を張る旅の贅沢面白い

無党派の知事へ気になる風当り

のんびりと春の陽気へテント虫

欲は消え本音がポロリ老いを知る

寝てばかり番犬散歩したかろう

和泉市 西岡 洛 醉

春進む老いの背中をついと押し

酒の奴 五臓六腑をゆさぶって

満月の何時かは欠けること知らず

血のたぎる若さが欲しい昨日今日

制服に飼ひ慣らされて五十年

和泉市 岡井 やすお

ここまでオウム太らず自由国

喝水は水を粗末にした報い

がん告知して新薬に同意させ

自分だけが残ると決めて友の葬

そのうちに誰も三六五連休

岸和田市 寺田 甚 一

ありふれた古希でも家族祝う幸

大地震テロと花見に酔えぬ年

ナツメロを涙流して歌ってる

無党派派層 政治に横を向いてない

弘前市 小寺 花 峯

溜めておく机の角にある野心

隙間風聞き分けて鳴る古時計

T字路を曲がって抱いた明日の夢

棘のある話にバラは取り乱す

弘前市 岡本 花 匠

妻の電話ハイウンだけで怪しいぞ

あんな男いらぬと磨く赤い爪

悠々と真実にふれて匂も和み

鶯の恋に目覚める朝桜

弘前市 中山 雅 城

もう一つ疎開地に在り吾が母校

栄光は真紅の砂に埋めてある

カナリアは歌を忘れてしまいたい

ゼロと言う誇りを持った背番号

弘前市 一戸 ツ ネ

あかね空 老狐一匹 岩に立つ

今は昔 轍も消えて五十年

白い嘘に絵の具ボタボタ音をたて

温泉に浮いた老軀の土踏まず

八戸市 島田昭治
飲まないで居られぬようなすめよう
泥靴で我が心まで踏む男

よこしまな心を抱いて神参り
うみねこが愛のささやき妬けてくる

羽咋市 三宅ろ亭

月毎に靴音少し変えようか
小さな町の選挙は筒拔ける

卯月もう木蓮白を散り急ぐ

市民劇場 戻りは弾むパスの中

生駒市 北山悟郎

全滅に奇跡の一人生き残る

戦傷の筋金入りが錆びている

世話好きが明るい春を提げてくる

生活のリズム鶯の声を添え

和歌山市 福井桂香

けだるさの中で一冊本を読む

飛び立てぬ私の翅がぬれている

糞虫に年功序列などないよ

掌へ散華のまえのはな掬う

和歌山市 細川稚代

白梅がこぼれて消えた血の絆

そして神戸まだまなうらに生きる街

噛み合わぬ血液型のせいにする

たこ焼の舟へハラハラ散る桜

和歌山市 堀畑靖子
ダイレクトに気持ちを伝えすぎる文
暮れなずむ生をあなたと謳歌する

また次の夢に向かって手をのばす
切札は最後に使うべきだった

和歌山市 田中みね

責める気はないけど嘘は言わないで

あとはチンするだけ妻のメモ用紙

猫までが無事で被災の姉一家

娘等の服びつたり合つて衣装持ち

海南市 三宅保州

それにしてもでかすぎないか胸のバラ

独りものにフランスパンが長すぎる

庭いじり姑の花 嫁の花

税務署に同情されるほど赤字

和歌山県 西口忠雄

ライバルの落選笑い止らない

母の駅発車のベルに息を吐く

イエスノー わたしまだまだ七分咲き

休火山あすに備えてマグマ溜め

和歌山県 小倉アサ

大波小波あすへ確かな杖となる

花びらへ足どりひとつ包まれる

ころもで覗くといつも傷が出来

予防線張るには笑顔まだ足りぬ

宝塚市 丸山 よし津

雲は動かず退院の日はまだはるか

デジタルで過去はきれいに消して行く

黙ること覚えけんかが減りました

サラダ盛る目先を変えて和風皿

伊丹市 山崎 君子

歩道橋 風を見ながら渡りきる

ゆっくりと桜並木をあと戻り

花吹雪うける袂の桜模様

桜を見てゆっくりバスを待っている

西宮市 秋元 てる

孫二十歳 親爺吞もうと威勢よし

被災して小さく雛を飾る嫁

避難してもう三度目の爪を切る

穿く靴の無い夢今朝も被災して

西宮市 菊池 トミエ

蛇口から出てくる水を待ちこがれ

掘り出した時計まともに動き出す

年の差は言葉の意味を聞き違え

千刈の桜は地震知らぬげに

西宮市 山本 義子

ベランダに花鉢並べちさい春

筍をいただいた 糠入った

フルコースを冷凍品で揃えます

パスポートの継続 歳と思案中

芦屋市 黒田 能子

春めいて小猫のように伸びをする

あたり前のことをしたのに褒められる

樹は生きる断層をもつとせずに

あの朝も鳴いていたのか庭雀

岡山市 岩道 博友

便利さで騙し絵一枚買っておく

やじろべえ補聴器付けてまだ動く

人生の節目 守護神見付けだす

過去を掘り不用意な口滑らせる

岡山市 江口 有一朗

ひとり住み三度の食に感謝する

体全体にどうにか届く手の長さ

ゴムマリは陽気で柵の外に出る

今日の終り飾る確かなものほしい

岡山市 池田 半仙

川柳を盆栽にして疎まれる

花野菜ハウス物です旬がない

もう一寸欲しいとこまで美味しい酒

焼酎を睡眠薬に少し飲み

広島市 森田 文

少しずつ風が变って花が咲く

古里の緑へみんない笑顔

お見合いの才女はとお酒好き

鈍感な犬で気付かぬ投げキッス

竹原市 岩本笑子

振り返るゆとりがほしい八合目
いい夢を見たいと枕二度たたく
橋一つ渡る涙のその中で
静かなる営み雪も解けゆくか

広島県 田村新造

戦友捨てた山は夕焼けまだ暮れぬ
危なくて寄れぬ部落の灯が恋し
馬賊横行関東軍のなれの果て
飢餓地獄いつそ匪賊にでもなるか

鳥取市 前田一枝

あけて待つ席に振られた娘が座る
草笛に夕やけ小やけついで来る
寺の鐘つき忘れてる昼さがり
置き薬効いて来た頃医者に行く

鳥取市 武田帆雀

本命が守勢に回る風の彩
目に見えぬサインプレーばかりする
捨てられた首 履歴書に載せて診る
行く先を無くして飲んでいるコーヒー

鳥取市 春木圭一郎

大輪の風格つぼみから匂う
脇道にきれいな花がきつとある
川柳もありのままにと言いきかす
執筆のパワーライバルからもらう

鳥取市 美田旋風

談合の手抜き地震に暴かれる
地下鉄のサリン先進国にする
肩書きが消えた親友遠ざかる
度忘れを思いたぐった五十音

倉吉市 淡路ゆり子

少年のこころを癒す母のふところ
草取りはわたしに下る神のおつけ
道草を沢山食べた夫だと思っ
九分九厘 目鼻がついた昼にする

米子市 木村富美子

未来図の中にわたしがみつからぬ
三年も咲かぬが水はやってる
勿忘草教えてくれた人は亡し
広い背で孫が安心して眠る

米子市 茂理高代

乗り越える技は知りつつ流される
一人住む子との会話も遙かなり
花活けて花からもらう花粉症
春うらら寿貧乏またたのし

鳥取市 岩原喬水

金は逃げ逃げない風邪に悩まされ
ときどきはビフテキ食べて若返る
なるほどと頷きながら金貸さぬ
うちの子はいじめの方にいるらしい

鳥取県

谷口次男

鳥取県

大角幸代

その時にどうもこどもが出来たよう
動かない窓際族の速度計

ツッパリも卒業式は泣いている

人間を卒業できず生きている

鳥取県

田村きみ子

鳥取県

黒田くに子

病院の窓から見える夏帽子

滑走路で一期一会のすれ違い

さあ朝だ大きな息をして起きる

ここだけの話が好きな待合室

鳥取県

石尾かつ乃

鳥取県

太田幸枝

母はいつも此処よ此処よと手旗振る

名水の味じっくりと観光地

飯うまいわたし好みの彼と居て

あかね雲 花見の群れの行き帰り

鳥取県

上田俊路

鳥取県

幸家單車

スパートの機をうかがって群にいる

限界を知って晴れ晴れUターン

いいことと威張ってやってている怖さ

不発弾赤ちようちに捨ててくる

鳥取県

大角正道

鳥取県

西川和子

上司には神や仏でいてほしい

血を流すほどの努力をしていない

陽が昇る泣いてばかりでいられない

平和な国で働く気にもなれる

ノクターン運河ゆっくり流れけり

白い館の白いカーテンからの幸

すらすらと嘘が出てくる昼下が

り ひと言が消化しきれぬ春の宵

鳥取県

菜の花のほろほろだれもない家

根っこまで踏まれはしない草の意地

意地っ張り止めよう川の水も澄む

財布の底はたきストレス捨ててくる

鳥取県

脳味噌の軽い分だけ金を貯め

救急車静かに給油待っている

逆立ちで脳味噌振って若返る

名水の里で名酒に酔っている

鳥取県

笹の露ボトリ河口の旅に出る

反省のポーズ静かに座禅組む

昼飯を誘うきれいなお付合い

奥の手はふところ深く忍ばせる

鳥取県

ふる里で古い話がよく弾む

捨ててから深まっていくつかし

ふる里の水の流れが変わり出し

嬉しくて老母に電話をしなくなる

良心を売ると犬さえそつばむき
出雲市 板垣夢酔

円高で金のなる木が枯れはじめ
ボロ着ても娘の婚礼は派手に出す
薬屋根を帰省の子等が洋間にし

出雲市 久谷まこと

日脚のび夜の帝王出おくれる

野仏もルール見守る草野球

願い事もう聞き飽きた札所寺

人生の妙味は歳で味わえぬ

出雲市 伊藤寿美

天寿かな通夜憚らぬ艶ばなし

仕放題して仏のような顔で逝き

いつか飛び出す豆の支柱になつてやり

過労死に忠義という字生きていた

出雲市 小白金房子

風むきがかわつて女貝になる

生きざまを映す鏡を買い替える

呑み切れぬ葉かかえて春を病む

着て脱いで老いの体型あきらめる

出雲市 石倉英佐子

うつらうつらうつらうつらと覚めている

川上で水も情けも塞き止める

夫婦箸あうんの呼吸ともゆかぬ

柿の木にさよならをする白い家

夢いっぱい書いては消して一人旅
両手が動くしあわせかみしめる
しあわせの音が出るまで太鼓うつ
下がり蜘蛛あの人への愛かも知れぬ
出雲市 富田蘭水

迷わずに必死に生きたつもりだが
諦めをひとつの救いとして過ごし
人恋し生きる気力をもちなおし
お人好し時代おくれのマナーだが
島根県 藤原鈴江

結局は何も無かつた村おこし
烏合の衆の一人となつてよく笑う
本当は喧嘩上手で争わず
ワンクッション置けば笑えるほどのこと
松山市 宮尾みのり

春光へ雲が流れる水溜り
亡母の背を洗つたように墓洗う(一周忌)
封建の音が玉砂利ふめばする
仙洞御所カモが岸辺を春にする
今治市 越智一水

老醜に桜の下は酷すぎる
ちちははの恩描く墨の濃く淡く
人憎む心みすかす花あかり
春遍路歩く姿へ手を合わす
今治市 野村京子

老醜に桜の下は酷すぎる
ちちははの恩描く墨の濃く淡く
人憎む心みすかす花あかり
春遍路歩く姿へ手を合わす
今治市 野村京子

老醜に桜の下は酷すぎる
ちちははの恩描く墨の濃く淡く
人憎む心みすかす花あかり
春遍路歩く姿へ手を合わす
今治市 野村京子

老醜に桜の下は酷すぎる
ちちははの恩描く墨の濃く淡く
人憎む心みすかす花あかり
春遍路歩く姿へ手を合わす
今治市 野村京子

老醜に桜の下は酷すぎる
ちちははの恩描く墨の濃く淡く
人憎む心みすかす花あかり
春遍路歩く姿へ手を合わす
今治市 野村京子

高知県 赤川菊野

無防備な母でどこにも隙がない
切れかけた絆 地震でとりもどし
明日散る花にも水をかけてやる
娘のしぐさ合わせ鏡を見る如し

唐津市 田口虹汀

大物を裁く庖丁研いでいる
文明を鵜呑みにしたら火傷した
甘茶ではないが産湯は同じ日に
人生の旅九合目となりにけり

唐津市 山口高明

何遍も念を押すから反旗振る
二百年威厳を保つ屋根瓦
開眼をしたぞ鬼遊と逢うてから
美辞麗句並べる人で実が無い

唐津市 筒井朴竜

味噌汁の打ッ掛け飯で朝出立
余命表気遣う母の癌告知
韋駄天の神蹴躑く鏡山
邪馬台国尋ね末盧史を探訪

唐津市 浜本ちよ

うま過ぎる説教話が軽く見え
菜の花の力強さの美しさ
炎にはならぬ火を抱き老い達者
何でもない事だけ話通じ合い

大阪市 町田達子

プロフィール少し演技に凝っている
お付合いさなり桜に教えられ
不審物へ触れぬようにと地下車内
立ちあがる神戸よ空にやがて鯉

大阪市 清水利武

宗教と言う名の裏で武器づくり
嫁姑のはざままで生きて瘦せている
初孫を抱いて嬉しい五十祖母
花に風選挙も過ぎて梅雨がくる

大阪市 河井庸佑

ひと言が過ぎて無くした得意先
思い付き動く男で距離を取る
曖昧な返事の際に付け込まれ
冷静を欠いた意欲が空回り

大阪市 松尾柳右子

海外の話聞いてはまだ行けず
古里のブルーサイドにカンナ咲き
満期まで待てぬブランの使い道
頼りある姉であつたり無かつたり

大阪市 藤田頂留子

耳うちの欲に目先をまよわされ
ぜいたくの見かたにもある時代の差
つらいけど断る理由出てこない
こぼれるとこぼすのでは似て非なり

大阪市 北 勝美

何事も無かったように座禪草
雖然と本を積んでるペンネーム
花褒めて一鉢もらっただけの仲
習性をおびて椿は寺に咲く

大阪市 寺井東雲

結婚は嫌と言う娘がめかして
達人も一日のうち隙はある
棺かつぎ代りたいよな惜しい人
美人画の前に交通整理いる

大阪市 渡部さと美

野望の図増幅されて加速され
女気丈 明治ばかりのものでなし
頂上より中腹までのハイキング
六月の雨を身ごもる真珠貝

東大阪市 安永暁子

ときにふと空回りする春うらら
三月四月 西に東に祝い事
矢切りの渡し二人で越えたダイヤ婚
三寒四温 持越した風邪はなれない

大阪市 清水絹子

春よ春なすの浅漬け豆御飯
むすんでひらいて結び直しつ共白髪
四面楚歌 路地の奥にも双葉の芽
春彼岸いちご大福お相伴

大阪市 小糸昭子

大きくなる息がだんだん遠くなる
湯加減がむつかしおすと味自慢
平和かな猫が鼠に餌を分け
サングラス取って会いたい人がある

大阪市 奥田良子

水たまりもうとびこせぬ散歩道
駅に降り雷さんはまだ遠い
ふと思う娘も炊いてるか豆御飯
発車ベル走れる年でないとする

堺市 黒田真砂

桜の下に佇てば従姉妹の呼ぶ声が
人間のおごりへ神の鞭下る
夢の中に亡母笑顔の手毬唄
額に入れ飾ればまあまあ自己満足

堺市 一瀬福一

海渡り今日はカジノの灯に泳ぐ
誰にでも溶ける女の丸い鼻
涼しい顔でナース患者に嘘を言う
夫婦とはこんなものかと歳をとり

堺市 中野櫛子

はんなりと花と話して四季めぐる
忘れ上手それも好いのか丸く居る
薪能 心目覚めて法隆寺
世の歎きしばし忘れて花だより

八尾市 山下 美津留
有難い土地持つていて草に負け

家の地下生駒断層生きたまま

野仏へなんの祈りかよだれ掛け

川岸の桜へ百歩犬と観る

豊中市 江口 明光

早ばやと花満開のアーケード

一病をもちりハビリはまじめなり

ご利益があれこれ違うおもしろさ

軍人の墓は地震にも耐える

豊中市 辻川 慶子

入社式 靴光らせてひからせて

姿見に女ひとりの夢映す

道草の遊びごろを大切に

目的があるから足が早くなる

豊中市 滝北 博史

毒物を作る悪魔と使う鬼

金さんか越前守出てこいよ

再建の金なく家に本の山

再建の工事はじめた両どなり

豊中市 三宅 つえ子

車椅子 春のどろんこ道楽し

美しく老いたく今日も花の下

着飾ってバーゲンに行く車椅子

いつからか声をかけ合う車椅子

池田市 岡本 吉太郎
談合をば和の精神というゼネコン

不信の目で世間を見れば深淵に

自民党鳩派の仮面重くなる

老い二人笑って過ごせる幸せを

池田市 金崎 峰子

散歩道いつか挨拶かわす人

うっすらと化粧 今日から社会人

この門の奥に住む人想像し

軽くはい心にそむき言う返事

箕面市 岩津 ようじ

追いかけてくる同情の無神経

才たけて見目うるわしく縁遠し

墓石に地図描くほどの杉花粉

旅日記うんと水のうまい町

吹田市 茂見 よ志子

リッチリリッチ孫に引かれて松竹座

じじばの似顔絵画いてよろこばせ

待ち兼ねたポストはみ出す書籍来る

春霞淡い黄昏降りてくる

吹田市 栗谷 春子

花の春かくれたこわい村のこと

震災とオウムと次を考える

聞いておきたいことあるはずに春の宵

これでみな済んだと門を出る軽さ

炭木市 堀 良 江

希望者に差上げますという四
足音が聞こえ町並旧街道
椿咲く本陣へまた来てしまふ
子が継いで花咲きそうな夢一つ

交野市 福 崎 しげお

向い風だからやる気の天の邪鬼
非常袋はち切れそうな欲の皮
潔癖という名で飾る頑固者
過労死もせずに余生の旅の宿

寝屋川市 平 松 かすみ

チイチイパツパ雀の親も子に期待
ばあちゃんはとても美人に描いてくれ
歩け歩け旨い空気が魅力です
おいしくてヘルスメーターからサイン

枚方市 八 田 敏

片麻痺の妻 車椅子に上達し
待ちかねて五分の桜に友と酌む
漫才をやると言う子に期待する
大地震 円高 オウムに日本揺れ

藤井寺市 中 島 志 洋

ライバルに弱味は見せぬサングラス
さり気なく聞かす積りの独り言
仲直り照れ臭そうに手を握り
梅雨晴れ間 胸の小窓を開こうか

藤井寺市 福 元 みのる

特選も夢でなかった師のお陰
子や孫に煙たいじじと言われまい
零からの出発若いから言える
皆元気だけで良い親への手紙

羽曳野市 森 松 まつお

厨房はたまに立つから面白い
休肝日なんて一升さげてくる
いいわけを考えている三次会
バスツアー気まま一人がかきまわす

岸和田市 三 輪 通 彦

リストラで私の座る椅子が無い
披露宴祝辞の嘘を聞き飽きる
OB会昨年の顔がひとり消え
大病後頑固な父の様変わり

岸和田市 田 中 文 時

人生もレンタル土に返される
震災の地鳴りが耳朶にこびりつき
客の身で一番先に起き困る
履歴書の職歴三つほど省き

岸和田市 藪 野 けい子

円高にドル換金を見あわせる
円高をテレックス走るテレビ面
平常に客を迎える妻の顔
お花見に雨天もめげず場所をとり

富田林市 片岡 智恵子

桜花の下哀しみ薄れゆくように
自立の道 探してのびる豆の蔓
苦勞話すこしもしない母のしわ
無量の感 水と器の五十年

河内長野市 植村 喜代

窓枠の絵にいる鶯啼いている
手の届く鶯見入る贅沢さ
いつか落したい雷重過ぎる
しお時がくれば心を変えて来る

大阪府 八十田 洞庵

人生の余白もつたいたなく使う
ブライドが高くて居場所ない女
焼き捨てる反古から褪せた未練出る
ワープロを打って余生を埋めている

前 月 分

大阪府 藤田 頂留子

パチンコに取り的のさんも寄り切られ
モタモタをなじればカッカしなはん
おみくじにうなずきあって居るヤング
働きの仕立てた彼女おもしろい
家族づれの声ははじける五月晴れ

静岡県 安本 晃 授

天命が父が掛けると軋む椅子
大切な余白に嘘は似合わない

ときめきへ思慕を埋めてる尾骶骨
天空を翔ぶ夢を描く蛙の子
団欒へ価値観違う三世代

鳥取県 西浦 小鹿

八起目の挑戦 天は味方なり
桃太郎 鬼を起こして鬼ごっこ
手鏡を見て笑うのは猿真似か
生き抜いたおまえの骨は土となる
亡母の骨かんで恨みは哀しみへ

全日本川柳長野大会

とき 6月11日(日) 午前9時半開場

ところ 長野県松本文化会館(松本市水汲)

宿題 第二部(当日出句・午前11時半締切)

「政治」 田中正坊選

「掌(てのひら)」 木野由紀子選

「歩く」 須田尚美選

「充電」 今川乱魚選

会費 3500円(昼食・記念品代共)

観光 6月10日(土) 3500円

前夜祭 同 午後6時 5000円

宿泊 浅間温泉ウエストンホテル

申込先 〒384 小諸市小諸郵便局私書箱26号

全日本川柳長野大会事務局

柳緑花紅

橘 高 薫 風

堂島の家で結核の自宅療養を続けていた昭和二十七年頃、週刊産経が創刊された。吉野秀雄選の短歌欄を見た私は投稿をはじめた。

発売日には町の本屋は開店が遅く、駅の売店が一番早く開くので厳寒の日にも大阪駅へ買いに走った。そして一年、一首たりとも掲載しては貰えなかった。その時、父は「お前は市井の詩人で居ればいい」と言ってくれたのを今に忘れず記憶に残している。

もともと短詩文芸が好きだったので、それ以来、万葉集、古今集、新古今集から幕末現代までの短歌と、芭蕉、蕪村から今に至る俳句の作品と鑑賞の書を読み通した。川柳だけ知らなかった川柳に、三年後に出会ったのだから、まさに私の好きな言葉の一つ「合縁奇縁」と言うことが出来よう。

吉野秀雄の師は会津八一である。八一は、やさしい人間性豊かな人でありながら道には厳しかった。大正十三年発行の第一歌集「南京新唱」に関して、秀雄が手紙を送り、二首

だけ意味が分からないからと教えを乞うたのだが、八一は「わが輩の歌は、万巻の書を読まず、千里の道を行かざるものにわかるわけがない。わからぬものは勉強すべし」と二べもなかったと言う。そして本を読むこと、旅に出ることを奨めた。実際にその場に立って見よ、それでも理解出来ねば、書物を繙いて勉強しろと言う事であろう。吉野秀雄は歌集「天井凝視」を残しているように大略血をも体験して結核に呻吟した歌人であった。

麻生路郎先生も作品には厳しい先生だった。私には特にそう思えた。しかし、須崎豆秋が先生の選に満腔の信頼を寄せ、選のあとの反省を自分に課したように、私もとことん喰らいついていった。当初、清新な若い感覚の句を指向した自信の句はすべて没で、没個性の句ばかりが抜けたが、川柳をはじめて七年、やっと「労働歌蟻が歌えば凄かろう」「恋人の膝は檸檬のまるさかな」「石くれも三つ積んだら思惟の塔」などの句を取って下さるようになった。あとは「気阿成だった。そして三年、先生はこの世の人でなくなってしまう。願みて修業の過程にあるものは、呻吟の時期は安心して見ていられるが、好調な時ほど心を引き締めなければ、結核の療養と同じですぐ元に戻ってしまうものである。

作品鑑賞

カナリアが防毒班とゆく春愁

永田 俊子

カナリアの色と声は最も春愁を誘う。西条八十作詞の「かなりや」の愁いに親しんだ者にとって、防毒班の先頭に立つ小さな魂は……

合掌を薙にそして花咲かそ

詩苗 果林

りんご園を経営する作者なればりんごの花に合掌の気持ちちは理解に難くない。しかしながらこの一句は、一般の花、それ以上に人生全般に通じると見るのは私の深読みだろうか。

夫婦別姓この子誰の子あなたの子

大原 葉香

夫婦別姓の国は多いが日本では戸惑いを覚えること、当分続くに違いない。歴史はいささか古いものを持つが、国家的原理の希薄な日本は、いよいよ混沌を深くするばかりだ。うどんなで未来も箸を割るだろう

石垣 花子

二十一世紀になろうと割箸はすたれることもなからう。公害に繋がる伐採を憂える。

人形を抱いて避難所老いひとり

奥田みつ子

私の街の駅頭に人形を抱いて佇む女性がいる。気の触れた姿と重なる老人。誰の形見か。



西尾 栗名誉主幹が逝去

法名 水鶏院 釋 眞諦

酸素吸入器を口から外して

「薫風さんでつか」

本社名誉主幹西尾栗先生は、平成七年五月十五日午前0時12分、肺炎のため、八尾病院で逝去、86歳。葬儀・告別式は五月十七日午後0時30分から八尾市清水町の八光殿で営まれ、仲川たけし全日本川柳協会会長・磯野いさむ番傘本社主幹はじめ多数のご参列をいただきました。ここに生前のご厚誼を感謝いたします。

弔 辞

橋 高 薫 風

栗 先生

先生とお会いして四十年、何度ぞうお呼びしたことでしょう。それも今日が最後になつてしまいました。

十四日の朝、病室へかけつけましたとき、

と声に出して慈眼を私に向けて下さいました。が、おぐしとお髭が白くなっただけで四十年変わらぬ優しい目とお声でした。

私逢川柳塔の仲間は、麻生路郎先生を厳しい父のように、栗先生を母のようにお慕いして川柳をたのしんで参りました。

先生は常に、いかに激動する時世でも、変わらないものは天地万物の美しさ、四季の移り変わりの美しさであり、また、人の世の情け、親子、兄弟、姉妹、恋人、夫婦、友情の美しさである、深い自然愛、人間愛こそ川柳の真髄であると教えて下さいました。私はいつか先生に

「先生のこれまでの人生で悔いのないことがございますか」

とぶしつけな質問をしたことがあります。

「一所懸命親孝行をしたことですね」

という言葉が即座に返ってきたのです。この

言葉こそ路郎先生の「川柳は人間陶冶の詩である」という語録の、栗先生の理解であり、和の精神もここに由来すると感じたことです。私たちは先生の教えを守り、川柳塔を更に大きく築いて参ります。

平成元年十一月、われわれ仲間は高野山の霊園に「川柳塔碑」を建てました。栗先生の雄渾な揮毫の碑の裏には

俱会 一処

川柳塔同人並に川柳愛好家は死して尚柳号で呼びあい永遠に川柳を語りあう絆を以て此処に愉しく眠る

という言葉が刻まれています。先生の愛はこの世限りでない和の真骨頂を語っています。

旅好きの先生は絶えず旅をたのしまれました。ご夫妻の旅に私もよくお伴をさせて頂きました。後進を励まし慰め力づけて下さいました。

先生が最後の旅立ちをされたあと、奥さんのさびしさを、今度は私たち川柳塔の仲間が励まし慰め、健康でいつまでも川柳をたのしんでいただけるよう親孝行をする番が参りました。先生のように悔いのない親孝行をする番が参りました。

栗 先生、安らかに眠り下さい。

傘いらぬ旅へ卯の花くたしかな

自選集

月原宵明

辻白溪子

爪噛んでいる空想がまとまらず
喫茶店の椅子でも貧乏ゆすりする
単車では有難くない置き薬
懐中電灯 神戸以来の床の中
自分でも驚いている八十五

松川杜的

そのうちにタレント首相生まれそう
若者の魅力アメリカの何処がよい？
鶯の声はテレビで聞く余生
何を売るのが「エンマ」という名のお店
結跏趺坐 無心に桜散ってくる

久家代仕男

日本語の乱れ 外人指摘する
なつかしい歌唱にじんと泪ぐむ
優しさのなかに厳しさ捨てまいぞ
重厚な人柄だから誰も好く
無差別の殺意サリンという恐怖

池までの散歩が手頃な万歩計
肩書がとれると酒の量が落ち
今日からは肩書のない万歩計
霊柩車送って飲みに行く話
問題が解けて漫画にしたテレビ

八木千代

冬の鳥ためらいながら軒を去らぬ
非日常な暦へ誘うさくらさくら
春よね春よね咳きこみながら咲いている
花の下 風の風ぐ日のありがたさ
四季のうち三季はきつと輝かす

小林由多香

晴れ晴れと三浪ぬけた陽をあびる
お喋りができておしつこまだ言えぬ
恋の芽も春一番を待っている
慣れすぎて師の影いつも踏んでいる
まだ炎えるものあり派手な柄を選ぶ

共産党が賛成をして記事になり
よく酒を飲んだ人だと言われてる
板状土偶 未婚で平べったい乳房
糖衣錠ひと皮剥けば苦いこと
キリストのように鮫鯨ぶら下がり

工藤甲吉

一つ席譲り汽車弁開けてみる
今日も旅 明日も旅の卒寿かな
わんこそばつると出雲弁樂し
久しぶりですなと冷たい手を握る
さくら散る若葉の匂させながら

黒川紫香

朗らかに生きる男で陰がない
陰口の好きな奥さんにも困り
輝いた陰に苦勞の妻がいる
好転を信じ心の灯をともし
町内の一言居士と煙がられ

奥谷弘朗

五十回忌の父より二十齡を越え
十三回忌の妻よ迎えにまだ来るな
ビニールかぶせ屋根直す順を待つ
無理をせず怠けず余命表伸ばす
補聴器はまだ気がつかぬ電話ベル

金井文秋

昼は寝て夜に溜めとくエネルギー
みぞおちのあたりに溜まる草いきれ
近頃は草刈り鎌も錆びたまま
コーヒー館でたまに愛の矢受けとめる
行政のあと押し雑魚の脳でする

小西雄々

仲人口だけの夫婦と今さら黙秘する
かあさんの弱身を知ってるのが憎い
無遠慮に手近な傘を差す女
ぬれる傘さしかける手に肩をかし
たたみ傘今日も気ままな根来坂

児島与呂志

アニメから孫はいろんなこと覚え
婿殿がくれたチケット神巨戦
写経などとてもできない後遺症
くしゃみ出て浮かびかけてた句を忘れ
選挙戦たけなわ僕は二日酔い

野田素身郎

きかん気がもうクレオンにある怖さ
年寄りの祈りがつづく米作り
いざという時はやっぱり夫婦だな
三歳の孫へ本気で腹をたて
しんがりに居て白旗をふところに

遠山可住

藤井明朗

なつかしい句友うれしく花の句座
嫁きおくれ派手な噂もしてもらい
連休が七日で老いは留守居役
天災人災つづく国民の自衛策
物騒な事件 日本は平和かな

野村太茂津

殊更に切腹したと言いふらす
とりとめもない考えがまとまらぬ
寝言確かに起承転結できている
何も彼も弾む五体を撫でながら
主治医からコーヒーを飲め水を飲め

波多野五楽庵

有情か非情か花の別れ道
一本のザイルが泣いてばかりいる
指以外みな病名になりそうで
人間をやめたくなった薬包紙
かたばみの実が転生の風を待ち

有働芳仙

先生も説明そらすオウム教
かくしカメラかくしテレビの裏をかく
車椅子で入れた候補が落選し
変り映えしない政見くり返し
天高く孫さしあげる鯉のぼり

高杉鬼遊

葉ざくらにどうにか会える黙示録
弱虫のトラだ神さま仏さま
人さんの影を踏んでるとも知らず
まひるまのオニ太陽を食らうなり
何もかもゆがんで見える預金帳

大矢十郎

本心を述べれば敵が増えてくる
恥という字が年毎に薄くなる
我々の我にされていた私
百葉の長も自動販売機
偽善でも良い生涯を通すなら

正本水客

ふとんほす陽ざしへさくら散ってくる
有難うと言う言葉を近頃言いなれる
テレビでもすり鉢のよさ見なおされ
自転車でお寺さんさつそうとおじぎする
無党派に私もいつかなっていた

恒松町紅

缶ビールだけでは済まぬいい仲間
里心包んで届く母達者
夕焼けの見事さ過疎をつい忘れ
春霞ひと刻惜しむ老いの鎌
桜咲く被災地からの遠電話

口喧嘩ふたりぐらしもおもしろし
 はからずも久米田寺の花満喫す
 読書する刻が待合室にあり
 早蕨の里へ亡母を送り出す
 夫婦墓 朱の字を消せば浄土かな
 逝く春を惜しむ夜桜通り抜け
 鑑札へ犬も持つてる市民権
 観光客脅す気はない かずら橋
 発表のまさかに泣く人笑う人
 嫁の愚痴 待合室の老い二人
 平成七年 猫がねずみを捕りよった
 雌を追うペット野性をとり戻し
 駆引きをする癖はすぐ見抜かれる
 宴会の酒はマイペースとは行かず
 会費よりたくさん飲んだ二日酔い

田辺聖子先生へ

紫綬うれしインクひときわ匂い立ち

茶晶によし杉によし鯉のぼり (大井川鉄道)

女人高野 石楠花浄土塔浄土 (室生寺)

緋牡丹に負けぬ天晴れ孫娘 (長谷寺)

小説の路郎うたてし事実より

橘
高
薫
風

河
内
天
笑

西
田
柳
宏
子

小
出
智
子

第50回 尼崎市文化祭

〈作品募集要項〉

募集作品

短歌 近詠 1人1首 応募数厳守
 俳句 雑詠 1人2句 (複数部門
 川柳 雑詠 1人2句 に応募可)

規定

- 1 未発表作品に限る
- 2 応募は所定葉書または官製葉書
- 3 応募は葉書1枚に一部門に限る

応募期間 5月8日～6月9日

応募先 〒660 尼崎市東七松町

1丁目23番1号

尼崎市国際文化室文芸祭係

(06) 489-6384

主催 尼崎市

第14年度 夜市川柳 題と選者

題	選者	締切
①「誤り」	高杉 鬼遊選	6月末
②「風」	新家 完司選	7月末
③「返事」	小島 蘭幸選	8月末
④「命」	政岡 日枝子選	9月末
⑤「回る」	福井 桂香選	10月末
⑥「木」	木野由紀子選	11月末
⑦「境界」	柏原幻四郎選	12月末
⑧「筋」	河島いち子選	1月末
⑨「予感」	土田 欣之選	2月末
⑩「器」	波部 白洋選	3月末
⑪「空気」	中尾 藻介選	4月末
⑫「熱」	橘高 薫風選	5月末

〒593 堺市堀上緑町2丁目16-3

河内天笑方 堺川柳会

川柳太平記 (205)

川柳の群像

中島紫痴郎

東野 大八

上越線が新潟県に入り、六日町駅を過ぎる頃、右手に地元の人から作神、水神として信仰されてきた靈山八海山が目に入ってくる。その麓に広がる田園が最近評判の「魚沼こしひかり」の産地で、ここが中島紫痴郎の生まれ故郷である。

明治十五年五月二十四日生れて本名熊七。十九歳の時、病弱の母を癒せるのは自分だけしかないことと決意して上京。現在の慈恵医大の前身、慈恵医学校に学んだ。しかし日露戦争の勃発で、明治37年満州へ衛生兵として出征。無事帰還後、開業医試験の勉強中に、当時流行の新体詩に興味を持ち、和歌にもひかれて、鉄幹、信綱等を訪ねた。

しかし、「詩は短きをもつてよしとする」詩言に感じ、明治39年川柳に共鳴する。このこ

とから窪田而笑子、田能村朴山人の読売川柳会に入会、古句探求を始める。

だが、明治41年而笑子主宰の『川柳とへなぶり』にあき足りず、同志の森井荷十とガリ版刷りの『綾志野』を発刊したが、久良伎、剣花坊らが提唱した『狂句百年の負債を返す』の運動から出現した阪井久良伎の『矢車』に走った。

この若手川柳人の関心を高めた同誌上に、紫痴郎はとりどりの筆名で、さかんに新しい川柳論を展開した。十九歳の川上三太郎もここから筆を興した。

『矢車』は、やがて紫痴郎が横浜で医院を開業、また、荷十も結婚したことなどにより明治44年11月、31号で廃刊する。

その後、紫痴郎は、長野県湯田中に居を移

し、婦人科医として地元での評判もたかまり、更年期障害の治療や火傷の名医として知られるようになった。

こうして大正14年、竹翁と号し、萩原井泉水の『層雲』によって俳句活動を続けたが、昭和4年井泉水の合理主義に反発して、それまでの松声会を山ノ内柳風会と改め、同人とともに川柳に転じた。

この紫痴郎の柳界復帰の健在ぶりが、中央柳壇に知られるところとなり、剣花坊や久良伎、それに近藤飴ン坊等が相ついで湯田中に来遊した。

こうしたことから昭和7年7月、それらの人々の支援をとりつけ、矢車二世として月刊『湯の村』を創刊し、本格的な生活誌川柳を旗印に力強い川柳運動を開始した。

麻生路郎も『湯の村』に好意ある支援を寄せた一人で、同誌58号につきのような注目すべき一文を寄稿している。

「一概に矢車といっても、前期と後期に分ける必要があろう。前者は久良伎の息がかかっていたし、後者は反久良伎派というよりも、どちらかといえば新しがりのチャキチャキの寄り場であった観が濃厚であった。私が関係したのは、この後半の矢車であって、前半の矢車には全然、関心を持っていなかった。

廃刊の頃には、東京で出ている大阪の雑誌という観があった。

藤村青明、浅井五葉、木村半文銭、岸本水府、馬場緑天、地神佐竹とそれに自分がいた。東京では三太郎が天津へ行くし、森井荷十の孤軍奮闘だった。

句はなかなか新しがついて、鼻息も相当荒かったが、要するにそれは若さであった。

感傷的な句が一番多かった。デカダンスの句もないではなかった。無闇に主観の句を振り回したものであった。今からみれば大したものではないが、従来の川柳をなんとかしようという意気盛んで、作句の態度に皆の目があいたことだけは特筆していいだろう。

『矢車』22号で三太郎が眉愁と名乗って、

「私は一体日本人の皮肉、滑稽、洒落とかいうものには少しも興味を覚えな。その上滑りな人生に何等の約束もないものに、決して動かされたことはない。従ってそれらを要素にしている穿ちとか軽味というものを最も愚劣なものと思う」という一文を引用して、『湯の村』70号に荷十は、「私も同様な考えに支配されていたので、句作態度は、身辺雑事の範囲を出られなかった」と述懐している。

紫痴郎の創刊した『湯の村』の選句編集を引き受け、八年間毎月欠かさず刊行（昭和15

年6月号、94号まで）にはげみ、北信柳壇を發展させたのは金井有為郎である。彼は、紫痴郎との交わりについて、つぎのように述懐している。

「私の作句生活を左右したのは、実に紫痴郎先生であり、『湯の村』であった。このうち最も、私を人間らしくして下さったのは、紫痴郎先生の私生活であった。中島家の温かい家庭の雰囲気だったといえよう。川柳の主義は異なっているも拒むことなく、もてなす紫痴郎家の茶の間は、いつも湯田中の温泉のように温かった」と『中島紫痴郎先生追悼号』（『湯の村』昭和43年10月号）に詳記している。

「川柳は大衆の生活から離れるな。しかも詩性を高めよ。時代と共にあれ」

この紫痴郎の主張を文中特に強調している。昭和43年6月30日逝去。享年87歳。

生前、郷里の古刹八海山熊谷寺境内に「こんな川の水でも海へ行くのだぜ」

の句碑建立の除幕式（昭和40年4月）には、三太郎はじめ、北夢之助ら多数の著名川柳人が参加して盛大な記念句会を催している。また、自宅には「流れゆく水の素直さじつとみる」の句碑がある。

昭和23年に彼は『川柳しの』へ「実存と川柳人」と題する一文を寄せている。その抄

記

「実存は無動機、不合理、醜怪である。人間はこの実存の一員として、不安、恐怖の深渊にうごめいている。その苦悩を免れるために釈迦は仏にすがれと教え、キルケゴールは神に救いを求めると言い、サルトルは救いを無に求めている。何れにしても、自分に都合良く思考しても、肉体そのものが何を我々に示してくれているかを考えなくてはならぬ。見よ、精神の疑惑を無言で肉体が答えているではないか。昨春みずす誌上に私が「やがこの告別式へ俺がくる」という句を発表したが、一茶も死ぬ年の六十五歳の春に「我が上にいまに咲くらん苔の花」という句を発表している。（中略）我々柳人は、その境地へは遠くいるようである。それは人間の苦悩を詩にしないでならぬ責任があるからである。

秋晴れや こんな心に何時なれる」

以上の参考文献は、『中島紫痴郎の軌跡』（中沢ほう介『川柳研究』531・2号連載）

若き日に還り唄えば声太き 紫痴郎

老いの目に墓場の土はつめたすぎ //

▼次号は「古屋 夢村」

柳籠裏三篇研究 (二十六丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博・岩田秀行

紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

340 檀がつら脇へひつしり千ならべ

八木「段葛」は、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の二の鳥居と三の鳥居の間の道の中央に一段高くなつた歩道があり、これをいう。

八月十五日例祭。放生会がある。頼朝が鶴ヶ岡にちなんで、鶴を千羽、しかもその脚に短冊型千の黄金の札を下げさせて放したという伝説がある。

すさまじい羽音で千羽舞ひ上り 五〇二二

頼朝の代には小判に羽が生え 天五礼一

値千金鎌倉の空にあり 安四亀二

しかし、

東鑑に影もない千羽鶴

という句もあり、この伝説は余り信用できない

九〇二七

い由。

西原「賛」。「段葛」「千」で八幡宮（鶴ヶ岡）を意味している。「だんかづら」は参道の中

央部であるが、距離をもたせるために、世界一早い頃に遠近法をもちいた由。

千羽の鶴なら大変な数で、「段葛」の両側にびつしり鶴も人間もいたであらうとの意。

青木「賛」。「段葛の脇へびつしり並んだのは、鶴を入れて来た鳥籠であらう。」

鈴木「千羽鶴賛」

岡田「由井ヶ浜から鶴ヶ岡八幡宮まで、もとは田であり、それに下水などの設備のない当時は、雨が降ると丘の方から流れてくる水がぬかるむ。そのため、参道の中央に一段高くし、左右に木を植えた。それで段葛と称した

のです。

この句は段葛で鶴ヶ岡らしさを表現しただけの技巧。たいして意味はない。

341 座敷牢母信心をしやれなり

雨譚

八木「このままでよいと思います。『座敷牢』はやはりドラ息子でしょう。」

七久保「賛」。例外はあるが、いずこの母親も比較的子どもには甘いもの。母親曰く「もうすこし行いを改めなさいよ」と。でもあまり素直に母親の意をくんで信仰心を持たれても、何か下心があるようで不安である。

座敷牢数珠をねだつてこわからせ 二三一九
西原「賛」。信心して「色即是空」と悟れかしと。

鈴木・岡田「同」。

342 用も無ひからと朝寝のへらず口 間々

八木「現在もこのままで通用する句と思います。」

七久保「賛」。「起きてみたけど何もすることがねえや」となまけ者の弁。

西原「賛」。昔の人は、例の灯火のため、一般には早寝早起きであつた。よつて、朝寝のにくまれること、心配されること、今日の比で

はない。それらの人に対する「へらず口」が強いふくみを持つている。

鈴木・岡田 同。

343 たれござろふといふつらで妾が兄 玉簾

八木「たれござろふ」が正確に把めない。

誰でも来て見ろ。何様でございますというよなえらそつな面。その他が考えられる。

妾の兄というだけで、何かあれば妹の妾を通して、主人に告げ口をしようというきかない男なのだ、という意。妾の兄なる男への反感、嫌悪の情があふれている。

七久保 俄仕立の成上りの武士で虚勢をはって周りを睥睨している図である。

をら殿様と一家だと二本きめ 富四七
わらやるな若とのさまの伯父御だよ

岩田「たれござろふ」は「俺のこの威勢にさからうものは一体誰があらう」というので、七久保氏説がよい。虚勢というよりは、図に乗って威張っているところであらう。

佐藤 贊。「ここにお出でなさつたのは誰ござらう、拙者落合馬之允」などと、妾の兄の広言めいたことばを取りこんだ句案。

虎の威をかりて家中の笑ひもの 傍四三〇

鈴木 俄武士です。「たれござろふ」は七久保・岩田両氏適解。

岡田「たれござろふ」は「俺を誰と思つてゐるか」といつてゐる面つき。

344 寛永迄は鯛も入り鴨も入り 雨譚

八木 寛永の頃までは、海が東京湾のかなり奥まで入り込んでいたらしく、あるいはお濠と海がどこかでつながつていて、お濠まで鴨はもちろんのこと、鯛が入り込んでいたかもしれない、という想像句であらう。

青木 寛永寺創建・徳川二代將軍秀忠が、大御所家康の意を承けて、天海僧正のために、上野の地を相し、ここに寺院建立のことが決定したのは、元和元年十一月のことであつた。このため、津軽・藤堂・堀の三家の邸宅は、幕府の収用するところとなり、それぞれ替地を賜つた。かくして、寛永二年二月に着工、完成したのは同年九月である。

主題句は、寛永寺が建立される前の、藤堂・津軽・堀家へは鯛も鴨も入つただらうの想像句。即ち「魚鳥止め」で寛永寺建立以後は鯛も鴨も縁が無くなつたと言ふ事であらう。

佐藤 青木さん、ご明解。上野寛永寺の句です。鯛も鴨も贈答用に多く用いられるもので

あるから、大名屋敷には堂々と門から入つたわけであらう。

鈴木 青木氏よくお解きです。

岡田 同。「寛永までは」が寛永寺を暗示している。

345 とり巻いてとくさんの名ハ何ンといふ 夢中

八木 迷子の句であらう。

七久保 贊。主題句の迷子は札を付けてなかつたのであらう。

迷子札女房のちゑでかなにかき 拾一〇一九

青木 迷子賛。上五「取り巻いて」に人情の温かさが盛られ、下五で結集された感じがする。句そのものもホカホカと温かい。

鈴木・岡田 同。

第三回 風のまち川柳大賞

全国から一万二千句の応募があり、入賞作品がこのほど決定した。

大賞

ふるさとに待たせたままの風がある 原田都子

準賞

クレヨンで画くタンポポに風がある 佐藤安男
この風とアンドロメダに会いにゆく 榊原豊心

秀句鑑賞

同人吟 西出楓樂

— 5月号から —

阪神大震災から、四カ月半が経ちました。

もう経ったと言ふべきでしようか、まだ四カ月半と言ふべきなのでしょう。

ゲラ刷りを読みすすむうちに、次のような句をみつけたときは、心の中にポツと灯が点つたようでした。

補聴器へ復旧の音頼もし

はつ絵

活断層の上で未来を組みなおす

日枝子

若者の献身未来あり日本

まさよ

花咲かそ被災地故により赤く

房子

復興の音めざましく桜咲く

まつお

親と子の絆で再建する我が家

利武

半壊の家で明るい花を活性

よし津

非常袋の中身いつしか元の場所

満津子

自分の経験や感動を詠んだ句に、強いインパクトがあることは、今さら言うまでもありません。

ところが、誰もが刺激的な日々を送っているわけでもなく、年と共に感性の錆も

厚くなつてきます。けれど、それに負けるこ

となく好奇心を常に持ち、何にでも挑戦する

ように心掛けたいものです。

興安嶺の夕陽に祈る明日の無事

田村新造

ご存知のように作者は、ずっと満州からの逃亡をテーマに作句しておられます。いのちと真正面に向き合った日々の体験は、どの句も強く胸を打ちます。とりわけ、まだ命ある戦友を置いて、逃げざるを得なかった極限状況の句には、鬼気迫るものがあります。

この句からは、逃亡生活の中の時が止つたような一刻、思わず夕陽に手を合わせた作者のシルエツトが、くつきり見えてきます。決して風化させてはならぬ戦争を、子孫のため今後も詠み続けてほしいと願っています。

助かるとわかり病人叱られる

古川喜美子

見舞に訪れた病室で、時に見かける光景です。病人の「叱られる」度合が大きいほど、まわりの人の愛情が深いと言えましよう。それと共に、大切に思われているからにほかなりません。人情の機微がたくまざるユーモアの中から、にじみ出ています。

ぼっくりと逝けたら拍手してほしい

新家完司

死が近いところにあるわけではなく、さりとて全く意識しない若い世代でない。そういう年代の作者だからこそ、軽く表現出来たのでしよう。暗くなりがちな題材でも、ホイホイ手玉にとつて、明るく詠んでしまわれる手だけに、心から敬意を表します。

泪涸れたひとのかわりになみだする

酒井輝

もつすっかり涙を出し尽した、悲しみの極限にいる人の心情を思いやり、泣いている作者。俗に言う「もらい泣き」の安っぽい光景になりがちです。平易に詠んであることにより、作者のやさしい気持が前面に出て、好感が持てます。

ボランテティア賢治が西へオロオロと

吉田あずき

阪神大震災のシーンに、宮沢賢治を登場させた作者の感性に、きついパンチを浴びたような心境です。

春や春囃されやすくなりました

江原とみお

心から春を称え、よろこび、楽しんでおられるのがわかります。特に中七の言葉が生きていると思います。

恋人の帽子を被らせて貰う

小島 蘭 幸

恋人と価値観を共有できる、ときめきと期待が伝わってきます。「恋人の帽子」という比喩がたしかで、よく切れる刃物の切り口を思わせてくれます。九、八字と破調に句を仕立て上げたテクニクが、作者の心情をしつかり表わし、にくいばかりです。

心より顔がお先に齢をと

大原 葉 香

義母が晩年よく「気持は今もはたちのままや」と言っていたのを、ふと思ひ出しました。感じたまま素直に詠まれた句ですが、その底には神様から与えられた齢を、有難く受入れておられる気持があるのがわかります。老いてゆくことを、明るくとらえておられるところを買いました。

一癖も二癖もある実力者

三宅 保 州

浮世の不条理が、たしかな目で描んであります。「天才へ親類あんなものと言ひ 路郎」人柄が立派で、敵もなく、誰からも褒められれば、世間が認めてくれるわけでないのが常です。裏を返せば、人の顔色をみて、八方へ気を遣っていたら、単なる「いい人」の域を出られないのでしょうか。

言わんでも男 言うてと女かな

藤 解 静 風

もともと言葉は、相手に意志を伝えるためにあるものです。こんな便利なもののなのに、何時頃から男は寡黙をよしとしてしまったのでしょうか。この句からは年配の夫婦の姿が目に浮かびます。若い夫婦ならこんな夫は、当節通用しないからです。

目を入れてからのダルマはよく転ぶ

稲 本 凡 子

ダルマに目を入れることばかりを、人は考えがちです。目が入って以後という着想に、作者の川柳センスの良さを感じます。しかも「よく転ぶ」のですから、目を入れる以前の過程まで想像をめぐらすことが出来ます。

一日がジョークで終わることもある

金 山 夕 子

電話をかけることも留守、人に会いにゆくと入れ違い、買物に行くのを忘れるものをする。誰にでも一年に数度あるこんな日も、作者の手にかかると、こんな楽しい句になります。薬味となつて古い女のまま生きる

光 井 玲 子

「薬味」の存在の意味を、考えれば考えるほど、句の奥行が深まります。女の生き方として、私も望むところです。

信念がときどき邪魔になる六十路

北 山 好 笑

難しい数詞の使い方の成功例です。六十代の女性が新聞記事になったら、どんな見出しになるでしょうか。「主婦」ではちよつとしんといかな、と思える微妙な年代を、オブラートに包んでうまく表現されています。

花道の花はきめてる雪柳

松 本 今日子

ご存知のように雪柳は、桜と同じ季節を彩ります。他にも数ある花のうちから、この花に決めた作者の美学に、理屈抜きで素直に溶け込むことが出来ました。

肩書が消えて誇りをもつ名刺

芳 地 狸 村

もって生きざまの範とすべし、と感じ入りました。定年後粗大ゴミとなるか、この句のような人になれるかは、これまでの膨大な日々の積み重ねでしょう。つまり、心掛け次第と言いたいのです。

疑いもなく蛇口の水を飲んで

小 谷 美 千

このところの世上の不安に、そのまま読み過すことが出来ませんでした。疑い出せば森羅万象が怖くなってきました。戦後五十年、精神の平和も欲しいと希求します。

水煙抄

高杉鬼遊選

今治市 村上 久美子

似たような喜劇 私もその一人
均等法いじめに遭っている男
お隣はステキーですと路地の風
ままならぬ恋にベットの血統書
よく滑る口だ階段踏み外す

富山市 島 ひかる

魂が浮上ねむりが深くなる
生きて行きなさいと一つ蜆汁
甘い水飲んだ仲間の名が言えぬ
若い娘を見てると貰い笑いする
花一輪ワイドな胸を引き立てる

八尾市 生 嶋 ますみ

油断かな大事な時に風邪をひく
それぞれに役目を持っている指よ
お祈りがながくてパンが焦げている
こたわりをひとまず捨てて派手を着る
お花見もまずはタコヤキ食べてから

尼崎市 尾宮 弘治

余震もう潰すものなし庭の梅
地震後の壁に幾何学布テープ
傾いた家で明日の策を練る
議会中継横目に猫とたわむれる
補聴器を忘れ言葉のない笑顔

河内長野市 大西 文次

誘われて未だ断ったことがない
晴耕雨読 雪の降る日は酒を飲む
八十五 鯖を読んでも始まらず
嘘をつく人に仲人頼み込む
妻が痩せ夫が肥える本を読む

尼崎市 長浜 澄子

眈のしこりが消えた冬の虹
忠告をほどよく溶かす絵の具皿
目立たない位置で人目を引いている
グリム童話と一日過す寂しい日
ちびた鉛筆から願望の発酵す

羽曳野市 麻野幽玄

野良猫という宿命の人嫌い

いつもと違う風に戸惑う白い杖

介添が居ないと散歩すぐ帰り

一笑一若 一期一会の寄席の客

預かった花は萎れる時期だった

宝塚市 嵯峨根保子

トラブルを避けて気付けばかやの外

水面下ポストを狙う魚たち

夙川の遠慮がちなる宴かな

野鳥きて等間隔のおつき合い

かなり無理したかいあって桜咲く

宝塚市 永田 曉風

桜咲いて散って病院の窓

ラムネ壺 昔を語る人がいない

愛か厚意か一筆箋の無口

飾り窓老いを映すは雨の午後

終焉や誰かが何処かで呼んでいる

大阪市 中田 あい子

ガス水道来ぬ被災地に春の雨

旅行費がたまれば休むアルバイター

美人すぎ御縁に遠く今もミス

大掃除 屋根で一服してた父

結願の四天王寺に咲く桜

枚方市 前 たもつ

ランドセルも慣れて道草始め出す

日曜の顔で新聞読んでいる

籤引きで決める役ならばくがする

へそくりがばれて通帳差し押さえ

連れてきた相手と父は飲みたがる

静岡市 小木 久子

手放せぬ手帖 私のパートナー

母さんに内緒 血圧上がるから

きれいごと言いあっている電話口

春風に乗ってウインドシヨッピング

はみ出したシャツも流行ともなれば

札幌市 三浦 強一

選挙カー静かに孫が寝ています

職退いて国からもらう二人扶持

焼酎にしよう年金二人扶持

五つ玉一二天作 亡父の貌

折り返すまではトップという自慢

島根県 武島 ちよえ

放つというたたね金に替えられぬ

変り映えない我が家で落ち着ける

言うことを聞かなくなった糸切り歯

枕元気遣いながら夜のトイレ

半額で買っても金は溜らない

豊中市 石川 勝

港神戸に淡谷のり子の窓がある

校長がラーメン食べておかしいか

松葉蟹 足を整形して売られ

芋の蔓 昔を恨むのはよそう

医はなさけ牛に食わせるほど薬

堺市 宮本 かりん

お隣の桜で春を飲んでゐる

青空の唄が好きです紙コップ

失敗をだれも咎めてくれません

さまざまに変化してきた愛の文字

雑草も気概だけでは生きられぬ

松江市 松本 知恵子

のど飴を噛む連翹の黄が眩し

エリート男が悩む花粉症

人事異動 神話もいつか遠ざかる

さりげなく獣医のちの話など

雨の朝 白木蓮の明るさに

西宮市 古谷 ひろ子

消してある元値まともと思えない

たわいない話で笑う花の下

命を洗うふた月ぶりの家の風呂

震度七ひとの情けをとり戻す

北の屋台まだ震災の悲話で飲み

熊本県 高野 宵草

世話好きでしばしの阿呆やってます

水虫が怠惰なぼくと仲がよい

洋式になってトイレは読むところ

指差点呼して消灯の床に入り

鳥取県 吉田 孔美子

ねむそうな顔では客に失礼だ

朝市はわたしの舞台おしやる

快諾の目を一票に読んでゐる

おしゃべりな傘とバッグね乗りすこす

出雲市 原 章峰

たとえ話が嫌いになってゆくさくら

置き薬いのちを置いていくように

思い違いがだんだんに染まるなり

セーラームーンとミッキーさんが古希祝う

愛冷めてその優しさが重くなる

根回しが出来てたらしい風の向き

平和呆けしそう冒険したくなる

耳もとでひそひそ孫のいい内緒

伊丹市 樫谷 郁子

倒壊の地獄粧い桜散る

何も無い庭に名残りの八重椿

春寒し被災者同士が語る庭

手続きに役所へ急ぐバスを待つ

紫陽花と恋の話の小半時

名古屋市 藤井高子

秒針がせまると人はただ祈る

現実にかえれと小銭入れが鳴る

鮎の骨すんなり抜けた箸の膳

寝屋川市 森 茜

マイペース驚進中か沙汰がない

自画自賛おとととこの辺で

隣室はのぞきやすくてのぞけない

孫の目においしそうな鯉のぼり

河内長野市 橋本弘美

知らぬ間に適齢過ぎた葱坊主

灯油買おうか我慢しようか春の雪

義援金にしましたスーツ止めました

私の味方二冊の貯金帳

相生市 中塚礎石

乾杯のグラスの底にのこる嘘

句読点どこに打とうか陽が沈む

好きな物入れて柩はにぎやかな

馬鹿にした田舎に青い空がある

東京都 清原悦子

いつまでも甘えてほしい子は巢立ち

まがり角隠したいからする化粧

アジサイが長い梅雨をなぐさめる

また一つもめて私は強くなる

断水続く水がこんなに重いとは

芦屋市 藤井千年

無事を知らせる公衆電話長い列

余震かとドアの音にも身構える

ボランティア彼も廊下で寝ると言う

岸和田市 亀井皎月

八起きめが済んで今度は転ぶだけ

らっきょうの花が奇麗とひとりごと

借金は無いが預金もない暮らし

眉が邪魔 対応遅れとなる総理

尼崎市 軸丸勝巳

一駅復旧ひと駅だけであの笑顔

渡り鳥 神戸一巡して発てり

いじめかも知れぬ円高底がない

日曜になれば病気の癖がある

寝屋川市 太田藍子

新入社続きそうかと聞いてみる

食欲が仕事して来た証明書

天災に人災 選挙まで狂う

昔通りに電車が通る有難さ

新潟県 高野不二

証明写真しみじみふけたなと思う

日本一短い手紙孫がくれ

安月給でも年金のありがたさ

花言葉関係がなく花が好き

兵庫 倉垣 惠美

久留米 鶴久 百万両

玉子焼くるくるニュースまたオウム
ふる里が見えるぬけ道知っている

そろそろぼちぼちしいやと言われても
神も人も競うてならぬ火の匂い

鳥取市 植田 一 京

チューリップ明日の期待はせぬように
訣別に花束の白目にしみる

自己主張しない真珠に油断する
恋をして鬼女もほのぼの月を見る

泉佐野市 内田 倫子

他人ならぐちに相槌うてるのに

山の中近くに見えた灯が遠い
背伸びして孫はポストに入れたがる

老母の死を時には願う恐ろしさ

寝屋川市 後藤 黎之助

この齢で無病息災とは書けぬ

花だよりその気にさせるニュースなく
タンポポが咲いたよ明日信じよう

歳の順大往生を回し読む

西宮市 牧 潤 富喜子

生きてきた意味問うている午前二時
ポケットで鳴る鍵の鈴もういらぬ

城落ちて地震が一步引き下がる

見とどけて自分に線を引いている

黄のハンカチ窓に吊るして蝶をまつ
返り咲くその日へ牙を研いでおく

サヨナラがつかなくて不眠症になる
マイペースの敵を射落とす策がない

寝屋川市 籠島 恵子

花の下 夫をちよつと忘れてる
つくしごはん年に一度のことだから

風邪気味を気付かれぬよう予定表
てんぷらを揚げておりますのよ電話

唐津市 入江 喜久亭

拔擢をされた積りが左遷とは

知らぬ者同士が喋る屋台酒
離婚したことも知らずにバラは咲く

旅行けば闇の深さが身に沁みる

富田林市 藤田 泰子

一周忌 妻という名の衣脱ぐ

飼い主の死角で爪を研いでいる
鬼も蛇もみんな人間様の顔

黒雲を笑いとばして生きのびる

綾部市 藤田 芳郎

春うらら三粒余った糖衣錠
カタカナを武器に爺ちゃん黙らせる

タクシー代をけちり風船吹いている

真っ先に音をあげたのはやじろべえ

摂津市 木下道子

春の雨 母に手紙を書こうかな

遠慮なく呆けたらいいよおかあさん

落ち込んだ時のよいしよで立ち直る

結婚記念日忘れてふたり仲がよい

大阪市 一本勇太

地獄絵の極彩色は派手すぎる

ある時は針より痛い妻の指

暗号が解けると首が寒くなる

言うなれば通行人に過ぎぬ椅子

八尾市 平川幸枝

向こう岸 越後屋が居る六文銭

考える人で終るか花も見ず

医者だけが私に触れる聴診器

川の字を二つ越えれば妻のそば

唐津市 浜本治幸

友来る日 居間がきれいに片付いた

ちぎれ雲お前も俺も放浪者

賞味期限切れる牛乳一気飲み

トンビ舞う人の愚かさ誹り鳴く

高知県 百田幸

恩返し墓に頭を下げるだけ

番組を狂わす事件渦を巻く

若者の煽てにも乗る老いでよし

良い話 今日 空気も澄んでいる

和歌山県 杉山精子

穏やかな海と呼吸が合っている

書評とは違ふところにある思い

思いきり生命の毬を弾ませよう

太陽も月も私に背かない

熊本県 大川幸子

勝つても負けてもどうなる事でなし

終身現役のがれられない主婦稼業

親と子の声間違える電話口

もう二度とこんな出しゃばりやめにする

倉吉市 松本よしえ

迂闊にも影を落したかくれんぼ

陽炎の向うで誰か呼んでいる

ふところを曝けてからは動じない

話はすんだなかなか酒が出て来ない

静岡市 沢田きん

夜もすがら老いを見守る置時計

小半日掛けて気を揉む探し物

今日もまた外出らしい留守電話

時に触れ吾が終末を考える

島根県 菅田かつ子

おぞましい世に水仙の美しさ

害虫に犯されました青りんご

むつかしいことが苦手な生まれつき

こんなとき浮いた話のふたつ三つ

泉佐野市 河原崎 純 隆

ローン済み敷居の内も我が家です

解説を読んでうまいと思う句碑

釣銭がしめた十円多かつた

忠告をしたいが英語話せない

西宮市 岡 本 道 子

白杖へはっしはっしとにわか雨

莓つぶつぶ一日邪魔をして暮れる

ふいに恋ふいに春風つくしんぼう

おにぎりを大きく握る肝つ玉

熊本市 遠 山 夏 生

着任のもう冒される杉花粉

政治家に政治委せておけぬ国

採決になると話のかわる友

折角の美人車が汚れてる

河内長野市 印 藤 智 子

風邪にねて炊事の夫にありがとう

童話よりセーラームーンが好きな孫

エープリルフルそんな元気はもう出ない

色あせた桜に自分だぶらせる

尼崎市 的 場 十四郎

肩書のとれた名刺がよく喋る

公園の仮設の庭に春遠く

咲き切って素直になった落ち椿

菩提寺の段差に桜綻びる

尼崎市 岩 倉 キク子

待ちなはれ言いたい事は明日まで

海底に眠る戦闘機を抱いて

ささやかな誇り邪魔して生きにくい

消してから逝こう現世のしこり

秋田県 湊 修 水

たんまげた秋田の四月雪しきり

花だよりこちら雪だとかえす文

あの日から老婆は慣れない車椅子

車椅子押して万葉を楽しまん

今治市 渡 辺 南 奉

走ったら疲れ休むと怠けぐせ

世は正にこんとんととして桜散る

雲の峰やがて一人になるんだな

それぞれの思惑がある花むしろ

八尾市 村 上 ミツ子

散る花の言い分ちよつと聞いてみる

ひも太くなつて結び目ゆるうなり

代わり映えしないが風を通して

やわらかい言葉できついことを言う

唐津市 松 本 圭

大根をコトコト炊いてそつと食う

しゃべろうとしてる魚は食べられぬ

目刺し食う頭は猫にわけてやる

唇が木綿豆腐のような女

鳥取県 岩崎 みさ江

母の死を悼むか春のぼたん雪

あるじ亡き畠に伸びる葱坊主

こだわりを捨てて気楽な靴を履く

富山県 高畠 五月

午前さま静止画像の妻がいる

トゲのある花はきれいに咲きたがる

偏差値がここにもあった二度の職

愛媛県 安野 案山子

禁煙を立派なことのよう言う

円満の秘訣は妻に聞いてくれ

無味無臭そんな男のプロポーズ

神戸市 向井 泰子

災害をしばし忘れる珈琲店

にぎわいに風船もいく三の宮

久々にはじけるようによく笑い

兵庫県 安達 厚

年金で真冬に母買うおごり

弱点をかばってくれる妻がいる

夜桜の一ひら受けて春を飲む

八尾市 村上 剛治

うまそうな匂に進む腹時計

化粧品 値の張る方がよく売れる

祈るしかないよ無力なこの僕に

羽曳野市 西村 りつえ

山椒の木 蝶の昔を喋らない

いちご盛り軽いおしゃべり午後三時

花びらを墨にすりこみ写経する

兵庫県 中野 とよ子

断層があるとはじめて知る大地

震災のはなし涙の輪に入る

人間の気持を変えた地震です

大阪市 勢理客 トミ子

ツーカーの仲もいささか飽きが来る

円高の苛立ち朝のパン焦がす

サリンなど無かったいくさ兵馬俑

高槻市 庄野 澄子

本音二分 建前八分 生きている

やっと一日終わらしみじみ顔を見る

たった一人の部下が社長とよんでくれ

鳥取県 山本 正光

作業場が心配なのか覗き込む

銀行に食い扶持みんな握られる

一日中ごろごろしてて飯は食う

鳥取県 奥谷 彩子

無事定退晴れ晴れ城を明け渡す

草に寝て草の華やぐ私語の中

軒下に薬草を干す余命干す

入院の知らせおろおろするばかり
寝屋川市 富山 ルイ子

ミニ菜園大根の花の可憐なり
分担が決まり家族の中に居る

羽曳野市 安芸田 泰子

満点の妻でないから気が楽だ

強いられた我慢いつかは点火する

ひき返すきっかけのない花の道

和歌山市 古久保 和子

空豆がにこつと笑う春の膳

温かい嘘にしばらく騙される

今日の胃は素うただで丁度いい

松江市 安食 友子

落葉掃くいちごつこのように掃く

隣席の私語に気が散る電算機

けったいな話 豆腐の好き嫌い

愛媛県 中居 善信

黙禱へ帽子を強く握りしめ

疾しさがあって帽子を深く着る

勝った負けたに遠いところのホームレス

岡山市 山磨 行子

花冷えに身体やすめと風邪の神

突然死のぞむ余生へ身嗜み

老い二人デートの先は投票所

苦勞してようやく今日のモーニング
引取られ嫁の顔色みる暮し
ホワイต์デー孫に送った髪飾り
羽曳野市 川田 晋

イメージのいい押売りに買わされる

鳥取市 杉本 孝男

湿っぽい話はよそう春だから

手さぐりの暗闇だから君と行く

避難所で身の上話聞いている

尼崎市 吉永 伊三郎

震度七 鳥居も墓もごめんやす

二度押したベルが合図の春の午後

七重八重 無心へ頭下げにゆく

静岡市 片平 静代

別れると困る夫と口喧嘩

反省をします猿に学ばねば

風習に沈み何度もお辞儀する

田辺市 大峠 可動

闘病三度 肺の穴から世を覗き

月は母 星は浄土の人達よ

亡父のこぶしこんなにもろい骨拾う

鳥取県 原 みさを

畑から湯が出てからの村の修羅

七色の弁当つくる嫁が来た

香川県 山崎 はつ恵

ワンランク落として花を咲かせたい

わだかまりそろそろ水に流さねば

海岸のしぶきで私洗われる

広島市 流 奈美子

投票日までの笑顔よ選挙カー

飽食や政治小粒になり給う

梅雨晴れ間一つ解決できました

鳥取市 山口 しげる

円高へかけた梯子が短過ぎ

どん底をなめた男の歩が活きる

クロスワードのように言葉のワナがある

茨木市 島 元 ふ み

同窓会老いこんだのは男だけ

スーパールの魚に慣れた島育ち

島だとは思っていない島のひと

箕面市 木村 天 弘

定年後気になる妻の優しすぎ

あどけない孫の笑顔に救われる

うちの子がまさかのいじめ嘘でしょう

尼崎市 野瀬 昌 子

大丈夫電話しきりに尋ね合い

寒かったらう恐かったらう母の声

寡婦一人電話の声もかまえてる

尼崎市 河津 正 治

不倫ではないが女と春を酌み

父の樹を揺する頼みの子は二浪

ポケットベルたまの逢瀬を引き離す

香川県 堤 く に 子

海岸の汚染をなげくゆりカモメ

天井に句を遊ばせて不眠症

夜遊びの猫を待つてる勝手口

堺市 桜井 莊 次

突っ走る噂に揺れる百日紅

ぶっちゃけた話の好きな回り道

釣書へ母が目の色変えて来る

大阪市 尾崎 黄 紅

花の名は知らぬが花の彩が好き

だってさに負けてはおれんそうだっせ

よう来てくれたまあ聴いてんか訊いてんか

島根県 福岡 博 利

春の陽に竹も背伸びをしています

住みついてみたい一つに漁師町

地震サリン日本全土活断層

島根県 松本 聖 子

行きたいが何かこだわるものがあり

何げなく人のふところ見ていたり

肯定も否定もしない無党です

鳥取市 津村 静枝
木の芽だち我が娘にちらり妬けている

時折りの娘の電話安定剤

約束があつてそれまで落ち着かず

米子市 木村 春枝

大気汚染 人は大地にひざまずく

水平線広い世界に物申す

愛着が部屋をだんだん狭くする

静岡市 永倉 柳華

未練などないが釦を付けてやり

合格の知らせ茶の間の灯が消えず

地下道を通つて迷う駅の道

静岡市 浅子 まつゑ

親子です気兼ねいらない口喧嘩

言い訳をしなくてもよい物忘れ

何気ない一言老いを喜ばす

静岡市 三浦 つね

親捨てた子供に送る金をため

何時の日か母そつくりになつて老い

新しい柄に馴染まぬ石頭

静岡市 佐藤 次枝

居てほしいされどたまには留守もいい

南無阿弥陀唱えてあさり鍋の中

何かするはずを忘れて小半日

静岡市 松下 正枝
まだ生きているかも知れぬ芽を探す
とにかくも着替へなくては落ちつかず
窓明かりゆうべ雨戸を閉め忘れ

富田林市 山原 昭水

東京の友 通天閣へ連れて行く

裏方が父ゆずりかな性に合う

平凡な暮らしが好きで鯛焼く

大阪府 原 美恵子

簡単に欺されましたアツハツハー

電気またつけて眠れぬ夜が更ける

同じ事なのに許せぬ人が居る

鳥取県 権代 康女

年老いて新語の浪に乗せられる

聞かなければ良かったいらぬ気をつかい

好い顔をしようと思えば金がいる

鳥取市 谷口 侑里

さあどうぞ席譲られて老いを知る

過去は過去今を大事に生きている

末の子が入学勤めやめられぬ

出雲市 加藤 スズコ

被災地の春の彼岸は悲しすぎ

春霞 湖水もゆるむ旅の宿

平成と昭和をたしてたぐるひも

青森県 諏訪 柳々

子はテスト ママは衣服を競い合い
ゼニでない貸し借りあつておれお前
親子だね親の死因の持病もち

鹿児島県 大山 舞鳥影

談合と相乗りだけの首長選
無名戦士 名前や家庭あつたはず
新採用マナー低下が加速する

宝塚市 飯西 ミサヲ

釘を打つ 簞笥仏壇容赦なく
震災で離婚調印無期延期
震災の余波で子が来る孫が来る

河内長野市 水谷 笙子

長生きをして欲しいから小言言う
歯の治療終つて卑弥呼読み残す
化粧塩ほどよくされて鮎美男

大阪市 中橋 恵美子

辞めてから止まつたままの腕時計
私から私が消えるサングラス
洗車して怪しくさせた空模様

大阪市 松永 会美

紙コップ出番の多い春が来た
連絡船島へ渡るは顔なじみ
古希祝う鯛も片身で事足りる

豊中市 岸田 知香子

墓参り兼ねて上京同期会
老い忍び変りようない古希迎え
キャンパスの巣立ち和服の華やかさ

羽曳野市 山本 たけし

国民のひとり残らず知るサリン
草むしり 和気あいあいの老夫婦
栄光の過去も忘れた長寿園

今治市 渡邊 伊津志

蛤の手ごたえあつて波を浴び
風の道見付けた野火が立ち上がり
喝采の海で初心が溺れ出す

唐津市 福島 紀一

一泊二日気をもませでの萩みやげ
わらびとり鶯の声聴きはれる
気が早い蕾の下で花見酒

唐津市 山口 ふさ子

亡母からの手紙年経てセピア色
御用心 女あつさり捨てられる
幸せと思えば苦勞苦にならず

唐津市 江川 青琴

山鳩がチャボと仲良く餌拾う
白黒をすぐ決めたがる人の癖
理屈ばかり並べる人の憎らしさ

鳥取市 岸 本 宏 章

赴任地に慣れて故郷が遠くなり
弁当を食べて楽しみひとつ減り
草のないところ人間よう住まぬ

芦別市 斎 藤 房 子

居心地のいい輪の中で幸を噛む
春らんまん胸の扉を開け放つ
有頂天の背にひたひたと風の刑

今治市 野 村 清 美

自動ドアと思い込んで待ちぼうけ
帰省の子待ってるだけの車庫を借り
姑看取る嫁の素顔が光ってる

十和田市 阿 部 喜 久 江

風の子を教育ママが縛りつけ
スマートにかわされましたプロポーズ
人情があふれ住みよい過疎の里

尼崎市 中 澤 向 西

まだあると妻が突き出す請求書
救援物資 神戸コーベと道ふさぐ
如来さま倒壊寺の激震稿

和歌山市 吉 村 さ ち 子

人間を納得させる花吹雪
ひかえ目な愛を抱いてきた温み
一切を許す気になる花の下

福岡県 本 田 忠 男

陰膳の皿に盛れない恩がある
歛握る指でワープロ打ってみる
余命表くれば貯金に残がない

鳥取市 山 宮 愛 恵

ライバルの調子がよいぞ負けられぬ
三途の川渡る小銭を貯めている
やわらかな新芽触れたい気にさせる

和泉市 中 川 楓

経済大国どこのことですチラシ見る
強がりはやそう背骨のきしむ音
賞品を見てからクイズ解きかかる

姫路市 服 部 一 典

のぞみなどないと言つては手を合わせ
妻入院やもめ暮しを見るすずめ
お寺よりカラオケ参りありがたい

大阪市 今 西 静 子

人文字の中のひとりが叛き出す
メランコリー茶漬がつづく凡婦です
南座の余韻が雨を歩かせる

大阪市 三 浦 千 津 子

吊皮にノルマ果した身をつるし
共にあるしあわせ太くなる絆
値は問わぬ心のケアへ胡蝶蘭

大阪府 澤田和重

相槌を打つと味方にされている

先読みが下手で転んでばかりいる

一悶着起きそう輪から抜けて出る

唐津市 山門幸夫

バス停の変わらぬ町へ里帰り

身軽だとはやされ重荷負う破目に

九個目の孫のカバンが買えました

唐津市 山門タミ

重い荷も孫は軽々持ってくれ

呼び鈴にハイハイハイと言うて出る

喜びが喜び事を連れて来る

富田林市 欄 智久

付いてない時は影まで離れそう

待ち呆うけ人のデートを見てるだけ

やっと会えた被災の戦友へ乾杯す

海門市 谷口義男

曲り釘叩き直して二度の役

惚けてない証拠お世辞も愚痴も吐く

火の酒が弥勒菩薩も狂わせる

和歌山市 木村親路

信号の青を待つてる蟻の列

アクセルとブレーキどちら踏むべきか

カラスから馬鹿にされてるうちの猫

河内長野市 木太久正一

手術する妻に明るく語りかけ

いかなご煮 義姉から届き安堵する

転勤に娘夫婦の遠くなり

豊中市 藤原桂子

気の弱さ優しさとみる恋心

来客へ晴れ間うれしくふとん干す

浪費癖いつもバランスくずれます

米子市 小塩智加恵

相性でないが私の我慢だけ

値切ったらしい値にされてどないしょ

へそくりがタンスの底で味方する

吹田市 西岡豊

チャンスにも踏ん切りつかんあかんたれ

付き合っても限度あるよと叱られる

ちびちびと地酒の好きなイヤリング

高槻市 傍島克治

世渡りが下手で大樹の陰に居る

惜しかった話ばかりの釣の宿

口あけているのに歯医者問いかける

鳥取市 坂田和歌子

やっこの思い振込み済んで昼寝する

少ししかないから笑い小出しする

摺り鉢の溝に逆らう更年期

尾張旭市 三浦 きぬ

自画自賛一人住まいの身の果報

四畳半無くて私は落ち着かぬ

いつだっておいであなたの席はある

大阪市 川原 章久

春一番青いシートの屋根が飛ぶ

有難や大仏の息春の風

吉野山舌にとろりと葛湯溶け

沖縄県 杉谷 一栄

ばあちゃん包丁研いでくれる人

白い犬見ればうちのとよう似てる

分骨のこと細々と米寿逝く

香川県 田中 ふみ

迷わずに先祖供養の灯を点す

春の香がいっぱい溢れ桜咲く

満たされて何時か幸せ忘れがち

藤井寺市 高田 美代子

五月連休 親子ゲンカが始まるよ

春の雨一日ねむることにする

箸よりも重たいペンを持っている

旭川市 朝倉 大柏

祝い酒飲まない下戸も酔っている

訂正をしたものと字が見たくなる

距離おいて見ればはつきりする歪み

大阪市 亀井 円女

手術して見えないものが見えて来る

ホームレスあなたの夢は何ですか

悔いは無し同じ台詞の出るお酒

高知県 桑名 孝雄

真剣な妻が鰯の前に居る

面従腹背ゆめゆめ油断召さるなよ

物騒な世相なにかが欠けるのか

寝屋川市 坂上 高栄

見舞客帰った後の深呼吸

玉手箱もらわぬほどの遊びなら

腹の虫写されそうなカメラ吞む

香川県 高橋 たみ

窓ぎわで蝶が話をしてくれる

この先に何があるのかわからない

一日を照らし続けた陽が沈む

和歌山県 藤井 春子

ひと息を入れて勝利の女神呼ぶ

鈍才に見せて手綱を加減する

遠慮禁物 人の心を有難く

鳥取県 橋本 多哥由

出番ですあなたそれでも男かえ

有難い亡き父母の分生かされる

先生は時にネクタイ変えている

島根県 森 茂美

友の骨乾いて軽し二人箸
天上に友を送って乗る夜汽車
夫婦して咳き込む夜の旅疲れ

和歌山県 上岡 正直

暗記した教育勅語反故にされ
新憲法父権地に落ち粗大ゴミ
いい合ってそれで結構仲好しだ

今治市 塩路 よしみ

ここだけの話が好きなら市場籠
残された命いい事あるだろうか
ほめられて素直に受ける花万朵

鳥取市 田中 友子

ふところが寒いと酒がまわらない
スマートな馬の走りに夢を買う
城跡に登り昔の風に会う

尼崎市 森 安夢之助

敵よりも厄介なのは妻の口
妥協してから一寸だけ肥えてきた
勝手口から転げでたのが本音だろ

泉佐野市 稲葉 洋

家計簿の赤字うごめく手暗がり
読書とは言い難いけど般若経
泣きごとを聞いて欲しいが見栄もある

羽曳野市 酒井 一壺

友だちに次のポストを狙われる
投函の音で決心やつとつき
思い出は黒パンの味 角の店

尼崎市 立谷 勇次郎

コーヒーは心とします黒い魔女
握手した手からのぼせが這い上がる
ワンカップ秘薬媚薬と使い分け

岸和田市 井 齋 一 齋

二日酔い電車私を轢きに来る
寝たきりで祖母は実印放さない
連休へいつもへソ繰りかり出され

西宮市 池田 善守

老後には単身赴任役にたつ
さて久し虹をみたのはいつかない
孫かえり楽になったと寂しがる

河内長野市 柏本 靖子

あすか野に佇てば古代の風が吹く
背広脱ぐ日から始まる我が余生
こだわりを捨てて笑顔で逢ってくる

和歌山市 津村 武春

淋しくて身の上話してしまふ
相談が何時の間にやら愚痴となり
夢だけが生き甲斐という堀の中

体重計 中年太り嘲笑う

和歌山県 中村君枝

手を打とう心の傷の浅い間に
昔話好きでタライが放せない

大山市 早川盛夫

逆らつて存在価値を確かめる
企てがあるかも知れぬ招待状
ランドセル重たくなつてくる頃だ

池田市 藤井計

セリフない通行人の独り言
ふるさとの風の鳴き声母と聞く
春の使者笑いの渦ではころびる

和歌山県 山根めぐみ

目薬がポトリ冷たい孤独感
ちよつぱりと妬いてかわいい妻でいる
頼かむり辛い立場の板ばさみ

和歌山県 楠見章子

自己顕示わたし私に耳が飽き
まあまあに慣れて贅肉身にまとう
観光地どっち向いてもハイチーズ

寝屋川市 宮崎菜月

会いたいナ桜すぎでの恋ごころ

父の日に父の行動見守られ
傷もまた大きく育つ若竹よ

決心をおろおろさせる金の多寡

佐賀市 古川かずのり

喧嘩する相手はいつも妻の愚痴

ふらふらの男ポケットベルが鳴る

羽曳野市 芦田絢子

シナリオに何時まで続くひとり旅
書き足して足してシナリオ虹色に

家庭内離婚 罰あたりだと思ふ

大阪市 遠藤正敏

これからを探す旅です妻を連れ

誰にほめてもらわなくとも塩である

途中から黙った医師の顔を見る

鳥取市 藤ふうこ

留学の土産に嫁をつれてくる

野仏にワイン供えて願いごと

五十回忌 少年兵は散り急ぎ

羽曳野市 徳山みつこ

カナリアが第一線に立つ恐怖

安全神話また消えさむい国となる

図書室の私語きつちりと耳に入り

鳴門市 八木芳水

親離れして盛り場の夜に慣れ

疲れ切るナースは天使にもなれず

メロドラマ僕の前を見るような

和歌山県 中後清史

乱伐の山は報復忘れない

聞く耳を持たぬ頑固の早合点

肩書きを欲しがる割に動かない

姫路市 福島姫女

春芝の足裏柔きよウォーキング

この冬の病 吹き飛べ春疾風

減量の努力 風邪ひき跳ね返す

島根県 三代朝子

み仏に包まれ和む寺参り

春うらら老いの心も花が咲く

被災地の人にすまない温い部屋

尾崎市 田辺鹿太

形勢は不利 面舵に切りかえる

スランプの蛙が雨を待っている

人肌の爛と目刺しがあれば足る

豊中市 みきわきみ

修理より買うが安いと知りつつも

煙草二本続けて喫うも妻の留守

落葉舞う余生を如何に過さんか

仙台市 小寺九

北国もテレビの中は桜咲く

股引きの脱ぎ頃なるか初桜

退院の妻を迎える大掃除

高槻市 乙倉武史

胸張ってリュックが流行る被災以後

戦慄の噂予言に惑わされ

岡山県 土居ひでの

われや先浮かれ話のねぎ坊主

ゆつくりと傾く余生支え合う

島根県 岩田三和

稲文化 市場原理でふみつぶし

新任地わさびの香る迎え酒

貝塚市 池田寿美子

人生にまさかまさかがつきまとう

屈託がないからお金溜らない

熊本県 増田一乗

節句まで上げ下ろしする鯉のぼり

日もうらら土筆の坊主此処彼処

砂川市 武田正美

隠居部屋冷たい風が吹溜まる

うらぶれて重たい影をもち帰る

米子市 服部朗子

雛まつり歌えぬ老母がいとおしい

不自由を仏にすがり老母は生き

兵庫県 大谷幸次郎

孝行の不足を埋める長電話

智頭線で大阪弁と乗りあわせ

徳島県 安宅 美代子
ありがたい国に暮せてなぜ叛く
反省が今日の私を馬鹿にする

鳥取市 近藤 秋星
ふところと相談をして止めにする
散るようになって花見に行く人も

松江市 松浦 登志子
合格ださわやかな声ジャンプする
満開の上野の桜サクラサク

弘前市 相馬 銀波
三人の家族にもある多数決
正直に書けぬストレス抱いて寝る

倉吉市 山中 康子
インチキな子言に治安まどわされ
子は親を捨てても親は子を捨てぬ

熊本県 岩切 康子
明日無いと思うと今日の忙しさ
還暦か証拠のような座りダコ

柏市 上鈴木 春枝
ばれぬよう嘘は小出しにして行こう
幸せのひとつ洗濯機が回る

兵庫県 円増 純子
年金が素通りをする祝い事
眠りから覚めよう春の音がする

大阪市 乾 哲静
人事じゃないわい猿の花粉症
土地柄に惚れた余生の置き所

岡山市 中嶋 千恵子
ときどきはまぐれ心が謀叛する
深追いをしすぎて知った浅はかさ

高槻市 執行 稲子
いたわりの味が沁みてるほとけのざ
朋友が時々鬼になる矛盾

高槻市 芦田 静江
春の鬱 時効に沈むほとけさま
価値観を掴む余生の幻に

島根県 児玉 幸子
山一つくずして団地また出来る
孫達の笑顔いっぱい春休み

静岡県 大村 正雄
残業がなくて見直す給料日
涅槃図の歎きの相を見つめいし

鳥取県 山内 芳江
仲良しで空気のような老い二人
弱点を突かれてや々と泥を吐く

鳥取県 藤山 弘子
スタートから順調すぎて恐ろしい
晴れ晴れとした顔になる喫煙所

有田市 生馬 芙美子
従えば鬼の顔でも丸くなり
よいことがありそう美しい写経

和歌山市 和田 美寿子
置き薬いつもの人と顔変る

香川県 辻上 よしみ
馬鹿になり楽しく過す老いの日々
長続きやっぱり出来ぬダイエツト

島根県 今川 三津江
どうしてか車洗うと雨を呼ぶ

岡山県 国米 きくゑ
ばた餅がどっさり残る彼岸明け
いくばくも無い財布だがさがしてる

出雲市 川島 和歌子
守りから攻めに転じて妻強し
ひたすらに守り続けた壺乾く

米子市 堀江 美月
春一番磯の香せおいわかめ売り
小春日に花を背にして野良仕事

池田市 木村 一笛
浮草は川の吐息を知っている
結び目を結び直して黄昏る

や々と来た瓦れきの街に春の風
怪物が棲んでるように海が荒れ

静岡市 中西 雅
待ち遠し春の便りのクラス会
タンポポにまけじと背のび犬ふぐり

兵庫県 酒井 靖子
輪の中で笑いおくれて苦笑する
無口でも中味しつかり太らせる

寝屋川市 瀧本 八十八
ぬれぎぬと叫ぶオウムの旨い嘘
一緒ではストレスたまる避難先

堺市 谷平 照
年の差に甘える時とくやしい日
恋すると女ばかりの旅空し

宝塚市 黒台 伊佐武
渋ちんと言われたくない俺は吝嗇
嫁姑昨日と今日は入れ替り

福岡市 井崎 ミサ子
わが子なら許せる親の得手勝手
笑い顔ほんまかいなと言っている

守山市 外海 久和
親馬鹿でフィルムどれも子の寝顔
パパに似た我が子と過ごす昼下がり

鳥取市 岸本 孝子
嫌煙権聞こえるように咳をする
不便さを澄んだ空気がカバーする

唐津市 市丸晴子
冷凍の魚ケースで泪する
地球儀を回せば戦火立ち上る

唐津市 岩崎 實
春雨のいたわり木々の芽が伸びる
募集年齢過ぎて未だにそこを見る

大阪市 鈴木 トヨ子
湯治客賑い病何処へやら
狭き門何べんも落ち歪みだす

米子市 本吉 宗光
もう一度会いたい女に春の夢
がんばって神戸のウツをタイガース

鳥取県 高尾 京
定めたとあきらめきれぬ危険な世
日にいち度あおい芽を見て希望持つ

松江市 佐野木 みえ
一人芝居あしたの筋を考える
亡母の年越えて淋しさしのび寄る

和歌山市 山裾 かず子
染井吉野より大好きな山桜
手折られることないままに花嵐

大阪市 平井 露芳
花粉症寒くないけど出るくしゃみ
網棚に新聞置いて怖がられ

泉佐野市 大工 静子
オセロして勝ってはならぬ人を知り
娘にほしい毎朝出会う曲り角

泉南市 坂根 流水
あら不思議 悪い奴ほど知恵を出し
犯罪の温床防ぐふたがない

東大阪市 松山 隆
一病を持つ身の弱さ杜寺みくじ
雪柳 小雨しとどに人を恋い

犬山市 森 正
花の下散るを知らずに老いそぞろ
まだ弱音吐かぬつもりが愚痴になり

松江市 浦辺 静江
無口でも判断出来る妻となり
体裁を気にしすぎる束ね髪

交野市 山川 日出子
日当りの良い庵作り写経僧
白足袋をふまれ女将の目がこわい

千葉県 大川 晩翠
善男善女何を願うかグルマ市
シルバーガイド動物園の案内役

静岡市 増田 扶美
枇杷咲くも仰ぐ人まれ青い空
歳月をみんな忘れたクラス会

高槻市 小林 一 閑
また派閥替えた器用な議員さん
女々しいと言ふな涙は感激だ

寝屋川市 井上 すみれ

失言もばけているのかゆるされる
懲りもせずまたのせられる春の風

和歌山県 村中 悦男

あかね雲 明日に望みをつなぐ色

橿原市 西本 保夫

終点で起こされて見る棚の上

つき合いのないのに荷物預けられ

枚方市 森本 節子

買いたいと妻が言い出すジャンボくじ

お寺さん命日忘れ春うらら

鳥取市 西村 半畳

川風を肺一パイに吸い上げる

塾がなく雑草の子とよく遊ぶ

米子市 鹿島 蘭

星空に百万ドルの灯がだぶる

花嵐パンツルックが気にいらぬ

鈍痛が襲うまるで苛めっ子だ

堺市 吉本 菁風

自己破産 楽になったと悔いていず

金の掛かる夢をたくさん並べ立て

広島県 森川 抜智
留守番にならない犬を飼っている
わが墓地は静かな寺の片隅に

大阪市 池田 一男

ヒューマニズム孤独な蜂が死んでいる
万歩計 心が錆びて動かない

高槻市 江原 秀夫

円高サリンよりも気になる党の危機

伊丹市 小熊 江美

それぞれの自由があつてややこしい

有難い法話うとうと花の風
物騒な世の中になり自閉症

兵庫県 北川 とみ子

腹の虫なだめて枕裏返す

忘れたい忘れたくない橋渡る

大阪市 宮本 信幸

仮り宿の窓々々に幸やあれ

螢雪の功を飯屋の窓で積む

米子市 池尾 保子

担当の医師が若くてもの足りぬ

辞書に聞く前頭葉が動き出す

東京都 松本 冬蛇

孫やる気買つてやろうか釣道具

災害から自肅自肅の不況風

もう修理きかぬ齡でも医者通い
平凡に生きるにこんな苦勞する
八尾市 與田 明

叱られた事が話題になる法事
我慢切れ家中他人のようになる
岡山県 富坂 志重

わが船を妻が面舵いつも取り
學歷を荷物にしたい娘の見合い
兵庫縣 玉田 三重

三代の喜怒哀樂を知る机
仏壇を開き芝居を見てもらう
岡山県 福原 悦子

父母逝きて手ぶらで行けぬ里帰り
山茶花にあの娘を思ふ冬の朝
豐中市 松岡 久留美

老斑の手で咲かせてる四季の花
どう生きてみてもピンボウ従いてくる
和歌山市 木村 初子

ふところ亡夫の愛が生きている
夫逝つて寂しさじんと胸をさす
米子市 永井 三津子

望郷のこだまよかれオホーツク
なすの花 秋も実らぬ親不孝
砂川市 中里 つね一

安物が光つて目立つイヤリング
雪もとけそろそろ春が流れ出す
出雲市 西尾 和子

遠来の友へちよっぴり見栄を張る
病妻に合わせてテレビ切り替える
寢屋川市 北岡 波留吉

火の中も一緒という羽根布団
緊張をといた男の女下駄
寢屋川市 太田 とし子

死ぬ方がましだと言つて生きている
子供より着物比べる参観日
大阪府 中井 正秀

親と子と違ふレールがしいてある
啓蟄の虫に負けまい足や腰
島根県 槻谷 仲子

あなた任せでゆっくり回る水車
初心者に手ごわい奴が一人居る
河内長野市 妹背 尽呂久

思い出の曲になりそう見つめ合う
芸能のニュース仕入れに美容院
大和郡山市 神原 慧心

▼お願い 「川柳塔」 および「水煙抄」欄への投句は、必ず巻
末に添付した投句用紙に記入くださるようお願いいたします。

—水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

高瀬霜石

蟹の泡 嘘は上手に言えぬもの

原章峰

蟹の泡は、やっぱり嘘を言っているのですか。急には嘘をうまくつけないのが常人ですが、某宗教団体の毎日TVに出ている某氏はよくもまあ喋る。某氏の顔がだんだん蟹にみえてきたではないか。

為すべきは何かと声を出してみる

牧淵富喜子

今年の夏に公開される、大ヒットが予想される映画、『ダイハード3』。ブルース・ウィリス扮するなかなか死なない(ダイハードの意)刑事が、たった一人、超高層ビルを占拠したテロリスト集団と闘う『ダイハード』。彼は絶体絶命のピンチにいつも声を出して言う。『考えろ、考えろ』と……。長置きが長くなってしまったが、当り前のことをサラリと一句にした作者に脱帽。

人間がどう進化する全自動

中居善信

ウーム、これは面白い句だ。まわりを見ればどんどん進化した器具機械ばかり。僕の身近にあってこれはもう放せない、お金以上の価値があると思うものに、①シャワートイレ②電動歯ブラシ③ファックスがある。皆様は如何ですか。だからこの句は、『人間がどう退化する全自動』にした方が面白い？

瞞す気は無い風船が割れただけ

松本よしえ

悪意はこれっぽっちも無いのだけれど、思いがけない結果になってしまふ。善人と善人とでの方がえてしてトラブルが起こるのかもしれない。作者はそこを一步下がってポツリとつぶやいた。

単身赴任 妻がときどきテストする

古川かずのり

どんどん転勤する人はエラクなるのだという。僕は小商人なので時には友人知人の単身赴任にあこがれる。作者の実感句だとしたらこの作者はなかなか仕事もやりてで、そして奥さんに大変愛されている人なのだろう。

黙ったら黙って妻が注いでくれ

朝倉大柏

前句のかずのり氏の奥さんは現代的ならば

こっちの奥さまはいたって古風。小津安二郎の映画の一シーンのような佳句。

かつて、男らしい男と、女らしい女がそこにいた古き良き日本。この二人の妻の違いは作者の年齢差によるものでしょうか。大柏氏の句の男女は、今の日本にはもはや存在しない、天然記念物か人間国宝ものか……。

向こう岸へ この世の影が伸びてゆく

永田晩風

重いテーマを、作者のテクニクの上手さでスルッと読ませてしまふ。そうだよなあ。私たちの影法師は毎日背丈が伸びているのだなあとあらためて実感。

大好きな人へ移った風邪の熱

島ひかる

『許嫁だがいちがいに風邪を引き』という有名な古川柳を思い出しました。ほのぼのとしていいなあ。僕も移されてみたいなあ。

咲くのち散るいのちあり円舞曲

山根めぐみ

今ここに僕が座っている奇跡

的場十四郎

紙面の都合上、二句一緒になってしまったが、この二句には唸ってしまった。一ミリの差、一秒差の生と死が現実にある。結局は、『生かされている』ということなのだろう。

路郎賞

候補作品中問発表

川柳塔賞

平成七年一月号～四月号

吉岡美房

路郎賞候補作品

小島蘭幸

ストーブ列車で太宰と酒を飲む 斎藤 焔
愛し合っているステテコとアツパツパ 西出 楓楽
何度も何度も生まれ変わって来た春よ

河内天笑

ランドセルまだまだ軽い荷なんだぞ 千葉 風樹
魂を売って総理の座を守る 田中 正坊
捨てられた男は捨てた振りをする 相馬一花
洗面器に浮くものはみな愛しかり 桑原道夫
じいちゃんの荒城の月あれでよし 松本忠三
喝采が終わりほんとが見えてくる

均等法 涙は武器にもつならぬ 吉田あずき
裏もまたあてやかもみじ散るときは 伊藤 寿美

わたしからわたしが消えたデスマスク 森川まさお
一戸 ツネ
ここはこの世かしみじみ水が喉を越す 田中 薫

別姓も良いなと娘には言うておく 氏林洋敏
仏の灯守りご飯がおいしいよ 越智 一水
道楽の果ての渋茶をのんでいる 江原とみお
罹災再び割れない亡母の碧い壺 亀岡 哲子
戻らない男を待っている白髪 舟渡 杏花

門谷たず子
先々のことはよろしい今のめし 谷口 次男
均等法 涙は武器にもつならぬ 伊藤 寿美
金のある強みと金のない強味 山本希久子
深く降りねばならぬ山があり 池内かおり
バス動くガイド セリフを思い出す 仁部 四郎

ひとりの死ひとつのドラマはじまりぬ 高瀬 霜石
快くなって癌だったのを自慢する 垂井千寿子
相談もなく老人に組み込まれ 梅田 宣司
子の嫁にお早うさんと先に言う 越智 一水

おしやれするくらいがよろしおじいちゃん 堀 良江
とうさんの好きなお昼のサイレンだ 堀江 芳子
道楽の果ての渋茶をのんでいる 江原とみお
ふとんごと子にかぶさりにて地に祈る 木村喜代子
受話器から「生きててくれて有難う」 秋元 てる

この世の地獄五体で受けた震度七 山口美穂
志の高さを山と語り合う 新 正子
病んでみて透明色が見えて来る 神夏磯典子
にこりの溶ける温みよ亡母の膝 伊藤 寿美

一点を見つめて神を売りに来る 仁部 四郎
蕾ですはるか彼方を見えています 高須賀金太
バラ買ってケーキを買ってまだ寒い 木本 朱夏
みんな貧しくて空気も水も澄んでいた 海老池 洋

目を閉じる逢いたい人に逢うために 矢内寿恵子
露天風呂童話の星になって来る 林 はつ絵
どのように生きてても影は淋しがる 松本 文子
雲白く無償の愛に似て白く 岩本 笑子
錆びている釘が一番効いている 木村あきら

板尾 岳人

洗面器に浮くものはみな愛しかり 桑原道子
母業を捨てたいほどに母である 宮尾みのり
落ち込んだ胸を洗いに画廊まで 林 瑞枝
忘却の彼方にかすむ村まつり 越村 枯梢
にこりの溶ける温みよ亡母の膝 伊藤寿美
黄昏の別れあと振り返りふり返り

いさぎよき散りゆく花も葉も互角

本間満津子

何を信じ何を疑う月の暈

渡部さと美
山本希久子

子に斬られ妻に斬られて無位無冠 吉川寿美
上役のジョーク屋台で裁かれる 仁部 四郎
雪つもる五臓の錆が浮いてくる 江原とみお
陽は昇る橋は架かっている筈だ 亀岡 哲子
片しぐれ傘も男もかえらない 木本 朱夏
ありがとう子宮に敬意表します 肥後和香子
老いて候 罪百貫が背に重い 横田 英詩

小池 しげお

蜘蛛の糸風に任せている自信 門谷たず子
五本の指がはいり手袋安堵する 矢野 佳雲
評判は待合室で聴くつもり 小倉 アサ
水の音火の音を疑わぬ 江口 明光
有頂天すっぱい味が分らない 神夏磯典子
金のある強みと金のない強味 山本希久子
炎が燃えたり涙が出たりする手帳 松本文子
本当の川だめだが泳いでる 新 正子

孫二十坂本冬美型美人

これ酒よ俺の無念が解るかい

桜井 千秀
両川 洋々

春の酒で一途な愛を染めようか

北山好笑

やがて父の鋤型通りに出来上がる

牛尾緑良

大根を切る庖丁を研ぎに出す

大橋 政良

寒椿急に決心したらしい

森田 文

真実は言えぬが嘘はなお言えぬ

上田 俊路

川柳塔賞候補作品

榎本 吐来

一期一会 旅に赤子の手と触れて 藤井高子
定年後の酒は演技をしていない 中川 楓
常夜灯 花のため息聞いている 牧渕富喜子
絡みつく情け古里捨て切れず 山本たけし
町で会う子連れナースは母の顔 和田 和風
軌道修正かわいいい母になりたくて
山根めぐみ
よそさんの食卓のぞくレジの列 徳山みつこ
きつちりと食べて一人の冬日かな 芦田絢子
難聴にヒソヒソ声がよく響く 百田 幸
老いらくの恋も知ってるテレカード
三浦 強一
極楽も地獄も遠慮して傘寿 瀧本八十八
美しく負けて明日のバネとする 三浦千津子
久々に捻子巻きもどす薄化粧 浦辺 静江
幼稚園 はや良妻が芽ぶいてる 水谷 箏子
嫁ぐ娘に諭す男の放し飼ひ 尾宮 弘治

宮口 笛生

秋深し無口になってゆく二人 武島ちよえ
鬼笑うこともたまには言うてみる

遠く居るいい関係で居たいから 村上ミツ子
真心を金に換算して寒し 藤田 泰子
寺総代如来のように席につく 宮本かりん
自転車をつくと見ている三輪車 中野とよ子
貧乏をすると意見が揃わない 前 たもつ
神様に授かる歳をもて余す 古川かずのり
生命までかけて女は満ちたりる 井上 源一
悲しみの数だけ女強くなる 山根めぐみ
成し遂げるまでの雑音聞き流す 渡辺伊津志
老眼になって情けの字を覚え 杉本 孝男
後で酒出そうな方に味方する 村上久美子
裏金が動いたらしい止んだ風 大西 文次
哀しみでしばらく神を見失う 酒井 一壺
三浦千津子

川島 楓云児

伴走の妻が時どき先を行く 村上ミツ子
支線なまだ走れそう父の貨車 一本 勇太
過去形の恋人がいる通過駅 田辺 鹿太
エスカレーター数えて見たがきりがいい 木村 親路
しまったと思う約束してしまっ 大西 文次
どんな時でも踏み台になる母の椅子 堀江 美月
等身大の影が行く手を指図する 長浜 澄子

どんぐりの歩幅でいつも走っている

大石あすなろ
倅せな事によく寝てよく笑う
足立由美子
元を取るまで粘っていよう生きてよ

高田美代子

窓際は鬼が解脫をするところ

和田 和風

吹っ切ろう涙は春に似合わない

西村りつえ

くちびるが渴いて男軽くなる

相馬 銀波

達者です進みがちです腹時計

村上 剛治

地震から夫婦の布団近づける

中川 楓

福本英子

ふところが浅くて本音よくころぶ

清水悠貴女

主治医消えればかと秋の宙吊りに

石川 勝

靴下の穴に気付いたのは他人

古久保和子

なるほどと思うボタンのかけ違い

森脇和子

ありがと ありがと母の樹が枯れる

土居ひでの

冷凍の父だと仔牛には言うな

藤田 芳郎

速効の薬ゆっくり副作用

高野 宵草

政界も我が家もボスは裏に居る

村上久美子

痛いところ突くから返り討ちに合い

阿部喜久江

予定通りいけば今年もいい年だ

足立由美子

リモコンの二つ三つは手なすける

木下道子

美人薄命 美人の分も生きてやる

三浦さぬ

風邪引くな寝込むな なさけ厚く着る

藤井 高子

あたたかいままでとどけよにぎりめし

倉垣 恵美

どう見ても反射の悪い鏡です

高畠 五月

小林由多香

伴走の妻が時どき先を行く

村上ミツ子

千年の古都に夫婦の墓を買う

小西 小雪

秋灯下母に短い手紙書く

平川 幸枝

幸せが切れないように林檎むく

水谷 幸子

疑えば信する人が居なくなる

麻野 幽玄

これ以上燃えろと恋が灰になる

今若 章子

寒椿ころり献体考える

石川 勝

何もかも後手回れ右でもしよう

渡辺 南奉

留守番と犬の世話ならまだ出来る

澤田和重

宿ゆかたみんなおんなじ年に見え

山本すみ

新人が空気を少し入れ替える

武田 照女

質よりも量に安心してしまふ

藤田 芳郎

電話ではみんな元気と言っておく

前たもつ

地震から夫婦の布団近づける

中川 楓

悪友が一人もいないのもさびし

森 茜

各賞選考について

路郎賞はじめ各賞の選考・授賞について不明確な点がありましたので、5月2日の常任理事会において各賞選考規定を決めました。このうち、二賞選考に関係のある部分を紹介します。

各地柳壇賞と一路賞

各地柳壇賞の選考委員は、春城武庫坊・宮園射月芳・奥田みつ子の三氏、一路賞の選考委員は、田中正坊・河内月子の両氏が委嘱されました。

各地柳壇賞は、佳句地十選に選ばれた句、一路賞は、各題天位句の中から選考委員が協議の上、各十句を主幹に提出し、授賞句を決定します。

なお、渺湖賞・茴香の花賞は、選者が決定し、主幹が承認することとなっています。

○自選集の作者は、各賞の対象としない。
○各賞とも、同一人に同一賞を授賞しない。
○路郎賞・川柳塔賞の選考委員および茴香の花欄選者は、路郎賞の対象としない。
したがって中間発表においても候補作品としない。
○二賞選考委員の任期は、原則として四年とする。
この主旨からかつて路郎賞・川柳塔賞の本賞を受けた者も、該当賞の対象から除外されますが、全選考委員に規定の内容が周知していなかったため、中間発表で候補作品となったものがあることをお詫言します。

沙湖抄

小出智子選

なにかしないといけないようないい日和

大きなまる画いて心を広くする

花冷えの廊 神将の黒い鎧

春の宵 海の深さを抱いている

生き方を変えたのはたった三日

快眠快便何やらはなしますすぎる

歯の治療やっぱり恥ずかしい時間

風の日には風にもたれて生きんかな

不しあわせな人と比べて熟睡する

お見せする種も仕掛けもない暮し

亡母恋し胸ホカホカと亡母恋し

抵抗したって蟬螂の斧手術台

二枚舌持つてるらしいのも仲間

そして路地からガキ大将が消えた

雑壇に並ぶと背のびしたくなる

勝ち目ない敵が無邪気に眠ってる

欠けてゆく月ゆつくりと日記閉す

友達の名所となかくお付き合い

わたくしの影を匿う櫓の下

桜満開 母よ長生きしてほしい

京都市 都倉 求芽

宝塚市 永田 暁風

大阪府 井上すみれ

大阪市 西出 楓楽

和歌山市 木本 朱夏

岡山県 矢内寿恵子

鳥取県 新家 完司

大阪市 日阪 秋子

青森市 工藤 甲吉

弘前市 佐治千加子

寝屋川市 平松かすみ

高槻市 守先 伸子

鳥取県 江原とみお

八尾市 村上 剛治

富田林市 片岡智恵子

大阪市 稲本 凡子

米子市 林 荒介

鳥取県 鈴木 公弘

何につけ女は損と妻が言う

春日をたのしみながら生きのびる

花に見送られての仮住居

点と点 線と線では肩が凝り

図書館の隅にみつけた桃源郷

いやなもの携帯電話 留守電話

逃げられる距離で戯画など描き溜める

たんぱも魚の子も生まれては 風

母を呼ぶ最後と思う通り抜け

昆布飴くれた老婆と道連れに

扱いは女と同じと 桜守り

ドレミファがいっぱいに浮く春の空

退職の顔貸農園を覗くなり

アリランを軽く歌った責めがある

僅かな差笑話にするきつと

母のふところ観音さまがいらつしやる

嘘少しゆるるされそうなくだり坂

現在過去未来が止まる花の下

平凡に暮らす小さな屋根の下

懐のひとつのおもい信じこむ

チューリップ咲いてクレヨン忙しい

もう少し黙っていたいい話

原色のかの子の苦勞あつたはず

葱坊主右へならえの頃の空

ゴム風船逃げきること出来なくて

ホウ 美人ではないか御先祖セピア色

和歌山市 山田 高夫

吹田市 栗谷 春子

西宮市 西口いわゑ

藤井寺市 高田美代子

弘前市 今 生恵子

豊中市 田中 正坊

富田林市 池 森子

尼崎市 田中 薫

和歌山市 吉村さち子

尼崎市 春城 年代

大阪市 大河未佐子

大阪府 榎山 隆

枚方市 前 たもつ

和歌山市 榎原 公子

和歌山市 田中 輝子

倉吉市 松本よしえ

寝屋川市 籠島 恵子

八尾市 宮西 弥生

大阪市 本間満津子

鳥取市 小谷美つ千

五所川原市 斉藤 島

羽曳野市 田中 透太

弘前市 肥後和香子

堺市 桜沢あかり

島根県 松本 文子

岡山市 川端 柳子

亡姑の世話思い残しはなかったか
 小春日が覗いてくれる僕の部屋
 口紅をうすく桜に逢いにゆく
 「山椒を煮てるな」玄関からの声
 包丁の錆はコンビニ出来てから
 鏡の奥に年齢を数える鬼が棲む
 ブランドを着るマネキンは器量よし
 いつからだろう下向いて歩く癖
 定退へ妻の乱などありはせぬ
 頼るより頼られる身を良しとする
 夢のつづきをバッグに入れて生きのびる
 決心がついてポストまで走る
 したたかに生きねばならぬ座りだこ
 道化服脱ぐと私の声になる
 子離れのできない母に水温む
 戴いた余生だ気持よく暮す
 証人喚問私の胸を逆撫でに
 静けさを褒めて過疎から出ていった
 どちらともなく挨拶してる土手の道
 捨てるもの捨てて枯野は春を待つ
 嫁にいったマリオネットは糸を斬り
 飯蛸の変哲もなし独り膳
 こま犬のあたりで邪心消えている
 公園の鳩には何故かよくもてる
 蛇口から出てくるまでの長い旅
 ふとところで正す小さな謀

西宮市	奥田みつ子	倉吉市	奥谷 弘朗	八尾市	高橋 夕花	守口市	結城 君子	綾部市	藤田 芳郎	羽曳野市	芦田 絢子	横浜市	菱田 満秋	柏市	上鈴木春枝	吹田市	山本希久子	岸和田市	三輪 通彦	米子市	澤田 千春	和歌山市	福本 英子	富田林市	藤田 泰子	砂川市	大橋 政良	鳥取県	土橋 螢	鳥取県	西川 和子	阪南市	深日白光子	鳥取県	小西 雄々	枚方市	森本 節子	米子市	石垣 花子	和歌山市	福井 桂香	大阪市	津守 柳伸	寝屋川市	江口 度	八尾市	片上 英一	鳥取県	岩崎みさ江	鳥取県	田村きみ子
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	------	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

輪の中で手の鳴る音を聞いている
 子の入れるお茶がだんだんうまくなる
 風の歌聴こう長生き出来そうだ
 人生の午後は静かにお茶を飲む
 どしゃぶりの話は知らぬ日記帳
 不器用に生きているけど白は白
 時々列から抜けてみたい蟻
 いやな事みんな忘れてジャンケンポン
 意地っ張り同士で鞘におさまらぬ
 青春を忘れないよう口ずさむ
 雛おさめ女のいくさはじまりぬ
 大安吉日わが家の花も満開に
 てるてる坊主遠足の子へうなだれる
 ヒヤシンス手提げ袋からあふれ
 あなたにはこんな処方で如何でしょう
 やけくそになると風船ふくらます
 的外すところ配りに泣けました
 巢立たせてだんだん軽くなる二人
 旨い粥炊いてえにしを大切に
 妻の前でときどき死んだ振りをする
 熊の皮敷きつめこわい応接間
 異性だと感じはじめて月おぼろ
 捨て猫が過去をひきずる首の鈴
 村長の絵馬は人口増加策
 しっかりと掴んだ壺の手が出ない
 ふとところに温めた数珠を離せない

出雲市	園山多賀子	鳥取市	西原 艶子	今治市	越智 一水	芦屋市	黒田 能子	豊中市	辻川 慶子	西宮市	山本 義子	札幌市	三浦 強一	羽曳野市	吉川 寿美	倉吉市	野口 節子	出雲市	竹治ちかし	米子市	白根 ふみ	鳥取県	土橋はるお	羽曳野市	徳山みつこ	堺市	近藤 豊子	和歌山市	宮口 克子	大阪市	神夏磯典子	今治市	塩路よしみ	米子市	新 正子	名古屋	藤井 高子	海南市	三宅 保州	大阪市	今西 静子	今治市	矢野 佳雲	鹿児島県	大山舞鳥影	唐津市	仁部 四郎	茨木市	堀 良江	米子市	堀江 美月
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------

甘樫の丘で万葉びとなる
胸張って娘らに言っとく事が無い
クエスチョンマークの顔でペンギン立っている
静けさをもって行かれたじげおこし
いちにちをまず晩酌で締め括る
雪解け水タムを満たしている安堵
桜吹雪のテレビニュースに豆御飯
もう一つ味の足らない一行詩
五十年思い出したくない事も
合格点もらえぬ妻で逝くだろう
精一ぱい咲いて木霊を待っている
片思いでしたと祝辞笑わせる
人待つ飯ふくらと炊けてきた
耳遠くなりぬい事のみ聞こう
踏ん切りがついてネアカを取り戻す
古里から未来へ続く河がある
許さねば矢印狂う子がひとり
もう一杯姉の目と合い止めにする
大木に耳をつけると命の音
人間に忘れると言う神の慈悲
深い闇ぐれば勤が戻るはず
喜寿ひとつ過ぎてかわるものがない
長い間ご苦労でした夫の靴
ゲートボール幾年農婦の手も柔らかし
捨てられているのに花は笑っている
惜しまれた路線に桜真つ盛り

和歌山市	堀畑 靖子	和歌山市	堀畑 靖子
堺市	宮本かりん	和歌山市	古久保和子
鳥取県	上田 俊路	和歌山市	相馬 銀波
弘前市	宮崎シマ子	和歌山市	春城武庫坊
八尾市	久谷まこと	和歌山市	安藤舞美子
尼崎市	茂理 高代	和歌山市	鹿島 蘭
出雲市	井齋 一齋	和歌山市	最上 和枝
豊中市	宵草	和歌山市	高野 宵草
米子市	みね	和歌山市	田中 亜弥
米子市	睦子	和歌山市	田中 睦子
米子市	松尾柳右子	和歌山市	内田 倫子
和歌山市	柳子	和歌山市	唐津市
泉佐野市	浜本 ちよ	和歌山市	杉山 精子
唐津市	古野 ひで	和歌山市	岸和田市
和歌山市	川崎ひかり	和歌山市	香川県
和歌山市	横地 東川	和歌山市	福岡県
和歌山市	石谷美恵子	和歌山市	鳥取県
和歌山市	細川 稚代	和歌山市	鳥取県

踏まれてもついてくるのは影法師
搜索を受ける達磨の目は一つ
かと言って薄謝で済まぬ墨の色
一からの生活へそくりそつと出す
断水で水がこんなに重いと
神さまの産みおとされた島に居る
イカナゴに須磨の香りを乗せて来た
輝いてそれから嫁の手が荒れる
転んだら起き上がれない古ダルマ
在りし日を偲ぶ遺影の深い皺
心から笑う茶の間の自由席
邪推かも知れぬ凶星かも知れぬ
樹の陰で声援が飛ぶ草野球
嬉しさに悲しみにつけ髪を梳く
深酒が男の本性覗かせる
裸木になるまでしたたかに萌える
花日和電話ありそで耳掃除

求芽さんの句。むつかしいことは何も言っていないのに、味わいが深い。「いい日和」の率直さが好ましい。「大きなまる」を画ける作者の思いがじつくりと心に届く。晩風さんの句。作者の今在る場所がはつきりと見える。その場で何を見ようとしているのか、その深さは計り知れないものがある。すみれさんの句。環境の変化はあったとしても、生き方など簡単に変えられるものではない。「たつた三」と言い切ったところが実に効果的な。楓葉さんの句。体調がよいということは何につけ弾みのつくものである。密かに感じる喜びが小気味よい。朱夏さんの句。なんともやりきれない歯科の椅子。そう言われてみるとほんとにそうだ。ゆつくりとおかしくもある。

香川県	木村あきら	和歌山市	山口三千子
今治市	月原 宵明	和歌山市	生馬美英子
有田市	藤井 千年	和歌山市	藤井 千年
芦屋市	村上ミツ子	和歌山市	山門 タミ
八尾市	太田とし子	和歌山市	池田 一男
唐津市	浅子まつゑ	和歌山市	藤井 春子
豊屋川市	一本 勇太	和歌山市	藤井 正雄
大阪府	野村 清美	和歌山市	宇波屋太郎
大阪府	隆風	和歌山市	三浦 つね

尚香のむ

西出楓楽選

出直しへ太鼓の皮も張り替えて
相談するには河が広すぎる

半徑を少し短くして生きる

足して二にならないものを恨んでも

他人の花あかい赤いと言いつけ

しんどいと言えば空気が洩れそうで

春の水 子らをいっきに大人にす

電話では叱られそうで書く便り

生き残ることより今日の花の下

つれづれに河を渡ってみたくなる

佇んで今いる位置を確かめる

許す許さぬいいわたしの一人言

春のふところあれこれ仁義攻めにあう

断われぬ立場の人に頼めない

めんどくさい事はラップし後まわし

いい耳でしたたかな嘘聞いてます

世紀末カナリアはもう歌わない

気まぐれな春は人生模様だな

泣かぬ男演じ淋しい仁王様

米子市 野坂 なみ

米子市 鹿島 蘭

鳥取県 岩崎みさ江

寝屋川市 森 茜

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 古久保和子

弘前市 肥後和香子

富田林市 片岡智恵子

八尾市 宮西 弥生

米子市 新 正子

富田林市 藤田 泰子

鳥根県 松本 文子

鳥取県 石谷美恵子

大阪市 本間満津子

大阪市 渡部さと美

弘前市 佐治千加子

和歌山市 木本 朱夏

大阪市 町田 達子

和歌山市 堀畑 靖子

御無沙汰の訳は伏せ字であらかしこ
自己顕示 敵役でも買って出る

失ったわらを河口で待っている

思い入れすぎて紫憎くなり

追い風の今走らねば走らねば

喪の帯を解けば春愁身にせまる

一人ばつち自分だけでも好きになろ

夫婦げんか鬼がこっそり舌を出す

褒められて喜ぶ耳が溶けていく

負けた数だけしつかり握っていた小石

誤字脱字 境界線を越えてくる

人生も後半スバイスキかせよう

騙された振りしていようベレー帽

こんな時花のやさしさまで怖い

火の章は中途半端にしたいくない

わたくしも私も我慢出来ぬこと

自負のかげら探しあぐねて本漁る

縫れ糸はぐして見れば影法師

やっと越えたハードル明日はまた高く

体力にくらしの幅を教えられ

手鏡とおしゃべり紅を引いている

赤ちゃんの空を掴んでいる無心

花明かり幸せちよつと見えそう

生きている中に答えは出ないだろう

仮の世の窓から見て瓦礫の山

羽曳野市 吉川 寿美

大阪市 板東 倫子

米子市 光井 玲子

大阪市 大河未佐子

貝塚市 池田寿美子

吹田市 茂見よ志子

西宮市 秋元 てる

堺市 黒田 真砂

和歌山市 吉村さち子

名古屋 藤井 高子

和歌山市 田中 輝子

芦屋市 黒田 能子

和歌山市 山根めぐみ

徳島県 安宅美代子

米子市 金山 夕子

和歌山市 宮口 克子

西宮市 奥田みつ子

米子市 茂理 高代

米子市 木村 春枝

寝屋川市 籠島 恵子

和歌山市 北山 好笑

米子市 林 瑞枝

大阪市 日阪 秋子

西宮市 牧渕富喜子

西宮市 西口いわゑ

咲く花も散る花も抱く愛のかけら
振り向いて香りを探す沈丁花
天命は抗いがたし寒の水

閑空着 閑西弁でほっとする

家計簿と手を取り合つて巢立たせた

細い雨まっかなバラを買いに行く

ストレスを溜める地球もわたくしも

本心を打ち明けようか花曇り

最初から悪い子はなし宮参り

ぐちこばし胸の荷物が少し減る

春息吹くなだれという字朝刊に

好きだからあつけらかと妬いている

人生の筋書きにない忘れもの

捨てられた花の痛みをわかち合う

我が恥をうすめるための穴を掘る

春の風 揺れる心を知っている

寝そびれてこれから先の絵図をかく

時々は心の鬼と握手する

一人居て一人の湯気の立つ厨

風みどり多少の傷は眼をつぶる

軽口が反転火傷してしまふ

ぬるま湯が好きで安全圏にいる

旅枕 五臓六腑の錆おとす

まっすぐに立っているには意地がある

残月淡く見事に期待外される

鳥取県 田村きみ子

鳥取県 土橋 睦子

寝屋川市 岸野あやめ

岸和田市 原 さよ子

米子市 石垣 花子

寝屋川市 井上すみれ

岡山県 矢内寿恵子

和歌山市 田中 みね

藤井寺市 高田美代子

泉佐野市 内田 倫子

吹田市 栗谷 春子

和歌山市 岩本美智子

倉敷市 小野 克枝

倉吉市 淡路ゆり子

岡山県 富坂 志重

米子市 永井三津子

吹田市 井上 照子

香川県 川崎ひかり

米子市 中井 ゆき

和歌山県 小倉 アサ

兵庫県 酒井 靖子

大阪市 神夏磯典子

倉吉市 野中 御前

豊中市 辻川 慶子

出雲市 石倉英佐子

生き方の違い私は白が好き

留守電へ笑い話を入れておく

死んだふり時々使う処世術

続編を生きた女の薄化粧

恰好の棲処よ鳥の声もする

花疲れなんて今どきぜいたくな

減量の万歩の果ては顔に皺

家風に染めるとんでもない誤算です

古ぼけたハガキにあった父の過去

あたたかい嫁が長寿もお気に入り

ポケットに彼の温もり隠しとく

サリン事件 今日苦いコーヒー飲む

水色のワルツで踊る老いの会

叱らない親をジロジロ見てしまふ

寺へ来てにわか善女になります

大阪府 鍛原 千里

和歌山市 玉置 当代

今治市 野村 京子

鳥取市 植田 一京

和歌山市 細川 稚代

豊中市 安藤寿美子

姫路市 福島 姫女

姫路市 丁坪サワ子

和歌山市 桜井 千秀

米子市 服部 朗子

鳥取市 前田 一枝

枚方市 森本 節子

和歌山市 和田美寿子

茨木市 堀 良江

寝屋川市 宮崎 菜月

一句目―出直しへの作者の意気込みが、太鼓の皮にうまく

乗せてある。この出直しがうまくゆくであろうことは、疑う余

地もない。二句目―身上の重大事は、第三者に軽々しく相談

できるものでない。相談を受けた相手も、困らせる場合が往々

にして生じる。それをわきまえた作者の、思いやり深い人柄が

伝わってくる。三句目―半徑を短くしなければならぬ理由は

定かでない。しかし、スパッとした詠み口から、短くしても充

実した人生となるであろうことが見える。四句目―当節世

の中は、曖昧模糊、魑魅魍魎ばかりと言っても過言でないだろ

う。その風潮が端的に、やさしい言葉で表わされている。

戦後五十年と私

同人特集

川柳を生き甲斐として

永田 俊子

「国敗れて山河あり」。昭和二十一年八月、引揚げ船から涙の目を見た故国日本の緑の山々に接した時の感激を今も忘れない。そして何もかも捨ててきたことを、少しも惜しくないといい、帰国への願いが実現した喜びをかみしめた。

しかし、それから夢破れての予期しない暮しが始まった。どん底に落ちて知る人の心。幸い主人の兄の家が田舎であったので、粗食ながらも暮してゆくことが出来たが、戦後での異郷のくらしや引揚げ前後の疲労のため、主人は胸を病み、休職して入院・闘病三年を余儀なくされたのが私には幸いして、看護に当りつつかねて興味を抱いていた新聞の川柳欄に投句したところ、思いがけなく活字にな

って掲載された。これが病みつきとなって投句を続け、遂に田中辰二先生（麻生路郎先生の御親友）が主宰しておられた熊本川柳研究会に入れて頂き、それから月例会に出るのが何よりの楽しみになった。

それから十年ほどして主人が世を去り、虚脱状態になったが、川柳のおかげで生き甲斐を見出し、川柳に親しむことが出来た。この時ほど、川柳のありがたさを感じたことはなく、夫なし子なしの私には何よりの友で、それ以後、現在に至るまで続けることが出来諸先生方のすばらしい句に接する喜びをありがたく思っている。何事もものは考えようで主人を亡くしたことは、神さまが私に与え給うた自由な時間と思い、自分の時間を活用す

るため、いろいろな趣味を始めて今に至ったが、何もかも底辺の段階で楽しんでる。

見渡せば戦後五十年の間に、世界も日本もすっかり変り、新聞だけはよく読んで、時代に取り残されないように心がけているが、近頃のパソコンや何かはすっかり駄目で、骨董品の部類かとあきらめている。しかし、失われゆく日本人の美德の数々を思うと情けなく、毎日の三面記事には目を覆いたくなり、貧しくともぬくもりがあった昔の連帯感あるくらしをなつかしく思っている。また政治の汚職、教育の退廃など、いくら嘆いても結局は「みみずのたわごと」で、川柳で批判するしかないのだろう。

戦後五十年はまたたく間に過ぎて私も傘寿をこえ、何ら社会的貢献もせず過ごしたことに慚愧たる思いがあるが今さら仕方のないこと。目を大きく見開いて二十一世紀への日本の進路を見守り世界の激変、日本の精神的物質的変動に驚き嘆きつつ、世の隅っこで好きな川柳を作句出来る喜びをかみしめている。

川柳ファミリー

森川まさお

戦後五十年、長いようで短く、短いようで長い。記憶をたどって書いてみるが、記録が無いのでアヤフヤである。

ぼくが川柳にかかったのは、戦争前の二年余りである。昭和十八年の夏には応召し、それ以来、ブツンと縁が切れた。ブツンは数十年続き、やがて、朝日新聞の「なにわ柳壇」を知って応募し、それを機に川柳の知人もでき、『川柳塔』が『川柳雑誌』の生れ変わりであることも知った。

ぼくが川柳をやりはじめたのは、その『川柳雑誌』であった。『川柳雑誌』の句会である。句会は南区のさるお寺が会場だった。

従兄の谷川緑風というのが誘ってくれた。兄の「抜智」と一緒に行った。兄はその頃、『箱作』と名乗り、ぼくは「森川九一」の名前を付けていた。三人とも初心者だった。それが錚々たるベテランの中へ入り込むのは、今にして思えば汗顔の至りである。こんな闯入者にも、受付におられた叡乃夫人は、優し

く遇して下さった。路郎先生が「武玉川」の講話をされていた。その時はじめて、「武玉川」を知った。後に「武玉川」を読み、「柳多留」二十四篇も通読し、江戸の風俗にも目を向けるようになった。居心地が良く、それから毎月、句会に出席した。ぼくの句も度々、抜けた。天位に採られたこともある。

川柳に感謝しきり

瀬尾六郎太

そつこうしているうちに召集され、敗戦と続き、川柳を中断せねばならなくなった。「なにわ柳壇」が、ぼくの川柳復活の糸口になったことは前にも書いた。

『川柳塔』「なにわ柳壇」には、「森川抜智」「栗谷春子」「森本節子」「結城君子」のきょうだいも参加している。

ぼくは性来、移り気で怠け癖があり、一つのことをコツコツと手がけて長く続くことがないが、どうやら川柳だけは違ふようだった。

これは川柳の魅力なのか、それとも、良き仲間が傍にいるからなのか、考えているところである。

今年古稀、気がつけば軍国調の学生時代。

三八式銃持つての軍事教練、蘆溝橋、ノモンハン、徴兵検査(第一乙種合格)眼鏡、たまたま工学部就学中のため徴兵延期となり、その代り佐世保海軍工廠に学徒動員(各種艦艇の火砲射撃指揮装置の修理担当)。これも縁、戦後再軍備の第一号駆逐艦(旗艦ゆきかぜ)

設計に従事、続いて潜水艦設計、自動倉庫設計等、経済成長に乗って休みもとれず、ストレス加重、胃潰瘍に長年悩んだ。

そんな折、川柳塔社同人である茨木の井上森生さんと出会い、妙案あり、川柳やりなさいの一言。ストレス解消にもってこいと奨められ、昭和五十八・五十九年頃あった『電波

新聞「川柳欄に投句（選者＝橋高薫風先生）、一つ二つと掲載されたのがきっかけとなり、今日まで継続作句、お陰様で胃潰瘍の方も嘘のように鎮静している。感謝しきり。以下三句。

パソコン川柳

藤井 正雄

五十年 人間宣言とこしえに
五十年 学徒出陣友想う
五十年 宇宙旅行の夢もくれ

昭和十六年、学生生活を終えて入った会社（田辺製薬）の福利厚生にたまたま「川柳部」があった。当初、「俳句部」に入ったが、重複してもよいからという強引な勧誘に会い、初めて川柳というものを知った。俳句と違って季語が不要であり、口語体で人情を詠む点に気が入り、主にユーモア句を中心に作句していたように思う。

軍隊生活は外地（中国）勤務で、内地への便りに俳句を添え書きしたのが、俳句好きの指揮班の班長の目にとまり、その班長が私に好意を持ち、中隊兵器係に抜擢してくれた。この俳句の合間に時々、「川柳」も入れたが、「洒落は駄目だ」と叱られたことを記憶している。

終戦・復員後は、しばらく工場勤務だったが、「川柳同好会」を作り、ガリ版刷りの「句誌」も出して文学青年ぶっていた。それでもなかなか人が集まらず、創刊号・復刊号の連続で十号と続かなかったと記憶している。

昭和三十年ごろ、本社勤務に戻り、先輩から川柳を勧められたが、仕事が多忙になったことと、十年間の東京勤務もあり、俳句ともどもすっかりご無沙汰になってしまった。

昭和六十年暮れに定年で田辺製薬を退職、暇になったつれづれに、NHK生涯学習（通信講座）の川柳部門に加入したが、三、四年で内容に飽き、今度は梅田にある「NHK文化センター」に入り、本格的な作句の勉強を始め、それが現在も続いている。

今一つ、私をこうまで「川柳」漬けしたものに「パソコン」がある。定年の三年前だったか、当時の社内のパソコンブームに便乗してパソコン機器を安価に買い求めた。最初のころはパソコンゲームで遊んでいたが、住所録・小遣い帳・日記と進むうちに、「川柳」の十七音字を一つのデータとして、何とかソフトのデータベース（集計表）に乗せられぬものかと試行錯誤の上、ついに成功（？）し、現在、私の川柳はパソコンオンリーで遊んでいる。なお、住所録・日記はワープロ専用機器に移行し、小遣い帳は銭足りずでやめてしまった。

さて、「パソコン川柳」の特徴は分類にあり、投句先別・入選句抽出・五十音順等々、自由自在だ。また、投句先をコード化（例えば川柳教室01・朝日なご柳壇02・川柳塔03）して、各年度別入選句一覧などを作っては、一人悦に入っている。

川柳をやっているよかったと思うことは、良き師に恵まれ、柳友が増え、作句に頭を使うことでボケ防止にもつながっている。駄作ばかりだが、これからも「川柳」で余生を大いに楽しみたいと願っている昨日今日である。

川柳と付合った四十一年

安平次 弘道

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を聞いてから十日目、学徒動員の解除、即、学校終了となり、十六歳で社会にはうり出された。

当時は職もなく、食糧もなかったので、親戚の農家の手伝いを一年ばかりやった。

やっと職も見つかり、昨年十一月までサラリーマン生活を送り、十二月から年金生活の日々となった。従って、私の戦後五十年は、平凡なサラリーマンの五十年であった。

この中で、昭和二十九年は私にとって忘れることの出来ない年になったのである。

それは川柳との出会いであった。一月中旬勤務先の大阪支店への出張で、阿倍野区にいた叔母の家に泊めてもらい、そこで『川柳雑誌』に出会ったのである。叔母の主人の弟が『山本葉光』と言って『川柳雑誌』の会員だったのである。私はそれまで勤務先の俳句会に所属していたが、少し飽きが来ていた。葉光からの川柳の話聞くうちに、川柳に興味が生じて来て、二月号から誌友として購読し、

投句をはじめた。三十六年には会員に、四十年からは『川柳塔』同人となり、現在に至っている。思えば、戦後五十年のうち四十一年間、川柳と付き合っていたことになる。もう川柳なくして、私を語ることは出来なくなってしまった。その証人として私の貧しい書架に、昭和二十九年二月号から現在までの『川柳雑誌』と『川柳塔』がずらりと並んでいる。私の宝物である。

この間、平成元年には国民文化祭川柳部門で『浦和市教育委員会教育長賞』を受賞、ま

波乱の五十年を生きて

園山多賀子

た、平成五年には『路郎賞準優秀作第一席』を受賞した。このような賞を頂けるようになったのも、四十一年間ご指導下さった麻生路郎先生、中島生々庵先生、西尾葉先生ほかの幹部の方々のお陰と深く感謝している。

もう一つは昭和二十九年九月二十五日のことである。当時は麻雀が盛んで、よく徹マンをやった。二十五日午前四時過ぎ、『九連宝燈』をやったのである。『九連宝燈』をやると、その後の運はなくなると言われている。そのせいか、その後幸運に恵まれていないようである。

なお、悲しいことに当日、青函連絡船の洞爺丸が台風で沈没し、多数の尊い命が失われたことである。

だから昭和二十九年は、忘れられないのである。

終戦の玉音に涙してから五十年、風化した

遠い過去のようでもあり、昨日のことのようにも思える。混沌とした中で、よくぞこま

で生きて来たとは思えない。

戦は終わったとは言うものの、戦時の物不足は尾を引き、住の方は雨が洩らねばいいとし

ても、食の方も麥らぬ不足、自給自足の野菜作りに汗をして大奮闘を続ける。衣の方もみんなは脱いだものの意に任せず、自己流の洋裁で子供の学生服から学生帽に至るまで手作りや間に合わせ、母の着物が数枚ワンピースに化けるリフォームに、夜なべのミシンがどれだけ家計簿を支えてくれたことか。窮すれば通ず、人間困窮の果てにはどんな知恵でも湧くという自信を持ったことは素晴らしい収穫だった。

七十二歳の母が三か月の入院、それから視力を失ったままの母を看取りながら、孫姉弟を育てることに無我夢中だった。四十九年春、主人が停年を迎えたと同時に、母も十五年の病床生活の幕を閉じた。

その後、孫娘も二児の母、可愛い曾孫が日曜日ごとに顔を見せるのも楽しみ。弟の方もたくましい社会人、時々優しい言葉でホロリとさせる侄でもある。

母の逝去時に戻るが、母にも孫にも解放され、改めて自分の年齢を考えるゆとりに一抔の虚しさを感じ、主人の気配りから尼緑之助先生に師事することになった。五十一年頃から先生について句会にも出かけ、川柳が私の生き甲斐となり、辞書を座右に置くようになった。句会を重ねると、男女老若を問わぬ柳

友が増える。「さよなら、またね」。握手の温みが私をとりこにし、また逢いたい、語りたい、飲みたい。そんな人たちの顔が私を老けさせない。

たまたま昨年、東野大八先生の『没法子北京』を手にし、先生が在満当時、『月刊満州』の記者であったことを知り、あたかも主人が十八年、引揚げの際持ち帰っていた同誌をお贈りし、大麥、喜んで頂き、年賀状まで頂い

古い日記帳から

結城君子

麻雀に嫁の立場がたらくなり

昭和二十一年は、敗戦直後の大混乱時代でした。私たちの新婚の時代もありました。

世相が安定するまで静観している方が、世間知らずの我々にはかえって安全と、疎開先で結婚し、帰阪の機会を待っていました。

田舎での生活は安易なようでも、足は地についていないし、日が暮れると何することもなく、不安ばかりつきまといまふ。一緒に暮らしていた舅が楽天的な性質で、そのころから

た。戦後五十年を経ての数奇なふれあいを大事にしたいと思つた。

主人も晴耕雨読、ますもって元気、ワープロを打ち、コピーに挑み、一日二階から降りない生活。私も日曜ごとに句会巡りに大忙し、こんな侄さが何時までも続くことを希うのも無理な欲望かも。

尼先生の川柳は積み重ねであるとの訓えを忘れない。

毎夜、麻雀の用意をしては夕食の後片付けを急がします。家庭麻雀が始まりますが、私が勝つと姑の顔付が変わります。嫁として麻雀も遊びではなく、つらいものとなります。

平和なり 終日波の音を聞く

震災の町は急ぎ足となり

正月へせめて乾いた着物きせ

南海大地震があつた直後です。そのころ、私たちは箕面市に住まっていました。父母は

疎開先に残り、新生活を始めるべく都会へ出ましたが、頭打ちのことばかり、ナンバ駅から白浜までの切符を手にするのに、徹夜しなければ行けないのです。寒い一夜、コンクリートの上で徹夜なので着こんで、ぶくぶくになつて座っていると、森川拔智さんと森川まさおさんが来てくれました。二人の兄の姿を見たとき、嬉し泣きました。徹夜も四人になると何となく温うなつてきます。

やつとの思いで疎開先に帰れば、津波で流された家、結婚式の前日泊った旅館は跡かたもなく、震災の大きさに胸を打たれました。浸水した家の庭には、ふとんや着物が所狭しと干されていました。

そんな海沿いの漁師町を抜け、温泉へ行くのです。被害を受けた人の白い目を背中に感じながら…。

初咲きに父の呼声高くなり

宵待草咲いて説明三回目

日が暮れると家の前の芝生に床几を出し、夕涼みしながら宵待草の開花を待ちます。

「咲くよ。早う、早う」

と父は家にいる私たちに声をかけてくれます。いかにも南国らしく、大輪の黄が鮮やかに夜

を飾ります。

この花の面白さは、月を待つて咲くこと。

花が開くとき、ポンと音がすること。父の説明が毎夜つづきます。

復興の一步を踏み出したきすぎずした都会と、何ごともなかったかに見える田舎との差を感じた日々でした。

大阪へ本格的に家探しに行く決心をしたのは、ジェーン台風がきつかけとなりました。

海に近い家は、もろに吹き荒れ、一枚の雨戸がとんで台風が家中を猛り狂い、半壊になりました。

まだ零歳の長男を抱きかかえて、向いの家へ走りました。やつと戸を開けてもらつと、何とこの家の方がひどい状態です。また、ふとんを子供にかぶせて、嵐の中を転げるように帰り、海辺の台風の恐さを知りました。

骨董品はもちろん、衣類など売れるものはみんな売り払って、大阪へ帰る資金を作りました。もう何も惜しくない。ただ帰りたい思いで疎開地を離れる前に、初めて景色のよい数か所を自転車で回りました。

父はまず冥府の餅のたべ初めか
孝養の至らぬままに父の計

晦日そば やがて話は亡父のこと K

父は屈託のないよい男でした。母乳が出なくなつた私に遠慮させないように、

「さあ、街の様子を見てよう」と、遠い道のりも楽しみに振替えて、牛乳を手に入れてくれました。

来年は頑張れという父も亡く
借金を脱ぎ切れずして除夜の鐘 K T

結婚十年目、大阪へ帰つたものの、安心してもらえることもなく父は亡くなり、我が家の経済戦争に突入の時代となります。

古い日記帳のページを追っていると、おかしいことやら、泣けてくることやら、いつの間に五十年たつてしまつたのかと思います。

つれづれの思いを川柳にしてみました。句会など、とてもとても兄について行けませんでしたが、今こうして、この時代に心の動きを下手ながら句にしていたとは、新しい発見でした。長い間の休みの年月があり、初老に入つたとき、目が覚めたように作句を始めました。川柳は親友です。

町

稲本凡子選



町内の顔を揃えて来る奉加
町までは二キロ晴れた日は歩く
屋根に石おいて冬眠続く町
七転び八起きで生きて来た町だ
半日が噂は町をひと回り
めだか棲む川を跨げばとなり町
朝の配達終る頃町目を覚ます
「ピアノ教えます」町で生きてる未亡人
どんくさい町だぬるいうどんだな
秋刀魚焼く町に暮しの詩がある
軒先をチンチン電車走る町
市へ昇格二つの町の名が消える
侍が現われそうな城下町
葬いが出て町内の顔が寄り
重文の家がならんだ城下町
町内に子供の声を取りかえせ
町会の役員だから怒れない
町並みが変わって迷うつばくらめ
親類と仲間ばかりの町役場
好き嫌い言っても慣れた町の良さ
町起しする温泉を掘り当てる
合併で町になったが過疎のまま

鉄治 ありき 大柏 寿恵子 宵明 芳郎 みのる 俊子 勝 高夫 寿美 春枝 倫子 満秋 狸村 富美子 富美子 しげお 富喜子 佳雲 ちかし 通彦 洋

招かれて町の違いを見て帰る
町おこし鬼の伝説借りてくる
震災の町に我が身を置いてみる
無色無臭の町でうつろになつて
飽食に慣れてなさけに飢える町
縁あって城ある町の隅に住む
若者の意見も聞いて町づくり
毎日が声掛け合える小さい町
若者をウターンさせる町おこし
嫁連れて帰れば町は風の盆
我が町の誇り文学館が建ち
この町がだんだん年をとってくる
町内に花が絶えない地蔵さん
税金が安けりやもつといい町だ
食い違ふ意見で町は真つ二つ
佳

忠雄 時弘 黎之助 美代子 よしみ さち子 勝美 志重 一花 新造 希久子 あずき 重人 次男 次男 次男 清美 艶子 やすお 帆雀 純隆 宵草 武春 久保 正剣

毒ガスに突然出会うかも知れぬ
突然にあんなに好きと言われても
終の日は突然だから善を積む
突然の地震ない働きの街と化す
露頭に突然過去へ戻される
突然に海が展がるバスツアー
老いひとりひたすら願うばかり死
突然の栄転ソプラノになつて
不意にきた税吏ご機嫌よく帰る
雑魚寝から突然誰か叩き出す
突然の客へ回した母の膳
雑兵が寝耳に水と聞く辞令
会議中突然あくびしたくなる
突然の名差しの祝辞皆に受け
前触れもなく赴任地へ妻が来る
突然変異だらうか二枚目の息子
お父さんと君に突然言われても
痴呆症突然予告なしに来る
銃撃もサリンも予想せぬ油断
突然に熱が出るのは休診日
平坦な道で突然試される

突然

氏林洋敏選



蛭 よしみ 南奉 純隆 晋 英子 通彦 美代子 洋 清美 鉄治 恭昌 智加恵 悦男 清芳 保州 正子 勝巳 あきら 秀夫 倫子 富喜子

突然の話にあつた水面下

突然になれたら良いなシンデレラ

本人には突然でないいいじめの死

突然の変節で得た首相の座

突然に旅に出ようと言つた夫

突然のひらめき老いを忘れさせ

震災で突然鹹になるバート

突然に嫁連れ帰るバスポート

電話口突然こちらニューヨーク

突然の破談にゆれる薬指

蚤からいきなり絹は紡がない

救急車裸足のままで添う身内

突然にしては言葉が行き届き

突然に妻から届く果たし状

突然の指名に舌が慌てだす

住

葬儀社へそれとなく聞く急な事

ひげ奴ひよいと出そうな城下町

突然の喜びごとを泣いて受け

影武者が突然一の矢向けて来る

突然の訃報に椅子が回り出す

人

辞令一枚突然春の風に乗る

地

不意に来て温もりおいて帰る孫

天

足音が突然しくなる不安

軸

お父さん彼氏突然畏まり

公子

ちかし

舞鳥影

あずま

一壺

通彦

寿美

勝

葉香

舞鳥影

明水

しげお

美保

清史

明水

大柏

たま

玉恵

旋風

雄々

甚一

一本

勇太

望む

川島颯云児選



大それた望みはとくに捨てました

鷹になる望みは捨てぬとんびの子

それ以上望むと愛想尽かされる

高望みしても入試はスクラ散る

広大無辺入り日望める窓がある

高望みして一浪を覚悟する

高望みしない飯さえあればよい

子に望みあまりかけないほうがいい

高望みなのかあの人まだ独り

サギ草は飛び立つ望み抱いている

願望の椅子へ過労死待っている

海外旅行したくてバイト精を出す

志望校陰で支えている祈り

現場百回望みを捨てぬデカの靴

いっぱい望みつめこむ塾かばん

東大へ二浪が夢をつなぐ絵馬

欲望は人の心を傷つける

外人の主役じゃ困る国技館

果せない希望子に賭け孫に賭け

しあわせを望む女の軽い足

望みだけ高くもつてる自尊心

産声が明日のドラマの戸を叩く

克治

あずま

豊

東雲

富喜子

多賀子

次男

佳雲

武史

よしみ

一齋

正雄

葉香

正剣

隆

勝

雅城

高明

寿恵子

艶子

狸村

善保

別々のレールに親と子の望み

高望みするから背骨きしみます

合格へ挑む徹夜の灯がつづく

夕陽燦々明日へ希望持てと言う

平凡な平和を望む炊飯器

農を継ぐ人を望んでいる案山子

望まれて嫁ぐ俸せ風ひかる

どうしよう何にも望むものがない

梅薫り絵馬の望みもかないそう

福耳へ望みと別にある悩み

店を持つ望みで今日も屋台曳く

安楽死だけを望んでいる余生

子に賭けた望み風船割れました

サイレンが近い二階へ駆け上がる

桜満開のう上なを望もうか

住

望むもの多くて鬼になっている

快眠快食そのうえ望むものはない

海望む丘で昨日に戻れない

千手観音望みは一つだけにする

静かな港で降りたい浮世舟

人

わが村を一望の丘 兵の墓

地

人並みの望みが塾へ通わせる

天

俺よりも先に死んではいけないよ

軸

ささやかな望みが消えていた日記

有一朗

南奉

白光子

寿美

四郎

一花

たず子

正子

一風

雄々

鉄治

あきら

希久子

虹汀

美代子

重人

保州

英子

しげお

俊子

宵明

満秋

土橋

螢

初歩教室

題——捨てる

吉岡美房

「川柳は省略の文学である」と言われるように、作句に当っては対象をしつかり見極めて焦点を絞らないと句の切れ味が悪くなり、句が散漫になってしまうものです。一方、省略しすぎて作者の意図するものが不鮮明となり、ひとりよがりの句になるものです。過不足のない省略に心がけて頂きたいと思えます。それでは添削句から発表します。

雑踏へ悩みを捨てて行つて来る 孝男

(雑踏へ春の悩みを捨てに出る)

意地を捨てて和を求むるこそ人の道 ミツオ

(意地捨ててみたらどっちも阿呆やった)

いらぬもの捨ててすっきりしておこう 美寿子

(すっきりとするのに未練捨てられず)

粗大ゴミ使えるものも捨ててある 真一

(我が家ならまだまだ捨てぬ粗大ゴミ)

捨て猫を素通り路地で目が合いぬ 幸枝

(捨て猫と目が合い路地が抜けられず)

八十にして捨てるを知らず大切に因静子
(捨てること知らない齢を笑われる)

捨てた筈の夢がチクチク身をせめる 侑里

(夢捨てたはずがチクチク身をせめる)

一日一つ欲は捨てましょ重いから 円女

(捨ててみて欲の重さがよく判り)

古い殻捨てて私に影がない

(古い殻捨てて変身するわたし)

年金を外し捨てたい粗大ゴミ

(粗大ゴミ年金あつて捨てられず)

捨てて来た未練の筈のひとり酒

(捨てて来たはずの未練がつつの酒)

捨てた恋拾つた恋も戒橋

(拾つたり捨てたり戒橋の恋)

捨て切れず居場所狭くなるばかりゆ弘子

(捨てるのが下手で我が家を狭くする)

子は親を捨てても親は捨てられず

(子が親を捨てる時代を考える)

整理して捨てる気でいて又納い

(捨てる気で整理したのにまた仕舞い)

夫は逝き女盛りの匂い捨て

(夫逝き女盛りを捨てて生き)

捨て駒で攻め立てつづけ勝名乗り

(捨て駒の妙手わたしに勝ちをくれ)

(親捨てるようにふる里あとにする)

捨てた筈肩書きやはり口にする 和歌子

(すぐに出る元の肩書き捨てて切れず)

捨てられるよりは捨てる身をお悲し

(姥捨ての話自分に置いてみる)

捨て鉢で詠んだ柳句を褒められる

(捨て鉢で詠んだと照れる入選句)

捨てる身の焼野のききす夜の鶴

(身を捨てて焼野の雉子を守る)

捨て猫がまた戻り来る春の宵

(捨て猫が住みつき家族主張する)

捨てられた種が大きな花をつけ

(捨てられた種の命が花をつけ)

リストラで使い捨てなる風荒れる

(リストラという人間の使い捨て)

欲捨てたあとから運が向きはじめ

(欲捨てた途端に運が向いて来た)

描いた絵を死ねば捨てると困る夫

(描いた絵を死ねば捨てよと困らせる)

意志弱く捨てるタバコに流し目を

(やめるため捨てた煙草がやめられず)

思い出を夏帽子とも海へ捨て

(思い出があり捨てられぬ夏帽子)

捨て台詞までが心に突き刺さる

(捨て台詞心に刺して去った人)

(マイ料理キャベツに感謝心を捨て)

捨て切れず思い出と住む祖母の部屋

りつえ

(捨てられぬ思い出残し明日嫁ぐ)

絢子

落ち椿掃き捨てるのは無惨すぎ

絢子

(燃え切って掃き捨てられぬ落椿)

春枝

鬱捨ててる例の飲み屋のカウンター

春枝

(春のうつ捨ててる飲み屋のカウンター)

方子

捨てられたゴミが暮しを物語り

方子

(捨てられたゴミに暮しの物語り)

トヨ子

捨てた恋今なら大手で拾えそう

トヨ子

(捨てた恋今更惜しい若かった)

信敬

捨てる機器再循環のリサイクル

信敬

(捨てられて息吹きかえすリサイクル)

宏章

使い捨て慣れてゴミ箱狭くなり

宏章

(使い捨て時代が国を汚してる)

一典

知事さんへ呼び捨てにする同窓生

一典

(同期生知事も議員も呼び捨てに)

タツエ

嫁姑捨てる道具でくい違ふ

タツエ

(片付けて捨てる捨てない嫁姑)

弘子

捨てられた事も知らずにボチは待つ

弘子

(名をつけて子犬ととう捨てられず)

照

幸せになつて下さい捨てたひと

照

(幸せを祈るわたしの捨てたひと)

美恵子

生き甲斐をリホームに持ち捨てられず

美恵子

(リホームを生き甲斐にして捨てられず)

志重

引き出しをひっくり返せと捨てられず

志重

捨てられて捨てたと思ふ自尊心

秀夫

(捨てられたなどとは言わぬ自尊心)

郁子

煩惱を一度は捨てた震度七

郁子

(欲捨てて再起を誓う震度七)

静子

大正も捨て上手いて感化され

静子

(大正の姑に習う捨て上手)

強一

いつかきつと活きる捨て石打っておく

強一

いつの日か活きる捨て石打っておく

タミ

何も彼も捨ててタンポポ一人旅

タミ

(ふるさとを捨ててタンポポ一人旅)

正子

震度七忘れられない捨てたもの

正子

(震度七命の外はみんな捨て)

碧

身を捨てた若き命も遠くなり

碧

(国のため命を捨てた 弟よ)

碧

着想・表現ともに立派な句

絢子

捨てたのはわたし うちも思ってる

絢子

使い捨て衛星空の粗大ごみ

露爺

こだわりを捨てて明日が見えて来る

宏章

過去捨ててる勇気を彼がくれました

三津子

過去捨てて明日へと向う汽車に乗る

芳水

生きている捨てたい過去を抱きながら

鐘造

捨て印のままで一生終りそう

半畳

引越越しに捨てるに惜しい荷が嵩む

侑里

要らぬもの勿体ないが捨てさせぬ

よしみ

捨て植えのカボチャ ころ実をつける

幸子

切り捨てる枝一本にある極め手

瑠美子

未練など捨てたつもりが火種抱く

武春

捨てたのでなくて落した恋もある

文子

年金を稼いだ靴で捨てられず

三重

捨てられぬ昔は着れた好きな服

幸子

捨て猫がうちのベットに恋してる

勝巳

わが家よりましな簾簾が捨ててある

ツネ

捨てるには惜しい大事な粗大ごみ

君枝

子を庇う母を捨て身にしたじめ

ふゆ子

捨て台詞はいて飛び出し帰れない

高栄

欲捨てて良寛様は子と遊ぶ

美子

捨て猫が何時か家族の中にいる

黎之助

若竹は育てた皮を捨てて伸び

さち子

捨てられぬよう過剰包装するわたし

章子

ボーイ捨てにされず空缶はつとする

玲子

ボーイ捨てを立て看板は見えてるだけ

めぐみ

煩惱を捨てよ 菩薩の目が笑う

キヨエ

意地捨てて見ると鬼など居なかった

キヨエ

私の句

春爛漫人生捨てたものじゃない

意見

捨てる気を飼う気にさせた子の意見

意見

題「痛い」 6月15日締切(8月号発表)

宛先 千583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡 美房

吉岡 美房

お世直し

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

いずも川柳会

園山多賀子報

からくりで人形生きる糸さばき
石を蹴るまだ人形になりきれず
人形が昔のように喋らない
人形と恋人ごっこしています
離人形色褪せわたとしと同年
被災地へ花の便りを届けた
十五度で咲いた桜の寒がりや
切取線あたりが狂う花の棘
来る来ない花弁に罪のない別れ
被写体をしやがませている花時計
深入りすると花芯に化かされる
掃蕩性信じて送る花八つ手
たくさんの門出見て来た桜の木
胸上げて友に門出て見送られ
駅前で門出見送る花時計
母のいる絵からそよ風吹いてくる
無理をせず花になる日待つ蕾
山家にて候花に埋もれる
夫の絵に私の知らない橋がある

房 子 房 子
きみえ 芳 子
町 紅 明 子
草 丘 祥 庵
おしえ 鳳 笙
義 良 多 賀 子
文 子 正 朗
久 栄 寿 美
ち え 裕
美 佐 子

泣いても笑っても絵になる若い人
故里に亡父の未完の絵が残る
春愁や絵筆が前へ進まない
残り火をかき立てながら執る絵筆
老妻の味に慣らされ踊らされ
持ち寄りの味を賞め合う花の下
飽食に恋う亡父の味亡母の味
呆ける頃夫婦の味がやと出る
新妻は変った趣向で味を煉り
花言葉想いのたけは未だ蕾
過疎の駅門出の友を一人乗せ

堺川柳会

河内

月子報

しまし ちかし 満江 佳子 茂美 清子 ひろし 昌枝 勝水 まこと 流石 楓楽 鬼遊 美代子 みつこ 哲子 昭子 照太 勇太 二南 紀美女 春蘭 頂留子 金三郎 菁風 道胤 美子

爽やかにひとつのリングかじり合い
春風にうっかり隙は見せられぬ
散り急ぐ桜に残る靴の音
愛だけで埋まらぬ隙のある夫婦
散り際を美化した日から五十年
来てやった貰ってやったと噛み合わず
隙だらけの家でのんびり生きている
噛み殺さねばカマキリに笑われる
お月さんのかくれてる間に散るとしよう
隙のない女が足で戸を閉める
万歳と叫んで散った戦友偲ぶ
旨い酒やった その日を噛みしめる
子をたんと産んでくれそうっちの嫁

とつとり川柳会

武田

帆雀報

りつえ 泰子 摩耶 八千代 東雲 かりん 楓 半銭 文 彰 天笑 月子 粗粒 茂 光子 和歌子 喜与志 一枝 侑里 静生 圭一郎 行男 正美 孝男 黙光

母さんは赤ちゃん達の名医です
寝込むなど論した医者が癌で病む
見舞客来れば病人らしく居る
医者嫌ひ頑固親父の灸の跡

銀嶺
よしお
山人
舍人

うちの三毛垣根を越えて恋をする
どの石も光って垣根越しに見る
垣根から少し先まで掃いておく
白バイが垣根に隠れ待っている

輪多朗
多哥由
悦子
睦子

垣根を低くすれば優しさ見えて来る
九条の法の垣根で銃を持つ
垣根とれ晴れてバトンを娘に渡す
決断が出来ぬ垣根の冬薔薇

帆美
明美
陸子
悦子

終章の垣根はきつと花盛り
高槻川柳サークル卯の花
川島諷云児報

揚芝
帆雀
明美
睦子

逆らわぬと決めて忍従の日が暮れる
噂とはまったく逆のくらし見る
修練の汗が実った逆転打
逆説もいつかまともになる歴史

きみ子
螢
揚芝
帆雀

逆光に椅子取りゲームの跡がある
逆縁の位牌へ余震まだつづく
逆まわりする時計持つ母の愛
逆縁の涙乾かぬまま老いる

武庫坊
スミ子
よ志子
年子

面親も持て余す幼児の自己主張
風花の墓に情けのあり余る
目に余る妻だが俺の宝物
妻や子へ余熱残した夫の孤独

ひでお
静江
波留吉
節子

野暮ったさの中に人情滲みでる
野暮ったく見えて隅には置けぬ人
野暮な帽子に万葉のひとつかけら
曲り角男涙を流す時

マツエ
克治
節子
波留吉

定年を待っていたのは曲り角
曲り角そこから泣いて駆け出した
曲り角に黄色い旗を立てておく
曲り角迷わぬように待ってやる

東雲
艶子
かおり
恵美子

口下手もカラオケだけはよく弾む
落着いて居れぬ痴呆が攻めてくる
定刻に美人の通る道を掃く
イタリアへガイドブックで飛んでいる

あきら
ふみ
道胤
惠美子

グーチョキパー夫婦茶碗の欠け具合
寒ばたん騙した人を恨まない
割り切れぬこと一つあり茶が苦い
玄関を磨き噂を寄せつけず

重人
龍小
英一
しげお

根性はいつも晒に巻いている
母さんの根回しうれし岩田帯
会社では根回し上手と煽てられ
椅子あいてやつとの思い先越され

正坊
しげお
英一
龍小

人の目をさけて課長の椅子を蹴る
物言いが下手で根回し役立たず
あの時に根回しあればと悔いの日々
根回しにふり回されて行事故案

い子
悦子
良平
末吉

此の椅子が女房子供を生かしてる
根回しのくぎ煮がきいてよい返事
世話好きに根回しの役押しつける
あの方も押してあげたい車椅子

都子
寂子
庄六
晶子

藤椅子が手持ち無沙汰で隅に居る
窓際の椅子でリストラ待っている
尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

洞庵
狸村

菜の花は菜の花いろの雨を呼ぶ
菜の花が笑ってからの風景画
菜の花へ明日のことは考えぬ
菜の花の燃える想いに負けてくる

正一
年代

菜の花が黄色い声で呼んだ春
逆光の影ながながと地には菜の花
地震からしこりを解けた夫婦仲
激震のしこりを抱いて春が来る

比呂志
美智子
杜的

触れた手の温みに溶けてゆくしこり
しこりを作りしこりを解いた大地震
切り取り線から外されていたしこり
佳句地十選 (5月号から)

伊三郎
正治
諷云児
キク子

哀しみを沈めて川面澄んでいる
夢を食う虫に好かれて生きている
咲く花も落ち葉もみんな歌になる
好きなこととしている寒い風景だ

澄子

あちこちを背伸びしてでも見たい春
花が散るまでに詩集を読んでもおく
じゃがいもの芽が伸びてくる倦怠期
包帯の指に甘えがのせてある

喜美子
正雄
蘭幸
さとみ

親類の方程式に悩む嫁
不器用な夫婦で五人子が産まれ
節子

洋子
凡子
祥文

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

時 広 一 路

天と地の間 人脈うごめいて
 あすあれと天を焦がして修二会の高原のひろがり天のおおらかさ
 春雷や天で誰かがわるさする
 ひとりばち天はいろんな夢くれる
 暗い殻脱いでドングリ光らねば
 ジャが芋の窪みが秘めている闘志
 子の夢の色で折りたいた紙かぶと
 自画自賛意欲が空転して困る
 淋しさに水飲むばかり春の犬
 独り住むひとに便り途切れがち
 震度七我が傲慢を打ち砕く
 口下手が喋り続けて困らせる
 ネコ探すピラ震災の町に貼り

城北川柳会

吐田

公一報

久留美 正子 紫香 武庫坊 光穂 ハツエ 鹿太 萬芽 萬柳 昌子 まさお 白溪子 石舟

ガレキの山で嬉々と戯る幼子ら
 肉じゃがを上手に炊いて娘が巣立つ
 一回のキスでやけくそ直ってる
 やけくその気持ちは分かる苦勞人
 合掌の屋根やすらぎを抱いて更け
 石一つ投げて波紋を確かめる
 旅行費がたまれば休むアルバイター
 復興の街を励ます花だより
 骨ええも分からぬ人待つ廃墟
 桃一輪今年の雛はひかえめに
 被災地へ香り届けよ梅の花

倉吉川柳会

谷口

次男報

久留美 達子 昭子 静子 柳影 白峰 あい子 満津子 一枝 倫一 公一 美智子 御前 智子 石花菜 秀峰 次男 瑞枝 かつみ 荒介 サカエ 和枝 (山) 康子 柳風 雄々 寿満湖 秋女

特効薬より速効薬ありますか
 飛行機は雲と音速後にする
 補聴器も春の速報待っている
 その時は夢一杯の青写真
 岸和田川柳会
 田中 文時報
 カップルで銀盤に舞う名演技
 背景に惑わされても買えぬ家
 登頂せず山を背景写真とる
 背景がばやけた選挙気にかかり
 円高を背景にする世界旅
 背景にむかし遊んだ浜がない
 背景の赤激情を盛りあげる
 我武者羅に働いたツケ膝に水
 寒風にミニを楽しむ膝小僧
 はたと膝打つこと増えた物忘れ
 お祭りがめしより好きなお膝もと
 決断に迷い深爪してしまふ
 深い傷負った心をバネにして
 深い空やはり出直すことにする
 奥の深さしみじみ知った陶土いじり
 口で言うほどの深傷とは見えぬ
 平常は無沙汰祈願の絵馬奉じ
 平常は関心のない嫁姑
 平常に客を迎える妻の顔
 何かあった平常と違う妻の顔
 平常の言葉が出ない百十番
 待ちわびて平常心が荒れてゆく
 お祭りが済み平常となる暮し

苦句 独歩 秋草 よしえ 朝子 路子 園子 盛之 呂万 金太 白光子 文時 タツ子 甚一 狸村 和重 敏光 ダン吉 萬的 柳宏子 弘二 昭二 けい子 鹿太郎 倫子 富志子 通彦

平常な心でやろう斬られ役
豊作と聞いて買ひ溜め悔いている
豊作を祝つて農機売りに来る
豊作へ納屋の農山子が大威張り
豊作の分だけ腰のサロンパス
豊作を笛と太鼓ではやしたて

川柳ねやがわ

江口

公認のピエロを乗せて選挙カー
公認の店にもあつた不良品
公認がとれて安全パイとなる
ひらがなの名で公認の返り咲き
イチローの卵へ鶴の目ネット裏
終章の介護を期待する同居
ご期待に添えば私が潰される
少しずつ期待裏切り子が果立つ
敵のあるそんな男に期待する
権力を切る毒舌は爽やかだ
舌かんで死にたいと言つ入歯
セールの舌にへそくり身構える
ようまわる舌テンブラは大嫌ひ
妻の公認受けて嬉し口コップ酒
口喧嘩フル回転の舌に負け
舌鼓うって手料理褒めている
迷い子の目印に言つエクボです
悟りきる尼僧のえくぼにも過去が
騙されてやろうと思つあのえくぼ
幸せも時々逃がす片えくぼ
生き方を変えるえくぼにめぐり逢ひ

一 弥 一 齋 信 博 さよ子 浪速子 度 報 一 途 シマ子 博 泉 英壬子 洋 ルイ子 欣史子 勇太郎 小路 時 弘 とし子 静 江 度 波留吉 光 子 三 郎 高 榮 冬 葉 一 閑 藍 子 頂留子

このえくぼあげたい人は決めている
やわらかい空気カーテン替えてから
一〇〇円の汗を知らない息子たち
うひとり住んでホカ弁買い比べ
ふとん屋のだし匂う街母のまぢ
花粉症蝶になれ匂う私です
避難所暮し難の日も忘れてる
えんどうが花を咲かせていた余震
手にのるだけの幸せだからこぼさない
はびきの市民川柳会 櫻本 吐来報

たもつ かすみ 黎之助 あやめ 良 知 磯 吉之助 恵 子 一 風 泰 子 シマ子 一 貫 岩 信 俊 男 与 呂 志 敏 利 武 扶美代 志 洋 重 人 聡 美代子 絢 子 敦 子 キミ子 悦 子 昭 平

モーニング見事な嘘を吐いている
千歳給しゃぶつていますモーニング
相性がびつたりいかぬまま家裁
びつたりの人を今でも探してる
核心はびつたり閉ざす静止画よ
病める母 明日の天気びたり当て
定年で知つた家内の別の顔
繁栄も所詮マグマの上と知る
知つても知らぬふりする利口者
政治家の秘密を知つていた女将
親の気も知らぬが仏腰かじり
知らぬ間に一人歩きをするつわさ
川柳若葉の会 宮崎シマ子報

りつえ たけし 洞 庵 ダン吉 みつこ 辰 子 晋 かつみ さいち 金 太 一 壺 昇 薫 風 弘 直 欣史子 香 住 あずき 田実子 能 子 シマ子 留 吉 清 芳 弘 子 鈴 枝 久 子 溝口川柳会 小西 雄々報

初孫の笑顔一番素敵です
露のとう春一番を味覚する
一番星今日のうれしい話する

一番になれと教育ママがいう
春一番吹いてみんなを慌てさせ
合格の舟を一番先に漕ぐ
飯炊けば一番さきに仏様
老いの愚痴一番星も聞いてくれ
春一番吹けば今年も田ごしらえ
一番の陰の努力に気がつかず

川柳クラブわたの花 片上 英一報

流された岸恋しがる流し雛
一枚を脱いで明るい春彼岸
ほんそこと泳いでみたが遠い岸
川岸の恋に猫の尾つみとられ
赴任地の岸のさくらに迎えられ
彼の岸へ極楽号の舟が行く
向う岸咲いて菜の花春を呼ぶ
岸壁の母よ見納めかも知れぬ
芽のいぶく岸へジャンプの123
海岸でひとり占めする今日の星
向う岸に着く前溺れない覚悟
反省し老いては妻の歩に合せ
震災がひとのやさしさ揺り起こす
もう春が動きはじめた冬木立
一円で世界平和を祈ってる
体調の悪さ根性でカバーする
梅ごよみ梅酒梅干し梅雨に入る
被災地へとどく南部の梅の樽
大仏の指かた神話こぼれおち
ゲートルを巻き直立で聞く神話

康女 静江 智恵子 正光 豊枝 信敬 雄々
シマ子 友甫 泰成 春子 道子 トシェ 明子 幸枝 朝子 しのぶ 実希子 ますみ ミツ子 剛治 弘直 英一 隆 一風 美津留

向う岸ころ淋しい人を呼ぶ

川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

花道のかげに黒子の妻がいる
同窓にやつと勝ったは長寿だけ
ポケットの穴から落ちた夢一つ
ワンパクも夢を背負って塾通い
失敗は柵に上げたりかくしたり
喜怒哀楽化粧でかくすピエロです
主婦肥えて地球ダンダン痩せてくる
旅一夜見知らぬ人と酌み交わす
落ち込まず話してごらん策もある
落ち着いて本番前の深呼吸吸
走馬灯六十年の夢を追う
震災で一步違いの幸不幸
黙っても目がしやべり出す話好き
あの遺品ほしいが口によつ出さん
暖かい友が明日の幸をくれ
ヒソリと水仙群れて土堤の春
口車乗って戻らぬ悔い残る
春ウララヒネモス猫もつながれて

川柳塔みちのく 小寺 花峯報

ハンドルを握れば春が動き出し
仮面同伴深夜の街を練り歩く
同伴にいつもびくびくする財布
ハンドルに青い山脈かける
かくれんぼは母はおんなに化身する
小が大 制して人氣の大相撲

鬼遊 ひかり 吟笑 はつ恵 くに子 かり ありみ あきら マツエ ふみ 中なみ子 いさむ 治延 正雪 放任 チカエ マサエ 文仙 クニエ 五楽庵 花峯 一花 隆樹 黙人 井蛙

切り札のときに泪の演技する
切り札を握れば不眠症になる
ハンドルを任せてからの飲みっぷり
北の海生きる女の頬被り
片肌の桜で決める時代劇
ハンドルを妻に握られ粗大ゴミ
満月に寄り添う影を映される
手の内を読まれ切り札反古になる
前に行く影も夫婦でない二人
同伴者のひとりにも鬼が居る
セーターの色を揃いで出る夫婦
白魚の指で男の骨を抜く

東大阪川柳会 森下 愛論報

被災者にロインの傷が焼け残り
小細工をして傷口を広くする
傷心をバナに明日へと立ち向かう
脛の傷かくして北の駅に立つ
気兼ねする柄かと笑う温い友
春三月花粉が気兼ねせず飛ぶ
気兼ねすることもマナーの数のうち
焼け跡に寒い話が落ちている
人生を変えた一枚のテスト
裏口へ邪心がのぞいているテスト
どっちもがテストしている気の見合
姑に味見してもらう匙加減
上々のテストにあつた落とし穴
春を待つ球児は寒風突いている
復興の熱気寒さを吹き飛ばす

一光 北城 生恵子 ツネ 雅城 花匠 正徳 龍人 北歩 きん子 しげる アサ 東雲 庸佑 愛論 恭昌 頂留子 信治 隆 度 文秋 高尚 晋吾 章久 柳宏子 猪太郎 信博

通勤の寒さとます桃の花
ゆきひらが煮えて夫婦の灯が和む
ひね豆を母ふくらと煮ふくめる

三幸川柳教室

三宅

保州報

水と油互いの癖を主張する
生年月日ときとき化ける癖がある
むきになる癖が抜けない肩パッド
貝になる癖で狭める守備範囲
外反母趾まわり道してできた癖
客の癖裏表知る招き猫
勘違いでしたと先に折れてみる
いい人がきつと出来てるあの素振り
勘違いされて苛立つローヒール
交番にぴんときたらと貼つてある
勘だけで渡る世間の運不運
四面楚歌保身へ勘を研ぎ澄ます
鬼手仏心勘が操るメスの先
宮さまのなまずも知らぬ直下型
グラムより勘で作った味の良さ
悔い残る日は痼性に鍋磨く
ポイ捨ての缶磨かれた車から
ゆつたりと磨けば光りだす大器
脳細胞磨く賢い本を読む
人間を磨くとうつわまで光る
父のステッキ待つていたのはお下げ髪
青春の詩宵待草にある慕情
背く子に母はいつでも待つ形
岸壁の母に続いている戦後

太一 孤舟 湖風 三千子 章子 靖子 茜 孝子 美羽 武春 当代 貞子 和子 百合子 公子 桂香 正雄 和代 千秀 町子 朱夏 高夫 圭子 初子 保州 さい子

口開けて休まず人を待つポスト
せめて待つこと身につけて来た暮し
科白などいらぬ真心待つている
梅ひらくあなただの心待つている
寝待ち月いっしょに待つたひとは今
待つことに慣れ切っている毛糸玉

川柳たけはら

時広

一路報

スタートが肝心花の高校生
鏡よ鏡きれいに写してくださいな
先生になって帰って来た母校
おはれぬように薬一本と列に入る
お早うと小学生の列可愛い
ストなどは考えてない蟻の列
タンポポを探る旅ですペダル踏む
四季巡る極楽よりもよい日本
カニ買つて帰る女だけの旅
言い訳無用先ず行動が欲しかった
夫の友誘いに来たがとほけ面
聞き流すゆとりも出来たとほけてる
春雷へとほけたように露のとう
とほけても極楽行きに乘れるかな
雲行きへ聴こえぬ振りのイヤリング
見えすいたおとほけ妻は読んでいる
おとほけのポーズで急所突いて来る
病む癌にとほける医者のおももある
おとほけが上手になって老いて行く
一生をとほけ続けてピエロ老ゆ
喧嘩仲間も卒業式で泣いている

信子 満洲子 めぐみ 親路 美智子 鉄治 中史子 中千枝 蘭幸 一枝 規代 房子 淑子 清水 比呂子 夏喜 麻代 喜美子 笑子 螢 静佳 栄恵 節夫 正宏 蛸牛 菁居 臣子

卒業をしてから嫁は取るもんだ
人間を卒業出来ぬ群にいる
人生の卒業証書もって往く
さあ卒業青信号がついている

南大阪川柳会

金井

文秋報

郷愁は母のお焦げにたどりつく
無精髭のびたまんまのボランティア
当分は飲むなと胃の顔見せられる
美しい悪魔横領そそのかす
オンラインに盲点がある使い込み
鍋焦げた悲鳴で切れた長電話
二ヶ月もたつのに街は焦げ臭い
手がのびる酒にあればどこりといて
当分はそつとしておく反抗期
長電話どこかで焦げている匂い
当分のはずが一年居座られ
操作などするから話やこしい
当分休業病気やないやろか
中一の伸びは大人を慌てさせ
届かない想いを焦がす夕茜
裏帳簿操作に神経減らしている
当分はこのままですといいう人事
あせらずにばちばちのはす試歩の杖
大半は妻の操作で生きてきた
当分は爪を隠して待つ出番
かたくなに焦げは食べないガン予防
焦げめしを握つた頃がなつかしい
テフロンの鍋でも焦げる長電話

はるお 静風 勲 一路 楓楽 萬良 恒明 文秋 柳宏子 東雲 章久 千里 智度 重人 直子 スミ子 寿美 秋子 頂留子 庸佑 正博 悟郎 勝美 凡子 柳伸

横領の金は秘密に葬られ

横文字の多い操作へ音を上げる

ボケベルで遠隔操作されている

横領しよいお方を選っている名簿

焼け焦げた家にローンがまた残り

大物の噂当分お騒がせ

株操作医者も巻き添え食っている

岩美川柳会

羽津川公乃報

愚か者大器晩成かも知れぬ

良心の矢が我に向けて来る

矢印に背を向け生きるあまのじやく

白羽の矢立てる女の後を追う

不意打ちの矢も受け止めるいい度胸

矢印の見えぬ暗闇君と行く

矢よりも早い白バイに捕まった

矢が折れてすがりつきたい母の胸

矢面に立つとわたしは夜叉になる

戦ごっここの矢にはアメ玉ぶらさげる

必殺の矢がライバルの手に渡る

矢印は見えぬが亡母の鈴が鳴る

憶病で矢の千本がまだ足らぬ

背に刺さる矢羽根は味方かも知れぬ

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

道聞けばぬくい言葉の城下町

名も告げず親切の背がぬくい

芋虫コロコロ春のぬくさを手のひらに

ふところがぬくいと会話よくはずみ

真砂

文江

智久

シメ子

トミ子

久峰

多哥由

照女

嘉津江

單車

芳江

孝男

はるお

睦子

公乃

きみ子

螢

美恵子

大漁

忠良

一風

美津留

シマ子

春子

握手した手のぬくもりを友とする
安全神話サリンゲリラにあうまさか
一日を桜に染まる切符買う

戻らない青春油断のひとりぼち

ピッチャーの油断をついて三塁へ

跡継ぎの育たぬ国の杉曲がる

一笑に付したメモから返り討ち

人知れず咲いて散りゆく山桜

バラの絵を画いたメモなら良い返事

出土した木簡古代人のメモ

古いメモ淋しがり屋がためている

メモをとる癖ついてきた宮仕え

鍵つ子がメモ見て動く夕仕度

相思相愛想いはメモで事足りる

うしろ手で渡したメモがあやしまれ

身障の自立を祈った母の鞭

祈りつつ子の枕辺で鶴を折る

祈ってもせんないことをまた祈り

来年の再会祈る花の下

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

使い捨てはころびなどは繕わぬ

そしてまた気ままな人とお茶を飲み

あの時の残り火火消しに入れている

ほころんだ顔に許すと書いてある

まんなかで気ままなふりもしています

その時のほころび顔が見たいから

漢方薬飲んでわたしのティータム

もつとに残り火尽きたはずなのに

朝子

洋

度

美幸

和子

雄久

欣之

春堂

夕花

隆

祥文

三男

信博

泰

頂留子

東川

ますみ

弘直

たもつ

歳栄

かつ子

聖子

ちよえ

恵美子

はるみ

英子

鈴江

春の風あなたの色に染まりたし
残り火を引つ張り出した風の愛
山の瀬に水仙ほころぶ里に住み

からたちのトゲもほころぶ春だもの

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

自閉児の心を聞く仔犬の眼

大風呂敷開き注目して貰い

どのページあけても軽い悔いがある

意味もなく口紅を引く乾いた時間

意味もなく淋しい時は亡母を呼ぶ

街を歩く意味なく歩く生きている

好い意味にとつて善人叱らない

名刀は斬れない意味を持っている

瓦礫から何か生まれる音がする

生まれては消え生まれては消す恋の闇

グッピーが生まれては活気づく夫婦

春が生まれてすこし元気な縄電車

北へ旅生まれた春を掬い一つ

瓦礫から生まれ変わった生きている

宮水の生まれる山が動いた日

利子が利子生む誘惑にのせられる

罹災地の新芽に生まれ出る闘志

終章を生まれた河で閉じる蛙

生きている意味まだアランコが揺れている

美しい音色生まれ来るしじま

まともやな息子のヒゲが喋る事

大地震まともな屋根の家がない

まともだが私は翔んでいる女

民子

博利

清泉

白汀

香子

文人

重人

澄子

能子

ひろ子

白溪子

元紀

いわゑ

みつ子

年代

たず子

義子

透太

鹿太

佐江子

萬的

夜船

富貴子

哲子

勝紀

トミエ

秀子

飼犬とともな会話して独り
子離れの親と歩かず一年生
壁土のおい春の香もまじる
サクラ咲く仮設校舎のランドセル
大寒も今日はゆるむか貰い風呂
雪柳元の家にまた住める幸
世紀末突然サリンなどと言う

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

太陽の下で愚かな小競り合い
書へ命通わせ墨の濃くうすく
声囁らずほど正論は光らない
よく弾む男で妻が手綱曳く
だれにでも書けそうな櫛莫山
煩惱を断ち切るように写経する
罪いくつ聖書は棚に置いてある
いち度だけ口紅で書く火の便り
ひらがなの文字美しく春の夢
父蔵書はらりと落ちた花葉
自分史に懺悔ばかりを書き綴る
アウトロー落ちこぼれにも陽は注ぎ
陽の当たるうちに身辺整理する
太陽を浴びる素顔に嘘はない
太陽の黒点増加する不安
ジャンプする若さ太陽からもらう
太陽のタクトで回る花時計
太陽と水と空気のある安堵
亡妻に似た仲居に多い目のチップ
槌音が弾む鎮魂歌の街に

絹子 春蘭 涼子 石舟 まさお てる 房子 克子 紀久子 栄美子 白光子 金太 武春 裕美 好笑 紀子 紀美女 千寿子 柳宏子 三男 利治 吞天 さち子 美子 三枝子 雅愿 稚代

組を弾ませ春の膳を盛る
ポケットから過去の名刺が弾み出す
シルバーの恋愛桜が弾ませる
のせられてハ調が弾む喉仏
お喋りが弾む菓子皿空にして
大声の約束だから信じよう
思い出し笑いが声に出してしまう
産声へ歓喜に満ちた夜が明ける
叫びたい声呑みこんで耐えている
本当の気持ちを書いたのにあふた

川柳塔唐津支部 久保 正剣報

さし入れるズボンの軽く春の色
一点を凝視している三角形
城頭の桜散り際知っていた
他人ごとでないサリン禍に胸痛む
来る来ない易が大好き雨女
御法話に右も左も舟を漕ぎ
新人のエラー大きい方がもて
天皇の馬が綴った回顧録
日向ぼこ猫も欠伸をしたいころ
新聞の包みはないか見まわして
カナリアは悲しからずや毒見役
東大卒望まぬ農家嫁欲しい
一票が大もてします選挙戦
古希過ぎてまだ呑めそうない酒
音痴だが軍歌だけなら唄えます
ブラッシング愛大喜び目を細め
突然の愛の告白とまどえり

輝子 寿子 晶子 めぐみ 英子 正博 和重 佐代子 美羽 克子 実 虹汀 旭恒 高明 タミ 四郎 久仁於 主 幸夫 晴子 朴竜 ふさ子 喜久亭 治幸 青琴 紀一

ゆとりある生活の講話心急ぐ
弾まなくなったピアノとフルムーン
ちよ 正剣

川柳ささやま社 酒井 靖子報

そろそろと二世誕生待つとする
ねじ一つ見つからなくて夜が白む
いつか見た夢のつづきへ眠りたい
先日の笑顔へ嫉とる喪服
エプロンが似合う私の人生路
同情の言葉の裏がよみ切れず
にらんでも親の甘さを子は見ぬき
同情もたび重なれば愚痴と聞き
ネクタイの似合う男の靴磨く
饒舌と無口で似合う夫婦仲
道連れの愛が俄かに燃えたがる
蹟くとにらんでくれた父の詩
一張羅似合う帽子を嫁に借り
手品する俄仕込みを見抜かれる
似たものの夫婦で鈴を振りつづけ
へそくりがあると睨みはつけてある
同情が過ぎて毒矢の的になる

サークル檸檬 小林 一夫報
インチキを知らぬロボットの一日
インチキをひっかける者かかる者
インチキが笑うて通る春の噴水
タンポポの一面に生きている自由
泣き叫ぶより泣かぬショックが身を焦がす
しつかりと子供を抱いたのは昔
ちよ 正剣 純子 恵美 美智子 芳野 多美子 すす子 市三 八重子 素水 とみ子 つや子 ヒサ子 和子 富美 靖子 希久子 雅子 薫 あずき 房子 みつ子

— 104 —

外向きに幸せ演じる空しさよ
空想が止まるとテレビをつける
条件の裏側エゴが見え隠れ

川柳塔鹿野みか月 土橋

バレンタイン素敵な過去もありました
枯草の下で新芽が春のぞく
蕾から一人前の真似をする
袖の下から生まれる疑惑たち切れず
表現の自由が一人歩きする
その先を読めば涙が止まらない
真実を読んで眉毛を動かさぬ
先頭の蟻を見つけたことがない
赤い糸で選んだ人と離れない
割れ鍋に似た綴じ蓋を選っている
人はみな選ばれ生をうけてきた
生きたいがボトリと選に洩れている
古い傷消そうと死ぬまで悩む
古くとも心に古る枯れすすき
歪みくせあつて古釘押けない
いやなこと水に流して明日を向く
一口の水に生氣もよみがえり
水車ことこ時を刻んで春うらら
水増しをした小遣いをねだりだす
水のようにさらさら暮したいものだ
名水を呑んで方言かみしめる
朝水が生命線を左右する
覚悟して別れの水を含ませる
逢うが別れ指の隙間を逃げる水

桃風 草風 佐加恵 螢報 三千代 幸枝 実満 隆風 喜与志 和子 睦子 かつ乃 富久江 節子 茂 福人 保子 くに子 きみ子 早苗 八重子 富恵 孝男 武子 菊乃 久枝 みさ子 宣子

春になって水はゆたかな貌になる
湧き水のそばに蠟燭立がある
老いてなお夢を求めて紅をさす
口紅が真つ赤な嘘を笑っている
大好きな口紅だけ無理になる
春はあけぼの口紅はさくら色

川柳塔まつえ吟社 恒松

手品師の鳩のストレス聞いてやる
うっかりと種をこぼしている手品
世渡りが下手で手品がわからない
四月の銭手品のように消えて行く
妻と子に見せる手品はできそうだ
心の窓を開ける手品はまだ知らぬ
快調な回復ですと聴診器
快調な箸で笑顔の共白髪
快調さ見せて女のサーフィン
快調な証くりやの灯におきる
快調が謀反を起こす日が恐い
快調で笑い袋が過ぎらない
風呂敷に包んだ過去が喋り出す
風呂敷に思をいっぱい受取りに
唐草の風呂敷に沁む母の意地
風呂敷に包んで返す受けた恩
風呂敷の大きさを母受けとめる
風呂敷を解かれ自由になるみかん
虎の子を抱いて薬草干してます
虎の子が形見分けから日の目見る
虎の子を落とした夢に目が覚める

汲香 はるお 明美 弘子 孔美子 螢 叮紅報 久枝 きみえ 一葉 清子 雄々 静恵 茂美 満江 早苗 房子 義良 与根一 邦代 螢 長三 米子 知恵子 寿美子 太泡 友子 みえ

虎の子の年金抱いて旅に出る
虎の子で春のドレスを買いました
虎の子の置場誰にも話さない
胸に灯をともし先輩のちけです
先輩と知事に言われてうれきさい
先輩の髪にひとひら桜散る
先輩がかかげた旗だ守らねば
先輩と歩幅合わして胃が痛む
先輩の陰口を聞く地獄耳

京都塔の会 松川 杜的報

束の間の苦勞も愛で四季楽し
つもる話苦勞話が雫する
追伸へ苦言を足して締めくくる
つくばいに苦勞ばかりの螢気楼
略図には書いてなかった行き止り
サクラも入れ略満席の録面とり
侵略の歴史の汚点語りつぐ
略図片手に確かめてみるテレカード
略歴は過去の栄光ばかり書く
自分史に省略したい項がある
省略が巧みに効いた入選句
山菜取りに行つたふたりが帰らない
雑草は摘んでも直ぐに伸びて来る
春を摘むその指先に土匂う
よもぎ摘みいつか合唱春の歌
男子厨房に入つて摘み食い
何もないけど芹を摘むおもてなし
おっちゃん摘むとしおれるレンゲ草

多賀子 文子 佳江 蘭水 鶴丸 桂子 静江 叮紅 紫香 友照 百合子 欣之 颯云児 波留吉 瀧小 芳子 福子 英一 庸佑 磯 圭坊 求芽 武庫坊 杜的 飛鳥 ただし

摘み草をした美代ちゃんも孫二人
無駄になった切符一枚持っている
一枚のチケットそれはわたしのコンサート
よれよれの切符二枚の長い旅
あの孫が成人あんな事こんな事
掛ぶとんかぶり地震のゆれに耐え
早春の陽へ命しつかり抱く桜
往診のお医者さんと初対面の笑顔

川柳高知

川竹 松風報

一円を誰も拾わぬから拾う
街角で拾った恋が真珠婚
浮動票拾う笑顔を作らねば
余剰米だいて落穂を拾う老い
拾われて財布の中身恥をかき
サクラサイタかお隣の笑い声
花一鉢やと貰う気を取り戻す
知らん顔したい相手がこちら向く
年金を杓子定規の申告書
大陸の黄砂日本を春にする
親の顔知らずに巣立つホトトギス
坂道を母に合わせてひと休み
広々と国境の無い渡り鳥
レッスン中らしいうぐいすまだ音痴
大空を知らず孤独な尾長鶏

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

正坊	豊次	森子	年代	てる	笑子	達子	水客
佳風	孝雄	京子	功	快風	春枝	さち	幸
竹萌	朱坊	三風	三郎	和子	千鳥	松風	

ツアー待ってる朝の時計台
不意の客美人で舌がもつれ出す
震災を引き擦り客のいない宿
今地震が来たたらどうしよう風呂の中
遠来の客をもてなす妻料理
来客が女で奥が賑やかだ
留守電の花見のさそい弾む声
目で舌で春を味わう桜餅
ライバルの奇抜な策に負けました
猫の目を円満にした向い風
喉仏 言いたいことを溜めている
罹災した寺のさくらも見頃です
平静に酌いで円熟味をみせる

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

向西	勇次郎	昌子	夢之助	十四郎	紫香	まさ	六浦	弘治	澄子	美智子	鹿太	歌子
野草	佳女	季芳	玲子	幸子	節子	とみお	螢	雄見	杜々	一浪	かつみ	和枝

団体を取りまとめる目のくばり
目を洗うとても立派な山がある
今日散った花びらは今日掃いておく
サイコロを振って結んだ妻ですよ
結び目が解けて男女の恋終る
マニアがたたく刀剣不法所持
包まなくても結ばなくても大丈夫
土産物もらうと帰る孫がいる

川柳藤井寺

高田美代子報

定刻にきつちり発車空のバス
きつちりとはまつてもた敵の罠
きつちりとした性格で肩がこる
内緒話が漏れない窓に変えてみる
妻きつちり夫窮屈たまりません
折詰の寿司きつちりと詰めてある
明治生れが杓子定規な事を言う
つり銭をきつちりくれた販売機
補聴器を外しきつちり聞いておく
ずる休みたまにはほしい二日酔い
黒幕が仕組んだ狭い舞台裏
狡いやつ観音さまが見たはるよ
狡い事黙って見てる偉い人
狡いことしてないのに鳩の糞
もうすこし生きていたくて狡くなる
狡い男のふところにある風見鶏
ざんげする壁にずるさを埋めました
酒の上でしたと逃げるための酒
四ツ角に死角をつくる高いビル

博丈	よしえ	喜与志	きみ子	幸枝	早苗	石花菜	弘朗
史郎	利武	登子	恒雄	キミ子	智久	一屯	六點
しげお	正一	志洋	昭水	扶美代	敦子	美代子	吸江
悦子	美房	修六					

人生の吉凶四ツ角で決まる
四ツ角で軽い噂がすれ違ふ
四ツ角の花屋で咲かず長談義
四ツ角に来てりーダーが試される
沈丁花咲く四ツ角で歩を止める
点滴の四ツ角の窓無表情
湯豆腐の四角の中にあるなごみ
人生の四ツ角運がつきまとう
四ツ角の地蔵地獄を知っている

川柳大阪

坊農

柳弘報

焼肉の匂いに釣られ途中下車
ごぶさたを詫びて彼岸の墓まいり
朝霧の川面がすめて啼く千鳥
何時見ても清楚真珠の似合う女
人文字がきれいに咲いてる甲子園
咲きはこるバラにも刺と言う怖さ
菜の花の香りにはずむ万歩計
咲く花に丹精こめた父唄ぶ
定年という花妻に持ちかえり
規則から服の着がえを教えられ
お手盛り規則ジワジワとけてゆく
知らぬ間に妻の規則にしばらく
暗黙の規則信じて三十年
定年の規則をかえて今日がある
不規則が胃の半分を食いちぎり
スキのない人は近寄りにくい
大量のリードへ油断した一球
水割り油断氷の溶ける音

みのる
治子
愛子
射月芳
絹子
与呂志
春蘭
昭子
和樹
信醉
美子
咲笑
雅巢
醉照
美津留
重人
河南子
一步
良花
柳昌
鉄心
美花
和子
末坊
太元
推高
洛醉

それからはウサギ油断はしてません
油断したらしい美人の大あくび
言い訳を気ままに済ます歳になり
酒だけは今日も気ままに飲んでます
気まま言う子供に自分重ねて
末っ子は極楽トンボそのまま
掌で気ままをさせてあげて
聞く耳を持たぬが故の無知となり
最高の気まま一人で死んでいく
スカートをめくる気ままな風が好き
にんげんの気ままへ神は地を揺すり
油断一つ自信過剰の落し穴

翠洋会

米田

恭昌報

老いの春初冒険のお茶の味
冒険はできぬ子がいる妻がいる
困つたら来いと背中を押してくれ
年がいもない冒険はしなさんな
長雨で家族がトドになる休み
毎日が冒険余震まだ続く
使命感冒険もするカメラマン
生涯現役磨き続ける父の靴
通信販売老いの秘密をひとつ買う
宝石カタログ届いてからの乱気流
一人旅したくて世界地図を買う
盆暮れの義理カタログが迷わせる
八方ふさがり風穴あける旅に出る
地すべりの気づかうとこへ長い雨
長雨にロマンを拾う石畳

敏
まつお
与呂志
司
希久志
かよこ
青道
しげお
笑風
一男
金太
柳弘
たま子
英一
さと美
正坊
澄子
恭昌
正雄
希久子
宏子
楓
蛙
志華子
ひろ子
千梢
宣司

カタログに酔ってしまったのが不覚
胆つ玉母さん冒険けしかける
母の日に母がでてる主役の座
ノラになる冒険もなくときめかず
なごやかに嫁と母との中に立ち
役受けて手抜き家事が気にかかる
生きるためカタログ持つて歩く職
土地付きはカタログだけで終りそう
主役にはなれぬパセリの瑞々し
知っていて活断層の上に住む
長雨に打たれて泣いて花が咲く
プランコを精いっぱいに漕いでみる

むらくも観桜句会

藤井

明朗報

半分が崩れた家に小猫鳴く
曼陀羅の痛みを包む夜のとはり
回重ね記念の二字が光り出す
孫の守り積木つんだり崩したり
太い字を書いて小さな義理包む
お祝いも悔みも包む花の春
衰えをみせぬ記念の夫婦ゴマ
さくら咲く花の思いに包まれる
自己嫌悪積木崩しの風に逢う
私の終は見事な安楽死
いただいた記念のペンがよく書ける
こんな時崩れる膝が欲しい夜
肩書はないが見事に生きた亡父
風呂敷の包みへ迷い押し込める
拍手鳴り止まず花百人百花

佳秋
久峰
光子
登志子
綾子
照子
兼治郎
みずき
みつ子
叔子
東雲
鬼遊
紫香
青湖
叮紅
正朗
きみえ
房子
蘭水
寿美子
多賀子
茂美
秀子
鳳笙
清光
茂光
嘉寿子

一山を崩して工場誘致する
福耳に見事ゆれてるイヤリング

独りでは惜しい桜の花ぐもり
お別れの記念日ひとり海に来る

温めた夢が崩れる旅ブラン
包んでも包みきれない親の恩

荷崩れを二人で直す老いの坂
花の小さな愛の夢拾う

さくら見に天気崩れぬよう祈る
あつさりとういで見事な並木道

小春日和崩れるごとく横になる
気配りの包みは内緒母がくれ

花の古都振袖包む京言葉
惜しまれて去る日の握手あたたかい

夫婦別姓家族の絆崩れそう
川柳塔おとり

上田 俊路報

罪だけを背負い羊の群哀し
たんぽぽが群から巣立つ風を待つ

群に居て山の高さが判らない
灼熱の恋に周りもついに溶け

なべカマを溶かした昔忘れない
春風に凍てた心も溶けてくる

たつぷりのスープに愛が溶けている
時々は付き合ひ酒にはめはずす

時々は夢で会いたい人がいる
時々は戦地の夢で起こされる

時々は仏にすがる修羅生きて
時々妻の手料理はめてやる

峰雪 ゆき子 義良 一葉 朝子 仲子 美恵女 清吉 婦美 文子 久仁 藤子 大門 芳子 明朗 千秋 幸次郎 しげる 静枝 真一 由多香 愛恵 永仙 孝子 崇 一穂 余志身

時々はこころを洗う旅に出る
時々チャンスはまだか神に問う

時々人間のエゴ恥じている
護国神社の跡の嵐に竹が哭く

やぶ椿風のざわめき聴いて咲く
遠い日の想い出誘う風に会う

春風私の夜叉に似て困る
花や葉の詩にえんぴつ負けている

豊中もくせい川柳会 田中正坊報

裸一貫 信用だけが取得なり
脇役の一人 寡黙な信用度

憧れの人の色紙を飾っている
飾るのはもう止めにするうすい眉

肩書きの飾り自分を見失い
小じんまり傘寿を飾るイヤリング

夕日赫々お地蔵さんが飾られる
人柄は飾りつつ気のない彼が好き

民芸店に素顔美人がいてはやる
人死んでいつもの店のいつもの時計

気候よし夜店昼店待つ金魚
バター臭い店の人気に並ばされ

病院のとなりうまいコーヒード
その時がくるまで生贄平和です

追いついて追ひこせ余命さんある
泥棒以外なんでもしたと生きている

金魚鉢の金魚と遊ぶ四面楚歌
意に添わぬ靴を大事に履いている

嫁の世話して受けて恩返しとく

宏章 半畳 俊路 みさを 艶子 友子 ひかり 芳子 正坊報 計光 真柳 智子 福一 ただし 杜的 落児 一笛 武庫坊 薫 知香子 悟郎 慶子 英子 瀧小 石舟 きく子 芳子 白溪子

単線の野越え山越えきいだなね
晩春に足を投げ出す掘炬燵

いい策も出ずにリングの丸かじり
震災で傾く家にユキヤナギ

震災をくぐり今年も来たき煮
豊中もくせい川柳会 前月分 田中正坊報

春宵一刻 夢二の女と酒を酌む
おでん屋の酒は一合で足りる

目立たない姿で春を待つっている
立ち姿 妻の和服に二度惚れる

おとぼけの姿が似合う年となる
さよならのうしろ姿は見ぬことだ

寝姿も老人らしくなった父
容姿には自信 履歴書出しておく

信じてても信じてなくても明日になる
茶柱を信じて今朝も職探し

来迎を信じた母のデスマスク
血縁が特に味方と限らない

挨拶のヒント雑談からもらう
古新聞をめくる 少年は無一物

冬帽子帰ってこなくなる散歩
頑張れの糸口いまだ見つからぬ

監督の起用裏切るメッタ打ち
鬼の面外して鬼が病んでいる

一人子を童話のように着せる親
指の間をこぼれる春の音符たち

姿見の中の私が他人めく
いきさつはどうあれ花が咲いている

紫香 圭坊 明光 博史 正坊 杜的 紫香 武庫坊 一笛 吉太郎 慶子 博史 重人 きく子 知香子 正坊 悟郎 白溪子 薫 つえ子 瀧小 計 芳子 明光 源一 英子 寿美子

川柳の眼

田中 薫

無傷の私 転がる人形の首

涼子

被災された方々の痛恨の叫びは、巧拙を超えて、私の胸に迫ります。これらの作者の幾人かは、ふだんは平穏な日常性にまみれて、趣味性の強い作品を書いてこられたのだと思います。人間は社会の中で生きてゆくためには、概念でものを考え、日常性を繰り返しながら、言葉を概念で括ってゆきます。知識、思想、感情を集約した概念語は、教育によって普遍性を持ち、従って伝達性に秀れているからです。

ところが、右に掲出した作品は、いずれも概念語によりかかっています。

自分の視点で見たこと、生の心に触れた想いを、蛭が砂を吐くように、噴出しているのです。それこそが詩であり、川柳ではありませんか。被災を受けた人たちは、地震という外的な力によって、日常性の膜に覆われた心に、穴を開けられたのです。穴は暗くて深けれど、一人一人の生の心が息づいています。深い穴の底から表出される、非日常の言葉は、私を感動に誘い、文学や芸術といった、人間の生きてゆく上に一見必要と思われるものの、存在の意味を教えてくれるのです。そして、同時に、秀れた詩は、非日常の眼と心から生まれることを知ります。

言いかえれば、秀れた詩人とは、心の疵口をいつも覗き込んでいる人、暗い穴を覗き込まずにいられない人、と言えましよう。

地震、核、交通戦争を持ち出さずとも、人間は、絶え間ない訣れ、正確な時計にいのちの細胞を食い潰されてゆきます。危機は、私の隣に、素知らぬ顔で佇っています。存在を脅かすその顔が、見える人、見えない人。

一月十七日 晴 街がつぶれた 一夫
避難所の毛布の上の小さい砂 夢草

直接の被災当事者でなくとも、詩人の想像力、鋭い感受性は、被災地の痛みを、己の痛みとして感じ取れるのです。

見せかけのモラリストや、自戒のポーズ、手を汚さない励ましの言葉、自分は決して傷つかない、読み捨てにされる批判句なるものに、短詩、川柳が泥まみれになってゆくのは本当に辛いことです。

最後に、詩と無縁な言葉の羅列、概念と日常性を一歩も出していない、いわば川柳を自ら侮辱するものをいくつか並べてみましょう。

ライフライン断たれ人智を試される

震災で消えた文化を思いやり

復興に向けてガンバレ神戸っ子

ストレスが溜っていたか震源地

消えてしまった風景忘れたりしない

地震の句は、被災の当事者と、程度の差こそあれ、恐怖の底にさらされながら、幸いにも、人的・物的被害を免れた立場、いわば、非当事者の作品に大別できましよう。

震度7 名も無い茶碗生きのびる 宣子

放心をくるむ毛布の一枚に 弘子

眼つむれば地震の中の炎が迫り 助六

陽は昇る橋は架かっている筈だ 哲子

抱き合って声掛けあって命あり 能子

死体検案す即死であったこと願ひ 俊和

本社 五月旬会

五月八日(月)午後五時半

メンズファッションセンター

日差しはすっきり初夏、汗ばむほどの陽気となった連休明けの八日、九十八名の出席によって五月旬会は開催された。

お話は西田柳宏子さん。報道され続けているオウム真理教疑惑を中心に、最近の世相に触れながら話題を展開された。

今、最も視聴率の高い番組は、オウム関連であるという異常さ、エリートで将来有望な若者が洗脳される恐ろしさ、全容解明に程遠い根の深さ、一方では上九一色村へ観光で出かける人もあるという世相の不可解を嘆く。

混乱の時代ではあるが、我々は川柳による輪を大切にしながら現代のこういった事件を敏感に句に取り入れ、世に訴えていくこうではないかと結ばれた。初出席は摂津市の井上源一さんと八尾市の大内朝子さん。

月間賞は海南市の三宅保州さんに輝く。

(司会) 岳人 (記名) 射月芳・シマ子

(受付) 美房・森子・哲子

席題「貯金」 松本文子選

貯金箱人間臭い音がする

ボランティアやさしい心貯金する

貯金には縁なし今日も米作り

あの頃の苦しさ語る貯金帳

子の夢を知ってる私の貯金

島一つ買う気で励む貯金帳

欲しいものないのであくびする貯金

大丹のはずの貯金が泥の舟

残高を思わぬことにして眠る

貯金する意欲失う震度七

貯金帳空っぽにして義理を立て

文無しに貯金貯金とやかましい

貯金が悲鳴あげてるボランティア

祖母の遺品に百円という貯金

災害の役にたつた貯金帳

魂の貯金を増やす旅に出る

目減りする貯金に合わす熨斗袋

強風でボロボロ僕の貯金帳

玉手箱と交換したい貯金箱

良いことがあったら入れる貯金箱

子の貯金瓶ごと持って瓦礫ふむ

息子よりたしかな杖だ貯金帳

義母逝つて思いを汗た貯金帳

クルマ買ってパイロットの貯金を積み立てる

貯金額といのちの額をふと思つ

後悔をしても手遅れ貯金ゼロ

音のする内は余裕の貯金箱

銀行へ行く顔入れる顔に見え
あの地震に貯金通帳ばらされる
孫が来てすっかり目減りする貯金
貯金なし僕は口笛ふいている

佳

貯金など零に近いが花を買う
静を残さぬ程にある貯金

義援金孫がはいた貯金箱

古い古い蝙蝠傘で貯めている

ばあちゃんの貯金は誰もさわれない

人

残高と余命をつまく合わせねば

地

億万の貯金と思う優しい子

天

姑となる愛語いっぱい貯金して

軸

献血二十回 貯金をしています

兼題「減る」 小林妻子選

目減りする株に暮しをゆすぶられ

友達がひとりふたりと減っていく

順調にスリムになったダイエット

わたくしの値打ちが減ってきた年金

今死ぬと屋台の客が減ってゆく

忌に集う親族減りぬ胡麻豆腐

気にかかるめつきり減った父の酒

減らず口叩き癒せぬ傷を負う

減給で軽いけじめをつけました

悟郎
たもつ
メ女
ダン吉

美子

智子

恭昌

森子

和子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

智子

警察を出たら煙草が減っている
減量の望みははるかレオタード
減ることはないが汚れていく空気

片減りの靴に生き様問うてみる
水量が減って対策考える

腹減って僕の機嫌が悪くなる
金利減る減ると金持ち嘆きはる

口数が減った祖母への便り書く
酒の量減ったと妻に言うておく

とてもスリムになったね冬の荷をおろし
お腹減る頭が冴えてきたようだ

決心がついたら腹が減ってくる
ひとつずつ老母の梅十し減ってくる

パチンコ屋の方へ方へと靴が減る
定年後敵も味方も減りました

被災地をしのび晩酌減らして
減量を忘れてしまふ母の味

減った減ったと体重計と仲が良い
酒減らす努力を誰も信じない

男らしい男が減ってゆく世相
すぐ腹が減るので元氣と思つて

脳みそがだいぶん減つたもの忘れ
佳

減る筈もないのに乗ってみる秤
片減りの靴の重さは子に言わぬ

帯に手をいれてうどんを食べ残し
卸し金にすり減らされているのち

煩惱を減らすと見える風の彩
人

しげお

正坊

千度

利武

美房

英子

紫香

紫香

森子

ダン吉

しげお

茜

美房

保州

保州

典子

たもつ

一風

雅文

月子

鬼遊

房子

英子

頂留子

朱夏

楓楽

体重が増えて貯金が減ってきた

地

米びつがすぐ空になるうれしいな

天

大病をしてから小言減ってきた

軸

落選の句に潮が引くように

兼題「きつい」

玉置重人選

きついとは決して言わぬボランティア

坂がきついと嫁にこぼしたことはない

目くばせできつい言葉をすりぬける

活字になるとすこしきつくなる言葉

眉きつく引いて搜している答え

ライバルのきついボールを打ち返す

反論がきつい相手にせんとこう

棒グラフ背にして歩く炎天下

下積みのきつさに耐えて今日の椅子

きつい言葉をかける転ばないよう

飽食のヒト科にきつい核のごみ

きつい目が炎に光る登り窯

3Kの現場にギャルの菜つ葉服

親族会議きつい話になってくる

百円で減給という輪で生きる

救出へ汗とたたかうショベルカー

少しきつい足袋に馴染んだ青畳

そして朝やる気をきゅっと締めるタイ

本当はきつく叱って欲しかった
水車きつい仕事に慣れている

天笑

月子

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

女心を締めつけているコレセツト

きつい言葉は古い簞笥に納めとく

恩を売る男のきつい面を彫る

きつい過去を蝶に話した花の芯

身内からきつい指摘の設計図

坂道のきつさは言わぬ遍路笠

首を切る話に動く花時計

ポップコーンきつい校則跳ね返す

目くじらを立てるとききつい声になる

きついからこそ寡婦を通してこれだの

きつい日差しを喜ぶ老母の米作り

花言葉に託したきついメッセージ

佳

稽古にはきつい師匠の座りだこ

怠ける男のズボンきつくなる

帯きつく締め本心は覗かせぬ

青い鳥捕まえに行く急な坂

きつそうな仕事は妻に押しつける

人

追伸に母は辛抱せよと書き

直腸も胃も切り取って宮仕え

地

心にキスを下さい坂の途中です

天

素振り千本でつかい夢を抱いている

軸

兼題「道具」

宮口笛生選

保州

武庫坊

岳文

雅文

義子

千秀

和子

二南

房子

妻子

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

朱夏

人殺す道具サティアンどんと溜め
 手術室キラキラ光る怖い器具
 人間国宝道具の艶を誇りとす
 オイオイと妻を道具のように呼ぶ
 年毎に化粧道具がふえていく
 古道具生活の知恵活かされる
 小道具に凝って演技が冴えてくる
 めくもりがまだある亡父の道具箱
 鑿 鋳 節 くれた手によく馴染む
 古道具屋少し汚れたまねき猫
 定年離婚わたし道具じゃありません
 頭では整理出来てる道具箱
 器用貧乏いつも道具に使われる
 道具倉 故郷の歴史が埋ってる
 一本のノミで彫られた仏さま
 一流の味を道具に教えられる
 杵柄の道具握った技が冴え
 郷土館古い道具を寄せ集め
 脱サラもいいな道具屋筋あるく
 日曜大工道具は足らぬままで済み
 物好きが家から持ってきた道具
 講釈すきで自慢の道具並べてる
 間が抜けて職人道具手入れする
 それらしい古さで売れる道具市
 存在感ビシリの父の道具箱
 よう使う親の代かある道具
 百歳になっても化粧道具持ち
 手拭いと扇子で落語見せ場に
 茶道具を千利休は選ばない

美津留 鬼遊 萬代的 美代子 友ゑ 武庫坊 勇太 妻子 和子 寿美 庸佑 三男 稚代 岳人 利武 妻子 落児 和子 文秋 しげお 弘直 愛論 美房 澄子 しの 東雲 紫香 岳人

佳
 小道具に種も仕掛けもある手品
 素人には大道具をさわらせぬ
 腕よりも道具自慢というゴルフ
 流石プロ道具に金をかけている
 道具の手入れして職人の今日終る
 名人は道具他人に触れさせぬ
 道具なら耐用年数来た身体
 さすがさが玄人道具の底光
 天 軸
 農機具の機械化高い愚痴がある
 兼題「だんご」 小出智子選
 きびだんごもらってからの泣き笑い
 わらべ唄が聞える母さんのだんご
 黍だんご 鬼の里でも売っている
 だんご鼻三枚目にはうってつけ
 だんご屋の本家争いけりつかず
 えもいわれぬだんごの味は七代目
 参拝のあとはゆっくり串だんご
 草だんご亡母の匂を思い出す
 天王寺のみたらし団子母に買っ
 なじられただんご心あり仏の日
 草だんご老母がうれしそうに食べ
 葉桜の寺でだんごを売っている

千秀 トメ子 美房 三男 萬的 悟郎 文秋 あやめ 笛生

オタンゴドワゾちさいお手々は泥だらけ
 花よりもだんごの店で褒めている
 戦争を知らぬ息子とだんご汁
 都おどりのだんごわりない仲と知る
 おだんごにされて個性は丸められ
 ダイエット中だんご横目で見て通る
 きびだんご知恵がいっぱい詰ってる
 深刻な恋は似合わぬ草だんご
 すいんとん食べて五十年巻戻す
 野心も持たぬだんごにかぶりつく
 こことから旨いと思う草だんご
 むかし唄がたんと詰っているダンゴ
 きびだんご無いけど彼についてゆく
 どちらかと言えはだんごに手が伸びる
 辛い日は眠るダンゴ虫のように
 べっぴんさんとみたらだんご食べてきた
 夕焼けこやけ忘れていった砂だんご
 だんごより花を愛する人と居る
 佳
 いい出会いだったと思うきび団子
 串だんご豪快に口あけるべし
 おだんごへ片目を開けている地藏
 新任の上司きびだんごを配る
 平成の子は騙せないきびだんご
 人
 草だんご裏もおもてもない友と
 地
 きびだんご勝った負けは言うまいぞ
 天
 みつ子 紫香 朝子 楓楽 希久子 雅文 天笑 朱夏 天笑 美子 とし子 しげお 寿美 三男 文子 冬葉 和子 岳人 洋 義子 哲子 源一 妻子 楓楽 朱夏

草だんご老いて仲良き兄いもと

軸

きびだんご人の好いのもほどほどに

みつ子

兼題「痛み」

橋高薫風選

レジャー帰りの目に痛々し神戸の灯

正雄

良心の痛みはないのか秘書任せ

金太

サクラチル痛みは君に解るまい

度

桜満開他人の痛みはや忘れ

三男

地球の痛みその場しのぎの膏薬で

柳宏子

痛い目にあえばわかると突き放す

柳伸

痛み分け粹な裁きやなと思つ

いゝ

歯が痛む善人ぶつたその日から

稚代

痛くない歯医者さんですありがと

岳人

ハンカチに包めるほどの痛みかも

愛論

折り紙にたたみ込んでる痛み胸

頂留子

変身のチャンス痛みは礼をいう

千歩

ばあちゃんがいと痛さが倍になる

千歩

嘘ついた母の涙が痛かった

吐来

アルバムに痛みが残る青春譜

吸江

痛みを隠す饒舌かも知れぬ

一風

遠い日の痛み忘れて酌み交わす

稚代

昼の酒 痛み分け合う人と飲む

千秀

かさぶたを剥がして痛いところを突く

千秀

不器用で他人の痛みまで背負う

楓子

警策をいくつもらえば無になれる

佳秋

痛み去り微笑戻ったデスマスク

美子

火葬場の扉にいつもある痛み

みつ子

やっと痛みとれて亡母は壺の中
痛いところ握ってからのよそよそし
痛み分けそれから絆太くなる

典子

私の痛み比べるものがない

洞庵

消えてゆく痛みよ闇があたたかい

三男

滝道に痛みわかる橋がある

文子

公園に痛みわかる椅子がある

寿美

母になる痛み わた毛でふわつとど

智子

胡蝶蘭 人の痛みがわからない

朝子

住

しげお

花が散る痛い思いを置いたまま

いわゑ

基地を持つ街の痛みを知ってるか

ゲン吉

好きだから痛みばかりが残る文

狸村

好きだから痛みをわけてくださいな

朝子

狂えない母で痛みをかくしてる

弥生

人

天笑

たった一回万引をした痛み

天笑

地

照

白い紙わたしの痛みそつと置く

天

引き金を引いた痛みは治らない

保州

火を渡る恋にもあった痛み分け

保州

軸

蕉風

(清記一希久子)

▼投句用紙について 渺湖抄・茴香の花・

一路集(課題吟)・初歩教室は、従来の「川

柳塔用箋」を使って投句をお願いします。

(編集部)

第五回

島根川柳まつり

とき 6月17日(土) 午前10時開場

午後1時開会

ところ 松江温泉 ホテル白鳥(千鳥町)

宿題と選者(各題2句)

「屋根」

恒松 町紅選

「日課」

景山 嘉寿子選

「つなぐ」

佐々木 裕選

「雨」

原 章峰選

「合点」

金築 雨学選

「頑固」

新家 完司選

「明るい」

未定

◎席題なし 投句拝辞

会費 1500円(発表誌呈)

◎昼食は各自でお済ませください。

連絡先 〒690 松江市雑賀町1686

恒松 町紅方

島根川柳まつり事務局

柳界展望

久・岡崎たけ子の各氏。

★北方領土川柳社の第7回北方領土大賞が決定した。

〈大賞〉

遮断機の向こうに還る島がある 結城まさる

〈準賞〉

四島返還本土の狼煙が細すぎる 高橋 稔

返還の訴状が溜まる拿捕の海 坂本一本杉

★函館川柳社の青柳賞が次のとおり決定した。

一席 朝倉大柏▽二席 大橋政良▽三席 羽立愛川

沢井久泰・高橋あきら

★平成6年度の川柳塔みちのく大賞と準優秀作が次のとおり決定した。

満月がストンと落ちた水たまり 長岡 祥子

〈準優秀作〉

手から手へ赤ちゃんといふあたたかさ 肥後和香子

さくらさくら泊まりは花の下にする 對馬 一閃

★平成6年度「時の川柳」作家賞は、安東はつえ・岡田玖美・高岡英子・赤井初枝の4氏に決定した。

★平成6年度「路」年間賞が決まった。

〈最優秀句〉

指一本入れるゆるさで縛られる 大橋 政良

〈優秀句〉

ビルによきによき墓石によきによき世紀末 市川ふみえ

秋の妻受話器を食べ過ぎたようだ 樋口 仁

★平成6年度の札幌川柳社の各賞が決定した。あかしや賞は伊藤紀子、ぽふら賞は吉田えり子、幌都賞は佐藤ゆき子、功労賞は高橋貴

悲しみをだまってる聞いてくれる闇 萩野ふじ子

★「川柳展望」は81号で第6回新子賞と第8回火の木賞を発表した。

〈新子賞〉

わたしにも里の銀杏のよなう骨 鹿内 馨晴

火の木賞は倉富洋子さん同準賞はなかはられいこ・渡辺康子さん。

★いくしま川柳会は平成6年度のベストテンを次のとおり決定した。

①河瀬芳子②田中薫③山本磯④香川水聲⑤倉田正一

春城年代⑦森田栄一⑧黒川紫香⑨都倉求芽⑩田中正坊

田辺鹿太・野瀬昌子・松川杜的・河津正治

★川柳「塾」長寺尾俊平氏の句碑除幕式が4月10日、岡山県久米南町の川柳公園で行われ、橘高薫風主幹や河内天笑・月子夫妻、吉本

菁風氏らが参加した。

背を伸ばし母のんでいる方を見る

★大阪川柳の会は6月2日午後5時からサンケイビル本館3階302号で開かれる。宿題と選者は次のとおり。いきいき▽当日発表▽大事▽住田英比古▽深い▽奥田みつ子▽救う(連記)▽磯野いさむ(各題2句)午後6時締切。会費500円。各題秀句に産経新聞社賞贈呈。

▽同人消息△

■園山多賀子さん(出雲市)は板垣草丘氏に替って四月から島根日日新聞(夕刊)の川柳欄選者を担当

■福元みのる氏(藤井寺市)は日本書芸院四月展で特選に入賞した。

▽お便り△

■小林由多香(参予・鳥取市)「このたび、川柳塔とつとり」を解散し、同人三名・誌友九名で、品格あ

る川柳を目ざして「川柳塔おとり」を結成いたしました。今後とも指導下さるようお願いいたします

▽出版△

■川柳句集「りんどう」熊本川柳会刊(B6判・212頁)熊本川柳界の草分けである田中鳴風・美喜子さんの句と会員二十九人の各二十二句を収録。

■「吉備団子」45集(川柳ますかつと臨時増刊号・A5判・132頁)四八八人の各一〇句を収録。

■「宇宙時間94」(「緑」臨時増刊号・A5判・144頁・2000円)「緑」掲載の会員作品集(五〇音順配列)・近県団体作品抄と渡辺和尾の各地大会選句作品集の3部で構成。

▼計報▲

■寺井ヨ子さん(本社理事寺井東雲氏母堂)4月25日老衰のため死去。95歳。

6 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1 日(木)午後 1 時から 弾 む ・ 人 間 (共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	2 日(金)午後 1 時から 裂く・悪・雑詠(A・B)	尼崎市中小企業センター 阪神尼崎駅北東 5 分 〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
西宮北口 川 柳 会	3 日(土)午後 1 時半から 封・干す・暗い・自由吟	なるお文化ホール 阪神鳴尾駅から徒歩 10 分 〒663 西宮市段上町 6-6-2-202 奥田みつ子
京 都 塔 の 会	10 日(土)午後 1 時から 瓦・直す・多少	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩 3 分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
川 柳 塔 まつえ	10 日(土)午後 1 時半から 薬・嘘・形	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町 1686 恒松町紅
八尾市民 川 柳 会	10 日(土)午後 6 時から 事実・水溜まり・損・疑う	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北 1-15 宮崎マナ子
川 柳 塔 わかやま	11 日(日)午後 1 時から 誘う・消す・皿	近鉄カルチャーセンター 2F JR 和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺 111-2 牛尾緑良
ほたる 川 柳 同 好 会	13 日(火)午後 1 時から ブーム・緑・冷	豊中市立螢池公民館 阪急螢池駅西へ 150 米 〒560 豊中市螢池中町 3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯 の 花	15 日(木) 正 午 か ら 怖い・不意・投げる・自由吟	高槻現代劇場 306 号室 阪急高槻駅徒歩 5 分 〒569 高槻市宮田町 3-8-8 川島颯云児
南 大 阪 川 柳 会	16 日(金)午後 6 時から 花形・魔除け・八百屋・楽観	玉造老人憩いの家 JR 環状線玉造駅西徒歩 3 分 〒544 大阪市生野区生野西 1-5-2 金井文秋
岸 和 田 川 柳 会	17 日(土)午後 1 時半から 秘蔵・不思議・へま・方便	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩 5 分 〒596 岸和田市上松町 610-85 芳地埋村
川 柳 ねやがわ	18 日(日) 正 午 か ら 潮時・ニュース・担保・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	19 日(月)午後 1 時から 国・持つ・いのち・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩 5 分 〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番 5-801 田中正坊
富 柳 会	22 日(木)午前 11 時集合 作 る ・ 回 復 ・ 自由吟	吟行 天野山プラザホール(河内長野駅出口集合) 〒584 富田林市南大伴町 4-1 池 森子
東大阪市 川 柳 同 好 会	24 日(土)午後 6 時から キャリア・叩く・中年・雫	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉 3 丁目 3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳	25 日(日)午後 1 時から パズル・十八番・輪・結果	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲 8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★「ときどき未知の雑誌が送られてくる。まず、編集後記を読む。これが何というこもないものは、縁のない雑誌だとあきらめることにしている。裏口を見れば、玄関へまわるまでもない。雑誌識別法というほどのことでもないが、編集後記を読むのは楽しい」―外山滋比古『日本語の個性』（中公新書）。こういう読者

の文章から引用した。★西尾某本社名誉主幹は五月十五日午前零時十二分、逝去され、同十七日午後零時三十分から八尾市の八光殿で告別式が行われた。長く川柳塔社主幹として同人・誌友に敬愛され、川柳界に尽された功績は大きい。本号では弔辞を掲載するにとどめ、七月号を「西尾某追悼号」として追悼文・弔吟などを特集したい。（正）

★「私見だが、コラムニストの条件、その一。文章の質が安定していること。三振か、ホームランはだめ。二割八分をコンスタントに打てること。条件のその二。バランス感覚のあること。あつちも、こつちも悪い。この際、足して二で割って

―のたぐいではない。世間が右というときは左、左のときは右、下というなら上、上なら下を見ようとする複眼を備えていることだ。★条件の三。樂觀主義であること。ときには舌鋒鋭く批判しなければならぬのはもちろんだが、マスクを取ってみると、物事を明るく見る機嫌のいい顔が出てこないと困る」―『波』に掲載された作家の水木楊氏の文章から引用した。

ひとこと

川柳にも權威ある賞を

文学界には、さまざまな賞がある。小説における芥川賞・直木賞は、長い伝統があり、最も權威があるとされているが、このほかに個人名を冠した賞が多い。

短詩型文学においても、短歌・俳句ともに協会あるいは書店、結社が年度賞を設定しており、俵万智は角川短歌賞の受賞によって歌人としての地歩を確立した。

川柳では、各柳社がそれぞれ年度賞を設けているが、柳界全体としての賞はなく、かつてあった東洋樹賞も今年から新設された大雄賞も川柳活動を対象としている。

やはり短歌・俳句のように、年間に発行された歌集・句集を權威ある審査員が選考して授賞することが望ましい。川柳の文芸としての地位を高めるためにも、一考すべきだと思ふ。

伏見 二郎

○本社句会場で今年から喫煙コーナーが設けられた。煙草は本人のみならず、周りまでが害を受けるとあれば、致し方ないと言えよ。

て、このようなことはない。理由

○煙草が日本に伝わったのは、一五四三年鉄砲と共にポルトガルからという説。これよりちよつと後、同国の宣教師を乗せてきた船の船員からという説と二つ。

○今では、禁止令が出ているわけでないから、自由意志での断煙は、大変な努力

○煙草が日本に伝わったのは、一五四三年鉄砲と共にポルトガルからという説。これよりちよつと後、同国の宣教師を乗せてきた船の船員からという説と二つ。

○経験者に一度、断煙直後の作句の苦労話や、句に変化があったかなど、聞いて

○以後わずかで大流行になった。近頃、どの会場でも喫煙者は目に見えて減っている。

○経験者に一度、断煙直後の作句の苦労話や、句に変化があったかなど、聞いて

○以後わずかで大流行になった。近頃、どの会場でも喫煙者は目に見えて減っている。

○経験者に一度、断煙直後の作句の苦労話や、句に変化があったかなど、聞いて

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（8月号）

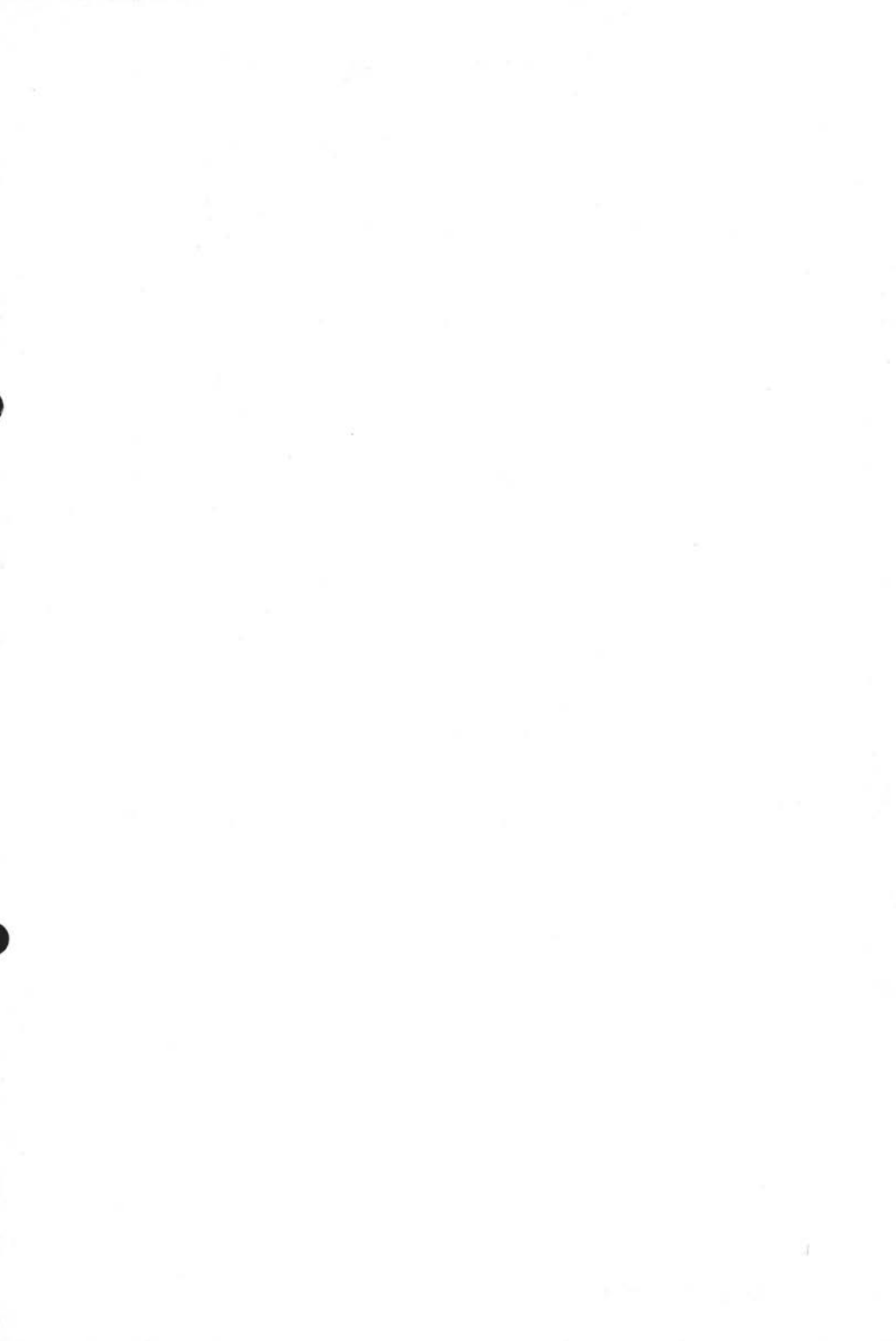
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

課題吟 (3句) 「外雷」
 初歩教室「痛い」(3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友(誌代半年分前納者)茴香の花欄は女性に限ります。

9月号 課題吟「雨」「若い」「仕立てる」
 初歩教室「力」

本社6月句会

とき 6月6日(火) 午後5時半
 ところ メンズファッションセンター3F
 中央区内本町1-1 電06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
 おはなし

兼題 「集まる」「悔しい」「原色」「ひととき」「地獄」

席題 1題 当日発表 各題2句以内

会費 500円

◎4月句会から投句は廃止されました。

本社7月句会 7日(金) 予定

兼題 「蹴る」「こんど」「体験」「ユニーク」「賭け」

夜市川柳募集

第1回「誤り」 高杉 鬼遊選
 ハガキに3句 6月末締切
 投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「駅」 森中恵美子選
 ハガキに3句 6月10日締切
 投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
 「文芸部」川柳係
 発表 6月24日(土) 午前11時5分から
 ラジオ第1放送(予定)

西日本文字放送作品募集

課題「失敗」 森中恵美子選
 ハガキに3句 6月15日締切
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
 大手前ウサミビル3階
 西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成七年六月一日発行

編集兼 橋 高 心 社 薫

発行人 藤 原 童 心 社 薫

印刷所 大阪府阿倍野区三好町二丁目一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06)六九一四番

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

